北谷町文化財調査報告書　第33集

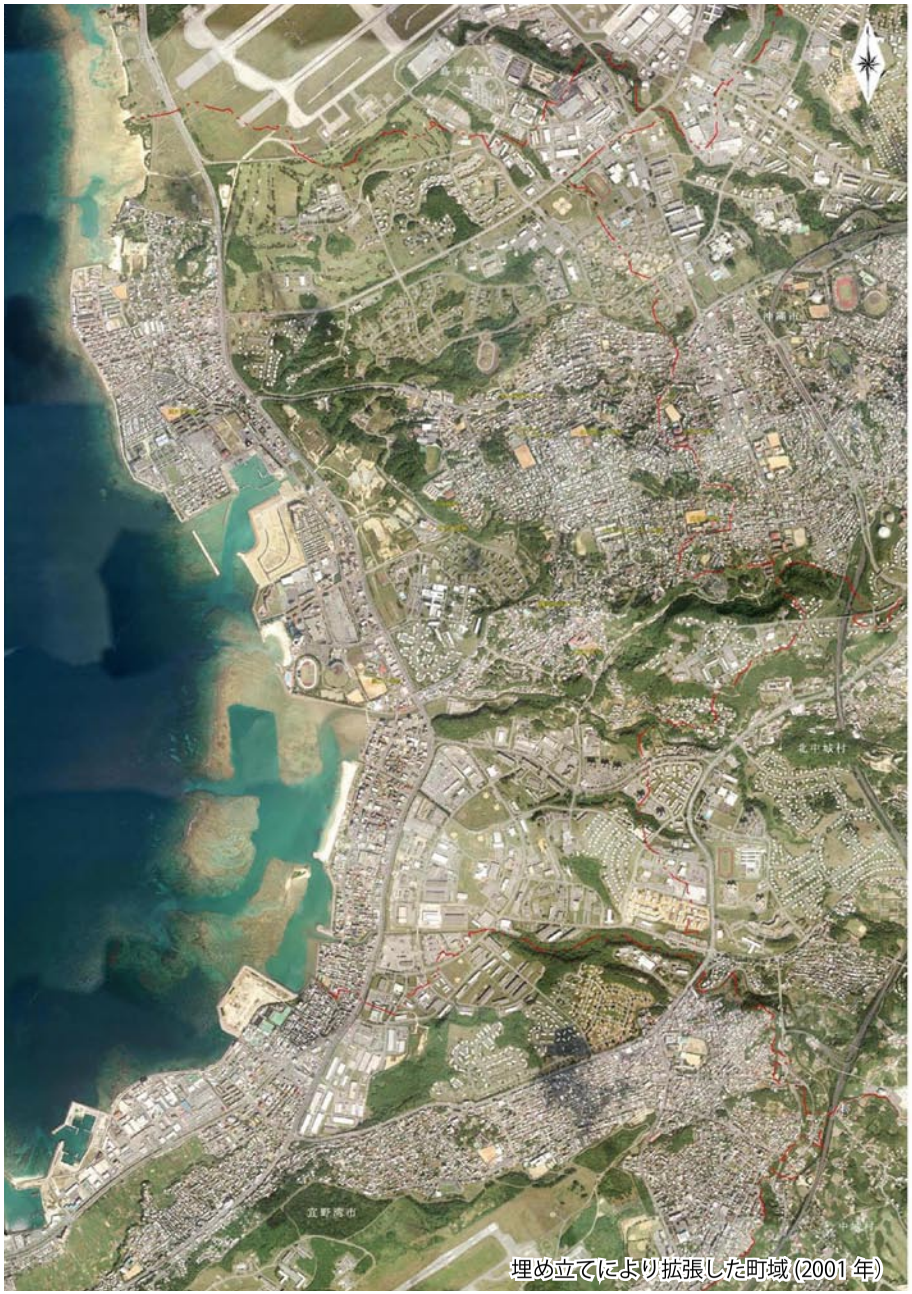
平安山原地区試掘調査

－伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業－

2011（平成23）年3月

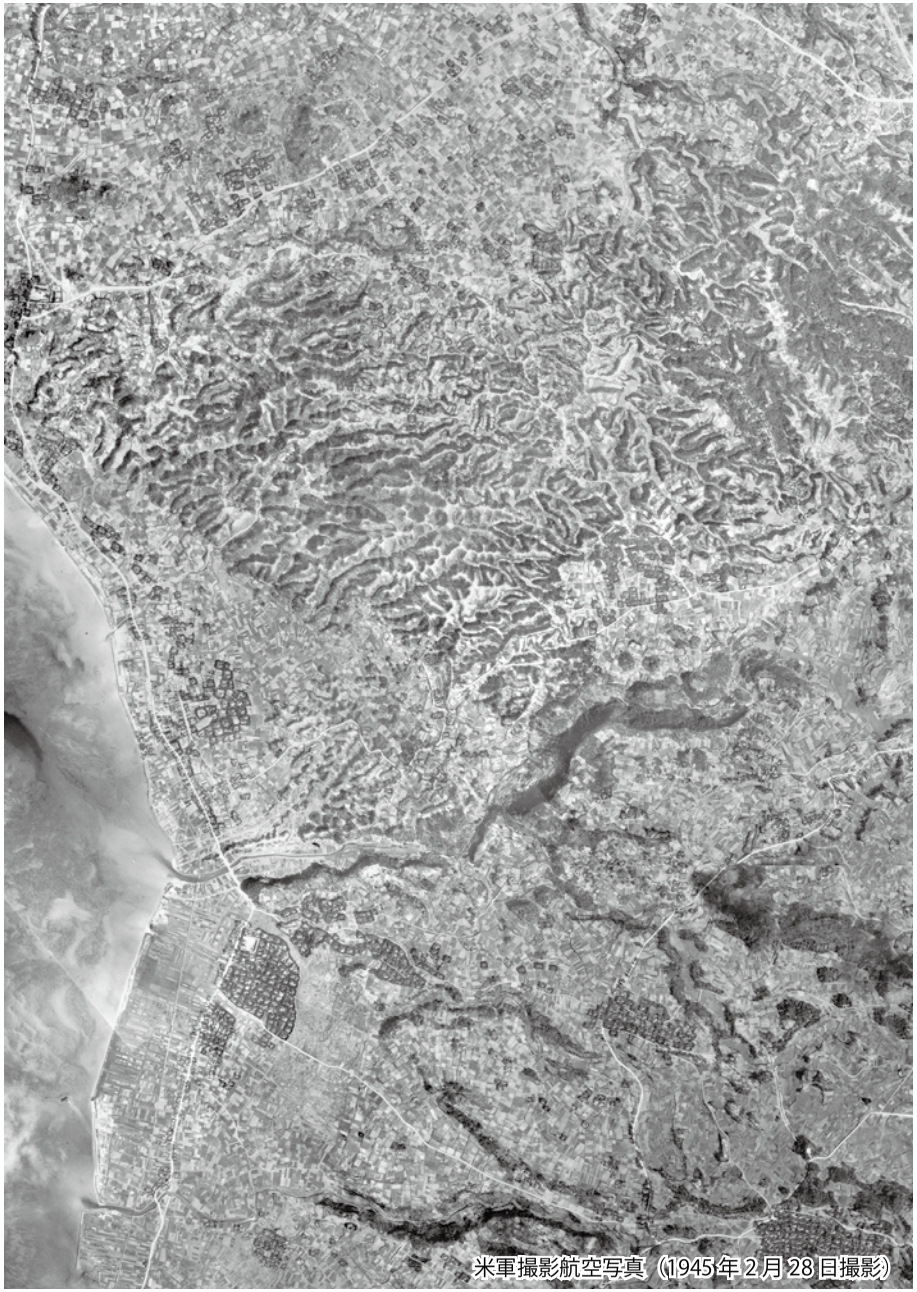
沖縄県　北谷町教育委員会

巻首図版１　調査対象地遠景　上･盛土前　北西から（平成６年）
下･盛土後　南東から（平成 16 年）



埋め立てにより拡張した町域（2001 年）

近年の北谷町



米軍撮影航空写真（1945年 2 月 28 日撮影）

戦前の北谷町

はじめに

北谷町教育委員会では、平成７年度から平成16年度まで、キャンプ桑江北側の大部分において返還に伴う試掘及び範囲確認調査を実施してまいりました。その結果、平成22年２月に国指定史跡となった伊礼原遺跡をはじめ、多くの埋蔵文化財が発見されました。

本報告は、試掘調査が未実施であった平安山原地区の調査結果を収録したものであります。

調査の結果、周知の遺跡である平安山原Ａ遺跡の範囲が拡大することが確認されました。

平安山原Ａ遺跡は、平成９年度の試掘調査で発見されたグスク時代から戦前にかけての集落遺跡で、平安山集落の成立を考える上で欠くことのできない貴重な遺跡の一つであります。

しかしながら、平安山原Ａ遺跡は開発事業に伴う本発掘調査の対象となっており、遺跡の現地保存は大変困難な状況にあります。今後は、本発掘調査によって遺跡の全容が明らかになるものと確信しております。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また、本町の歴史を考える研究資料として御活用していただければ幸いであります。

最後になりましたが、本報告書を刊行するにあたり御指導と御協力を賜りました関係各位に深く感謝申し上げます。

平成23年３月

北谷町教育委員会
教育長　**比嘉　秀夫**

例　言

1．本報告は「伊礼原Ｂ遺跡ほか発掘調査事業」として、文化庁補助を受けて、平成 20 年度に実施した平安山原地区の試掘調査結果をまとめたものである。

2，本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の 1/2,500 地形図（昭和 54 年測量）を元に北谷町役場都市計画課が作成したものである。本報告の方位は磁北をさす。

3，現地作業の一部を国際航業株式会社に委託した。

4，本報告は松原哲志が中心になり、下記の執筆分担者の協力を得て編集を行った。

第Ⅰ～Ⅲ章、第Ⅳ章　第１節・第２節１、第Ⅴ章	松原　哲志
第Ⅳ章　第２節２・９・10・15	上地　千賀子
第Ⅳ章　第２節３・５～８	呉屋　広江
第Ⅳ章　第２節４・16	山城　安生
第Ⅳ章　第２節 11 ～ 14・17・18	島袋　春美
附編	松原　哲志

5，遺物洗浄・接合・復元・実測・集計・写真撮影・図面整理・トレース図版作成などの資料整理は下記の人員で行った。

新垣　栄子　　川畑　良子

6，本書に掲載した試掘調査に関する写真、実測図などの記録及び出土遺物は全て北谷町教育委員会にて保管している。

7，巻首図版２の戦前の北谷町の写真は、沖縄県公文書館所蔵の資料を基に作成したものである。

本文目次

巻首図版
はじめに
例言
第Ⅰ章　調査に至る経緯……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査体制……1

第Ⅱ章　調査地の位置と環境……2
　第１節　地理的環境……2
　第２節　歴史的環境……5

第Ⅲ章　調査の方法と経過……8
　第１節　調査の方法……8
　第２節　調査経緯……11

第Ⅳ章　調査成果……11
　第１節　各試掘坑の概要……11
　第２節　出土遺物……25
　　１．土器……25
　　２．青磁……30
　　３．褐釉陶器……32
　　４．染付……32
　　５．本土産陶磁器……36
　　６．沖縄産施釉陶器……38
　　７．沖縄産無釉陶器……42
　　８．陶質土器……48
　　９．円盤状製品……49
　　10．石器……50
　　11．貝製品……52
　　12．銭貨……52
　　13．鉄製品……53
　　14．鉄滓……53
　　15．軽石製品……54
　　16．瓦・煉瓦……54
　　17．動物遺体……55
　　18．貝類遺体……56

第Ⅴ章　まとめ……60
附　編　第１節　調査に至る経緯……62
　第２節　調査の概要……62
　第３節　調査の成果……62

図版目次

巻首図版1　調査対象地遠景
巻首図版2　上・戦前の北谷町　下・近年の北谷町
図版1　試掘No. 1 …… 17
図版2　試掘No. 2 …… 18
図版3　試掘No. 3 …… 19
図版4　試掘No. 4 …… 20
図版5　試掘No. 5 …… 21
図版6　試掘No. 6 …… 22
図版7　試掘No. 7 …… 23
図版8　試掘No. 8 …… 24
図版9　土器 …… 29
図版10　青磁 …… 31
図版11　褐釉陶器 …… 32
図版12　染付 …… 35
図版13　沖縄産施釉陶器 …… 41
図版14　沖縄産無釉陶器1 …… 45
図版15　沖縄産無釉陶器2 …… 47
図版16　陶質土器 …… 48
図版17　円盤状製品 …… 49
図版18　石器 …… 51
図版19　貝製品 …… 52
図版20　銭貨 …… 52
図版21　鉄製品・鉄滓 …… 53
図版22　軽石製品 …… 54
図版23　瓦・煉瓦 …… 54
図版24　上：脊椎動物遺体　下：貝類遺体1 …… 58
図版25　貝類遺体2 …… 59
図版26　出土遺物 …… 63
図版27　表採遺物 …… 63
図版28　試掘No. 1 …… 64
図版29　試掘No. 2・No. 3 …… 65

図目次

第1図　北谷町の地形分類図 …… 3
第2図　北谷町の地質分類図 …… 3
第3図　北谷町米軍基地分布図 …… 4
第4図　北谷町の土地利用図 …… 4
第5図　北谷町の遺跡 …… 6
第6図　新旧試掘箇所併合図 …… 9
第7図　平安山原地区試掘箇所図 …… 10
第8図　試掘No. 1 …… 17
第9図　試掘No. 2 …… 18
第10図　試掘No. 3 …… 19
第11図　試掘No. 4 …… 20
第12図　試掘No. 5 …… 21
第13図　試掘No. 6 …… 22
第14図　試掘No. 7 …… 23
第15図　試掘No. 8 …… 24
第16図　土器 …… 28
第17図　青磁 …… 31
第18図　褐釉陶器 …… 32
第19図　染付 …… 34
第20図　本土産陶磁器 …… 37
第21図　沖縄産施釉陶器 …… 40
第22図　沖縄産無釉陶器1 …… 44
第23図　沖縄産無釉陶器2 …… 46
第24図　陶質土器 …… 48
第25図　円盤状製品 …… 49
第26図　石器 …… 50
第27図　貝製品 …… 52
第28図　銭貨 …… 52
第29図　鉄製品・鉄滓 …… 53
第30図　軽石製品 …… 54
第31図　マスオガイの殻高−殻長相関関係 …… 56
第32図　リュウキュウシラトリの殻高−殻長相関関係 57
第33図　試掘調査位置図 …… 63
第34図　調査位置拡大図 …… 63

表目次

第1表　北谷町遺跡一覧 …… 7
第2表　試掘No. 1層序 …… 12
第3表　試掘No. 2層序 …… 12
第4表　試掘No. 3層序 …… 13
第5表　試掘No. 4層序 …… 14
第6表　試掘No. 5層序 …… 14
第7表　試掘No. 6層序 …… 15
第8表　試掘No. 7層序 …… 15
第9表　試掘No. 8層序 …… 16
第10表　平安山原地区試掘調査遺物出土量 …… 26
第11表　土器観察一覧 …… 27
第12表　土器出土量 …… 27
第13表　青磁観察一覧 …… 30
第14表　染付出土量 …… 33
第15表　染付観察一覧 …… 33
第16表　本土産陶磁器出土量 …… 36
第17表　本土産陶磁器観察一覧 …… 36
第18表　沖縄産施釉陶器観察一覧 …… 39
第19表　沖縄産施釉陶器出土量 …… 39
第20表　沖縄産無釉陶器観察一覧 …… 43
第21表　沖縄産無釉陶器出土量 …… 43
第22表　陶質土器観察一覧 …… 48
第23表　瓦・煉瓦出土量 …… 54
第24表　脊椎動物遺体出土一覧 …… 55
第25表　貝類遺体出土量 …… 57

第Ⅰ章　調査に至る経緯

第1節　調査に至る経緯

今回試掘調査を行った地域は、旧キャンプ桑江北側に位置する。キャンプ桑江北側地区は平成15年３月に返還され、事前の平成７～９年度にかけ当該地における埋蔵文化財の確認調査を実施した経緯がある。その際の調査に至る経緯や調査手法については「キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査」(註1)に詳細が述べられているのでここでは割愛し、今回試掘調査を行った箇所について記述する。

本町では、平成２年６月の日米合同委員会においてキャンプ桑江北側地区返還を促進する旨が決定されたのを受け、返還後の跡地造成に利用する為の土を集積する計画が成された。当該地区について在沖米海兵隊基地施設技術部不動産課宛へ使用要請し、平成６年度より約17,000㎡の面積に盛土される事となった。

平成７年度からは、前述した試掘調査を行う事となるが、先だって盛土された箇所はその規模により調査対象から除外せざるを得なかった。

平成15年３月にはキャンプ桑江北側地区が返還され、返還跡地では区画整理事業に伴う本発掘調査や、跡地利用に係る開発事業が順次実施された。盛土工から10余年の間に周辺の様相は大きく様変わりし、盛土地においても諸開発事業が段階的に実施されるのは決定事項であった。

過去に行われた試掘調査の結果より、盛土地北西側には千原遺跡（グスク時代）、南側には平安山原Ａ遺跡（グスク時代・近世）、南東側には平安山原Ｂ遺跡（沖縄貝塚時代後期・グスク時代）が確認されている事から、当該地においても同時期の遺跡が確認されるものと想定された。関係部局との調整により、平成20年度内には盛土を移動する見通しが立ったため、盛土移動後、試掘調査を実施する事とした。

平成21年２月には盛土の殆どが移動されたため、平成21年３月２日から平成21年３月25日まで試掘調査を行った。なお、試掘坑の測量や重機による掘削等、調査の一部を国際航業株式会社（当時）に委託した。

註１　北谷町教育委員会　2005『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査―伊礼原Ｂ遺跡ほか発掘調査事業―』

第2節　調査体制

本補助事業による調査体制は、以下のとおりである。

事業主体	北谷町教育委員会		
	教　育　長	比嘉　秀夫	（平成20～22年度）
事業総括	教育次長	謝花　良継	（平成20・21年度）
	同	大城　操	（平成22年度）
	社会教育課長	大城　操	（平成20・21年度）
	同	知念　喜忠	（平成22年度）
	同　　補　佐	知念　良範	（平成20・21年度）

調査総括	文 化 係 長	嘉陽田　朝栄（平成 20 ～ 22 年度）
調査員	主 任 主 事	山城　安生　（平成 20 ～ 22 年度）
	同	東門　研治　（平成 20 ～ 22 年度）
	主　　事	松原　哲志　（平成 20 ～ 22 年度）
資料整理員	臨 時 職 員	新垣　栄子　　川畑　良子　（平成 22 年度）

第Ⅱ章　調査地の位置と環境

第１節　地理的環境

北谷町は、沖縄本島中部の西海岸沿いにあり、県都那覇市から北東約 16㎞に位置する。町勢は、人口約 27,340 人、面積 13.78㎢（平成 22 年３月現在）で、北は嘉手納町、東は沖縄市と北中城村、南は宜野湾市に隣接する。西は全域が東シナ海に面し、彼方に慶良間諸島が眺望される。気候は亜熱帯海洋性気候に属し、年平均気温が 22 度と四季を通して温暖である。

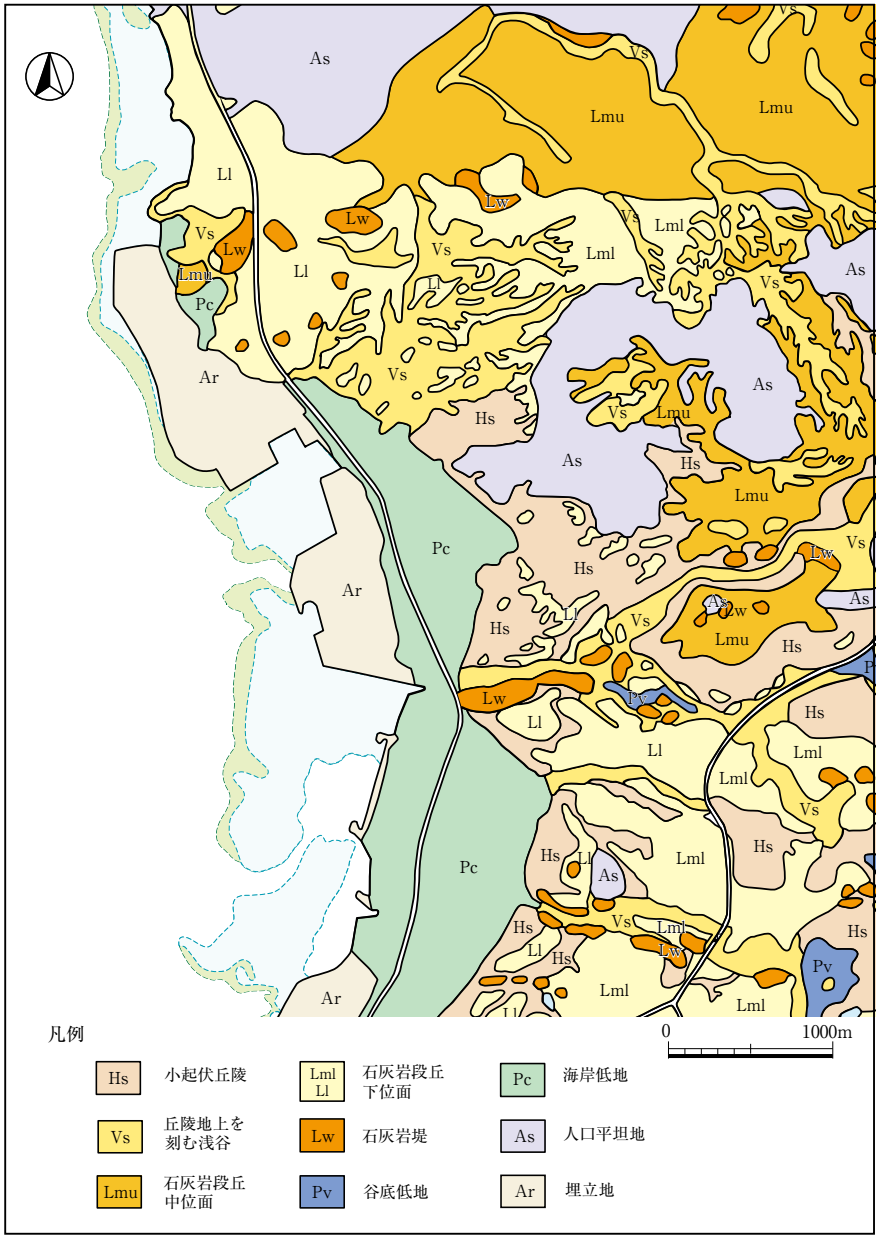
本町の地形を概観すると、東側に台地・丘陵が見られ、西側に低地・海浜・埋立地などが見られる（第１図）[註 1]。台地は低地に向かって階段状に低くなる海岸段丘を成し、各段丘の標高は、東から西に向けて概ね、100m 以上、100 ～ 50m、50 ～ 30m に分かれる。台地は浸食を受け丘陵を形成し、浸食作用によって運ばれた土砂は段丘下に堆積する。これら標高 10 m以下の肥沃な低地が町域西側に見られる。本町を流れる河川には、北から大道川、白比川、普天間川がある。いずれの河川も町域より東側の台地を源とし、東シナ海へ西流する。

地質は、島尻層群を基盤に琉球層群が不整合に覆い、低地では琉球層群を沖積層が不整合に覆っている（第２図）。琉球層群は、非石灰質の国頭礫層と石灰質の琉球石灰岩層があり、前者は沖縄本島北部の高島に、後者は本島中南部の低島に分布する。本町は国頭礫層の南限となっており、国頭礫層の風化による酸性土壌に生育する植物も確認される。

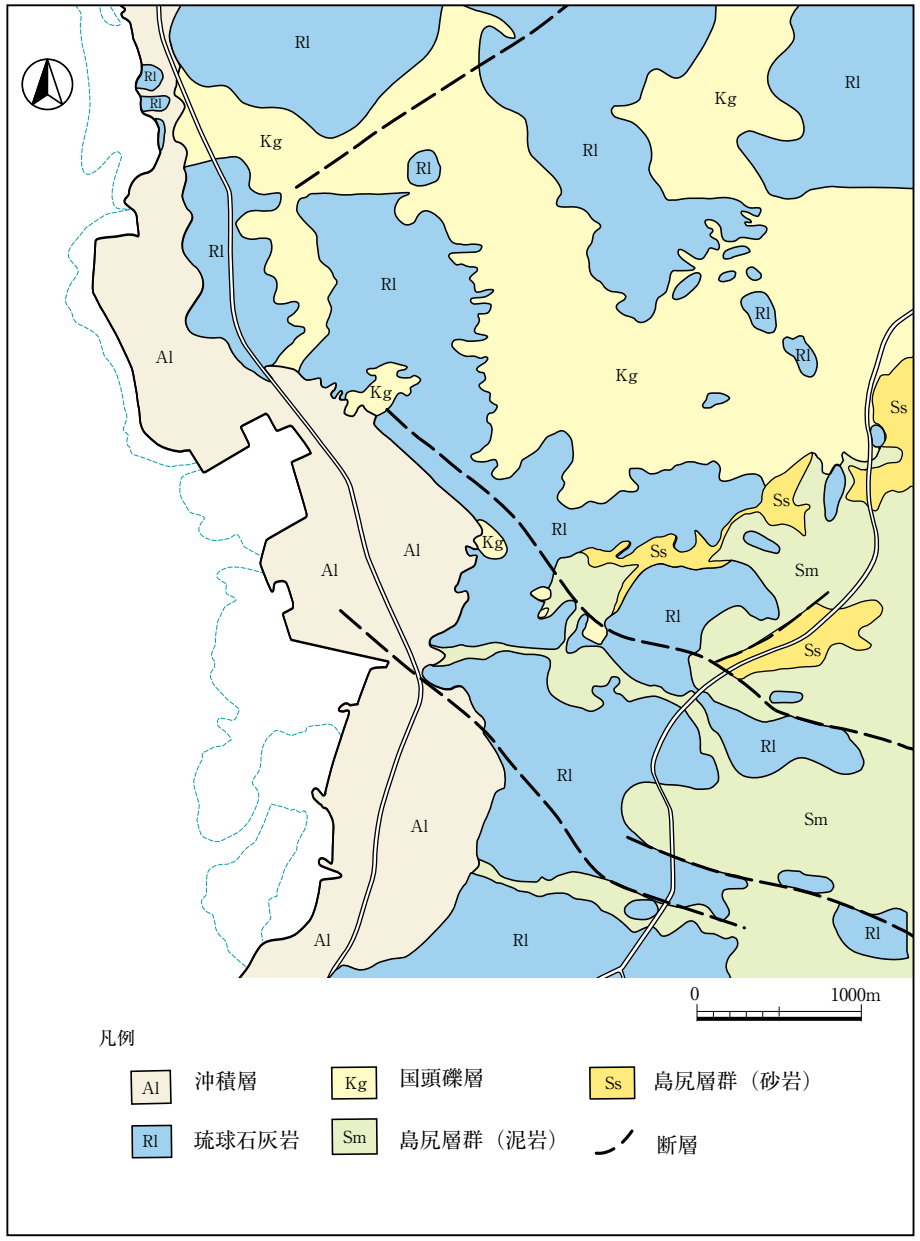
交通は、県都那覇市から本島北部へ延びる主要幹線道路の国道58号線が西海岸側を縦断している。また、北より県道 23 号線、24 号線、130 号線がそれぞれ国道 58 号線以東へ延び、概して交通の便に恵まれている。

本町は、米軍基地の多い沖縄県内においても基地占有率が３番目に高い自治体である。町域北側には極東一の規模を誇る嘉手納飛行場、中央部にはキャンプ桑江、南にはキャンプ瑞慶覧が所在し、その殆どは平地で、国道 58 号線沿いの利便性に富む地域に集中している。町総面積における軍用地の比率は、1946 年に初めて 100％から減じ、1981 年にはハンビー飛行場やメイモスカラー地区が、2003 年にはキャンプ桑江北側が返還されるも、未だ町域の 53.5％は米軍基地が占めている（第３図）。返還跡地では急速な都市化現象が進み（第４図）、住宅地は限られた宅地部での密集・高層化の傾向にある。一方、軍用地内は整然と管理された芝地に建物が点在しており、一般宅地とのギャップは歪な景観を醸し出している。

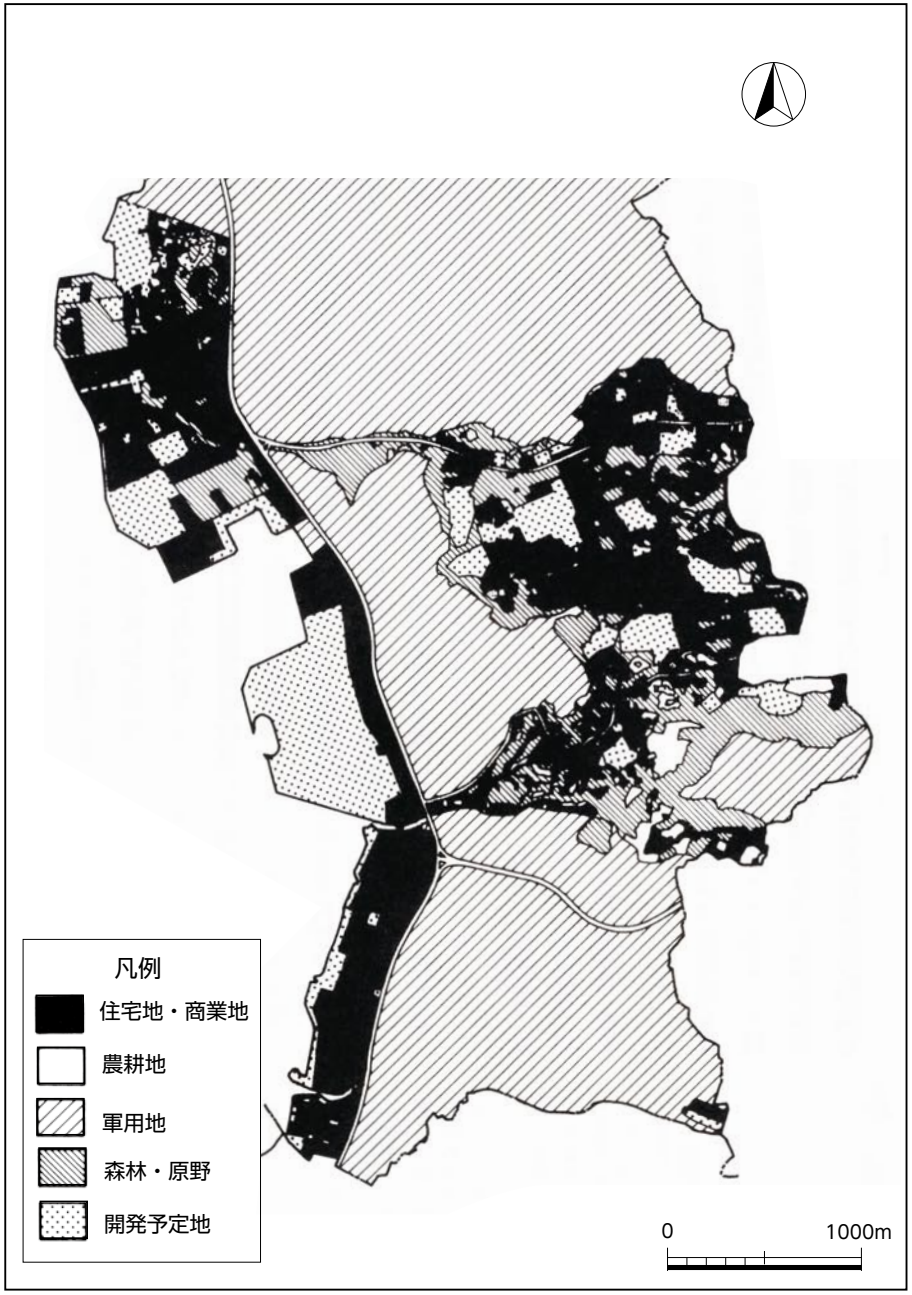
近年では、海浜部の埋立て整備により住宅地や商業地、公共施設が展開するなど新たな町づくりが進められている。また、美浜タウンリゾートアメリカンビレッジと呼ばれる商業エリアは、ストリートライブや各種イベント会場としても利用され、国内外の観光客が訪れる地として賑わいを見せている。



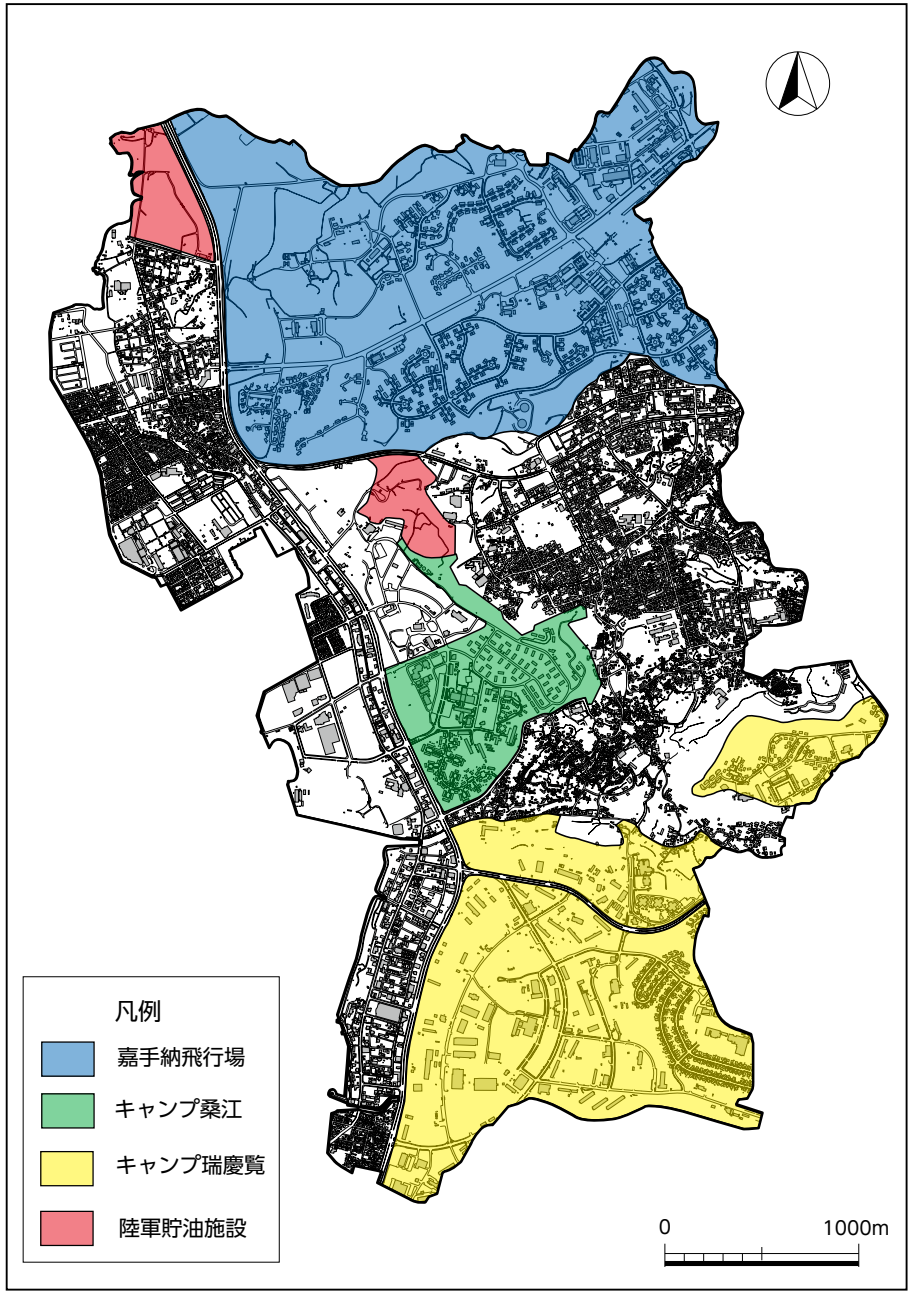
第１図　北谷町の地形分類図



第２図　北谷町の地質分類図



第４図　北谷町の土地利用図 (1992 年)



第３図　北谷町米軍基地分布図（2004 年４月）

第２節　歴史的環境

北谷町には、現在 48 の遺跡が確認されている（第５図、第１表）。遺跡の多くは、町域西側の沖積地に所在し、キャンプ桑江北側地区が返還されるに至って確認された遺跡も少なくない。本町で確認されている遺跡の時期として、旧石器時代の桃原洞穴遺跡をはじめ、沖縄貝塚時代早～後期、グスク時代、近世の遺跡等、多時期に及んでいる。今回試掘調査を行った平安山原地区を中心に周辺の主な遺跡を概観したい。

まず、東側 2.5km の位置には、桃原洞穴遺跡がある。桃原洞穴遺跡は、今から約１万６千年前の旧石器時代に比定されている（註 2）。遺跡は北谷町字吉原東新川原に位置し、化石人骨（頭蓋骨）が検出され、鈴木尚氏により桃原洞人と命名されている。

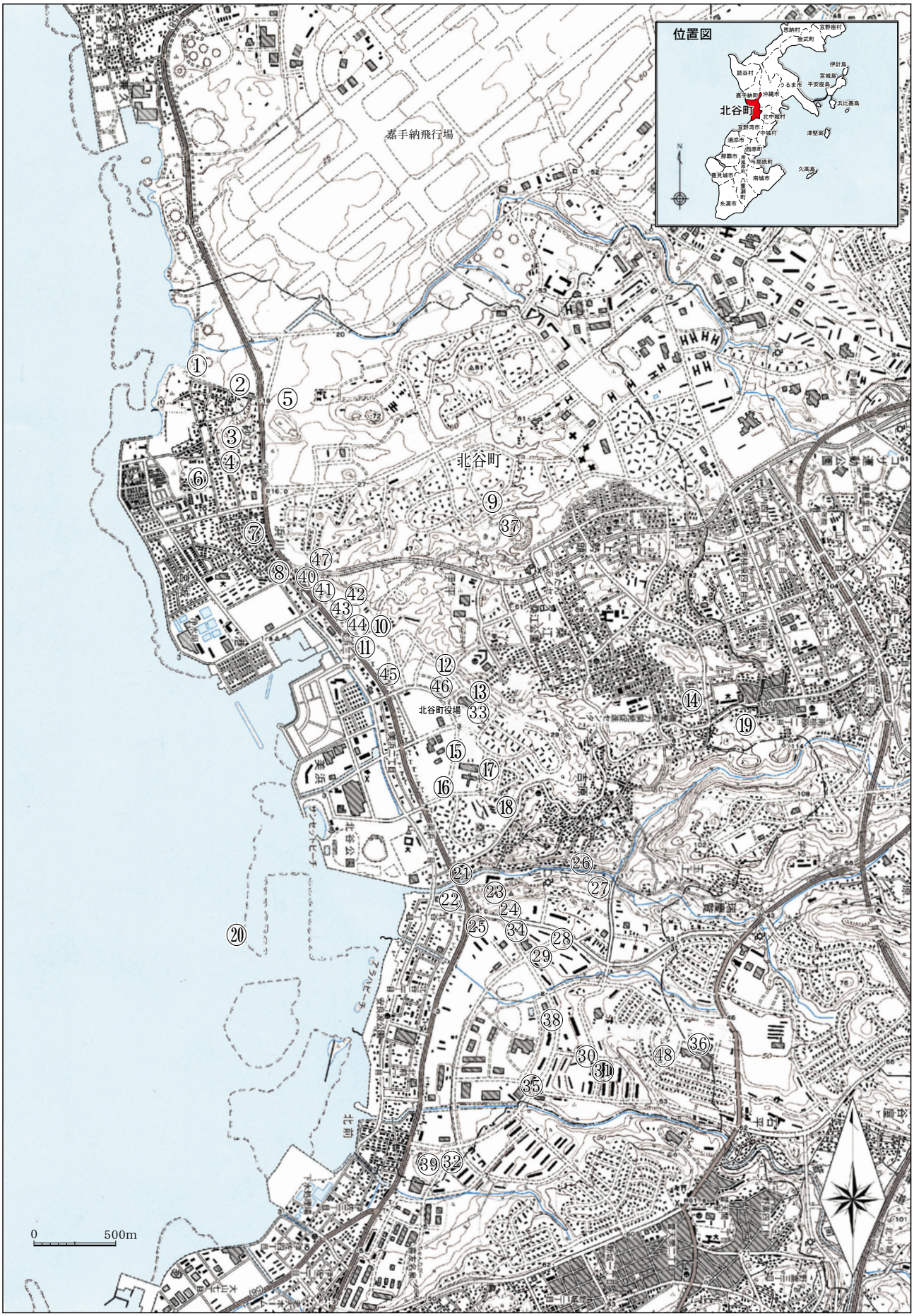
次に南側約 2.0km には、現在本町にて唯一残存するグスクである北谷城がある。北谷城の立地する琉球石灰岩の舌状台地周辺は、町内においても遺跡の集中する地域となっており、丘陵南側には貝塚時代後期の遺跡や、グスク時代の城下町が形成されるなど、集落の形成過程を考える上で重要な地域である。北谷城は、これまでの発掘調査の結果から、12 世紀に始まり 15 世紀の中頃に終焉したグスクであることが判明している。しかし、築城に関しての明確な記録はなく、金満按司や大川按司、北谷按司の３系統の興亡があったと伝えられているが、伝承の域を出ない。戦前、北谷城以南一帯の字北谷地域は、沖縄本島三大美田の１つである北谷ターブックァ（北谷田圃）と呼ばれる田園風景が拡がっており、それらの生業を支えていたのは豊富な湧水であった。

本町では、東側石灰岩台地を源とする河川の他に段丘下から湧き出す湧水が多く、その一つにウーチヌカーが挙げられる。ウーチヌカーは、試掘箇所から南東側約 0.4km の丘陵麓に位置し、平成 22 年２月に国指定史跡となった伊礼原遺跡を語る上で無くてはならない水源である。

伊礼原遺跡は、ウーチヌカーを源とする低湿地区と砂丘地区とに分けられる貝塚時代早期から戦前に至るまでの複合遺跡である。低湿地区では古環境復元可能な程の植物遺体の他、櫛や石斧の柄等の木製品が出土するなど新発見が相次いだ。砂丘地区では、大きな波力により住居址の一部を含む砂丘の侵食が認められ、その後の砂丘の回復とともに居住区が拡大ゆく様相を確認することができた。また、沖縄諸島の先史時代編年体系が網羅できるほど各型式の土器が出土する等、沖縄県内においても稀有な遺跡である事が判明している。キャンプ桑江北側地区にて確認された遺跡には、伊礼原遺跡の他（註 3）、伊礼原Ｂ・Ｄ・Ｅ遺跡、平安山原Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡、千原遺跡、小堀原遺跡、後兼久原遺跡があり、相当数の遺跡が密集していることが判る。

試掘箇所より西側は、埋立地と東シナ海が迫っているため遺跡は確認されていない。試掘箇所から北西側約 1.0km の辺りに眼を向けると、クマヤー洞穴遺跡や砂辺貝塚が近在している。クマヤー洞穴遺跡は、貝塚時代早期からグスク時代に至る遺物が確認されており、特に中期（宇佐浜期）の改葬人骨が多数検出されており注目される。砂辺貝塚は、貝塚時代中・後期、グスク期の遺跡である。1986 ～ 1988 年に町教委にて実施された発掘調査以前には「湮滅に近い程壊されている」と記録されていたが、方形状に配石された住居址が良好な状態で確認された。遺跡周辺には拝所も多く、砂辺集落の成因を考える上で重要な遺跡である。

北側には、近世以降の大作原古墓群やカーシーノボントン遺物散布地が嘉手納空軍基地内に位置している。嘉手納空軍基地内において墓群は比較的確認されているが、地中に眠る埋蔵文化財の詳細は判然としない。近年、嘉手納町域の基地内にて貝塚時代前期から中期にかけての良好な住居址が発見されていることから、本町域でも今後同様な遺跡が発見される可能性が考えられる。



第５図　北谷町の遺跡

第１表　北谷町遺跡一覧

No.	遺　跡　名	時　期	所　在　地
1	砂辺サ－ク原貝塚	前期	字砂辺差久原
2	砂辺サーク原遺跡	後期～近世	字砂辺加志原
3	砂辺貝塚	後期～グスク	字砂辺村内原
4	砂辺ウガン遺跡	後期～グスク	字砂辺加志原
5	カーシーノボントン遺物散布地	グスク	字砂辺加志原
6	クマヤー洞穴遺跡	前期～グスク	字砂辺村内原
7	浜川千原岩山遺物散布地	後期	字浜川浜川千原
8	浜川ウガン遺跡	後期	字浜川千原
9	上・下勢頭区古墓群	近世	字上勢頭平安山伊森原・伊礼伊森原・下勢頭平安山下勢頭原
10	伊礼原遺跡	前期～近世	字伊平伊礼原
11	伊礼原Ｂ遺跡	近世・近代	字伊平伊礼原
12	桑江ノ殿遺物散布地	後期～近世	字桑江小堀原
13	桑江遺物散布地	後期	字桑江後兼久原
14	鹿化石出土地	旧石器	字吉原栄口原・桃原
15	前原古島Ａ遺跡	近世	字桑江前原
16	前原古島Ｂ遺跡	近世	字桑江桑江原・前原
17	伊地差久原古墓	近世	字桑江伊地差久原
18	前原古墓群	近世	字桑江前原
19	桃原洞穴遺跡	旧石器	字吉原東新川原
20	インディアン・オーク号の座礁地	近世	字北谷地先
21	池グスク	後期	字吉原東宇地原・西宇地原
22	白比川河口遺物散布地	グスク	字北谷西表原
23	北谷城遺跡群	後期～近世	字大村城原
24	北谷城第７遺跡	後期～近世	字大村城原
25	北谷番所址	後期～近世	字北谷北谷原
26	吉原東角双原遺物散布地	グスク	字吉原東角双原・西角双原
27	山川原古墓群	近世	字大村山川原
28	玉代勢原遺跡	後期～近世	字大村玉代勢原
29	長老山遺物散布地	後期～グスク	字大村玉代勢原
30	大道原Ａ遺跡	後期	字北谷大道原
31	大道原Ｂ遺跡	後期	字北谷大道原
32	新城下原遺跡	早期～近世	字北谷安仁屋原
33	後兼久原遺跡	グスク～近世	字桑江小字後兼久原、字桑江小字小堀原
34	塩川原遺跡	後期	字北谷塩川原
35	稲千原遺跡	前期	字北前稲千原
36	伊波川原遺跡		字北前横嵩原・伊波川原
37	伊礼伊森原遺跡	後期	字上勢頭伊礼伊森原
38	東表原遺跡		字北谷東表原
39	安仁屋原遺跡		字北前安仁屋原
40	千原遺跡	後期	字伊平千原
41	平安山原Ａ遺跡	後期	字伊平平安山原
42	平安山原Ｂ遺跡	後期	字伊平平安山原
43	平安山原Ｃ遺跡		字伊平平安山原
44	伊礼原Ｄ遺跡	後期	字伊平伊礼原
45	伊礼原Ｅ遺跡	縄文後期～近世	字伊平小字伊礼原
46	小堀原遺跡	後期	字桑江小堀原
47	大作原古墓群	前期～近世	字伊平大作原
48	横嵩原遺跡	後期	字北前横嵩原

北谷町文化財調査報告書　第 28 集　『伊礼原Ｄ遺跡』(2008) の表１北谷町遺跡一覧を改変
註 :「前期」→「貝塚前期」、「後期」→「貝塚後期」をさす。

《参考文献》
①中村愿・田場勝也ほか「北谷町の遺跡－詳細分布調査報告書－」『北谷町文化財調査報告書』第 14 集 北谷町教育委員会 1994 年
②中村愿 ・東門研治・島袋春美『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査－伊礼原Ｂ遺跡ほか発掘調査事業』北谷町文化財調査報告書 第 23 集　北谷町教育委員会　2005 年 3 月
③中村愿・東門研治・松原哲志・島袋春美ほか　伊礼原Ｂ遺跡・伊礼原Ｅ遺跡　『キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業 (平成 10 ～ 14 年度)』北谷町文化財調査報告書　第 27 集　北谷町教育委員会　2008 年 3 月
＊番号は位置図に付随

註１　第１図と第３図は、北谷町史１巻より抜粋し加筆修正した。第４図は、北谷町史１巻より抜粋した。

註２　北谷町の遺跡（1994）による。近年では、発見された人骨は特に古い特徴はなく、年代は縄文時代早期にあたる完新世（1万年前～現在）の可能性がもたれている。

註３　伊礼原遺跡は当初、砂丘地区の伊礼原Ａ遺跡、低湿地区の伊礼原Ｃ遺跡と呼称していたが、連動して生活址が確認されることから、両遺跡をまとめて伊礼原遺跡とした経緯がある。

＜参考文献＞

北谷町教育委員会　1994『北谷町の遺跡―詳細分布調査報告書―』
北谷町教育委員会　2005『北谷町史　第一巻　通史編』
北谷町教育委員会　2007『伊礼原遺跡―伊礼原Ｂ遺跡ほか発掘調査―』
嘉手納町教育委員会　2009『野国後原遺跡Ｂ地点』

第Ⅲ章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

今回の試掘調査対象地は、平成７年度～９年度にかけて行ったキャンプ桑江北側の試掘調査時に盛土があったため調査できなかった地域である。調査区の設定は、平成７年度～９年度の試掘調査時に設定した30m × 30mのメッシュの交点を試掘ポイントとする方法を踏襲した。

まず、前回の試掘調査箇所を図上復元し、復元した試掘箇所から今回の試掘箇所を割り出した（第６図）。割り出したポイントを基準点に、基準点の南西側5m × 5mを掘削対象範囲とし（試掘坑の北東隅を基準点とする）８箇所の試掘坑を導き出したが、現地にて試掘坑を仮設定した所、以下の状況が確認できた。

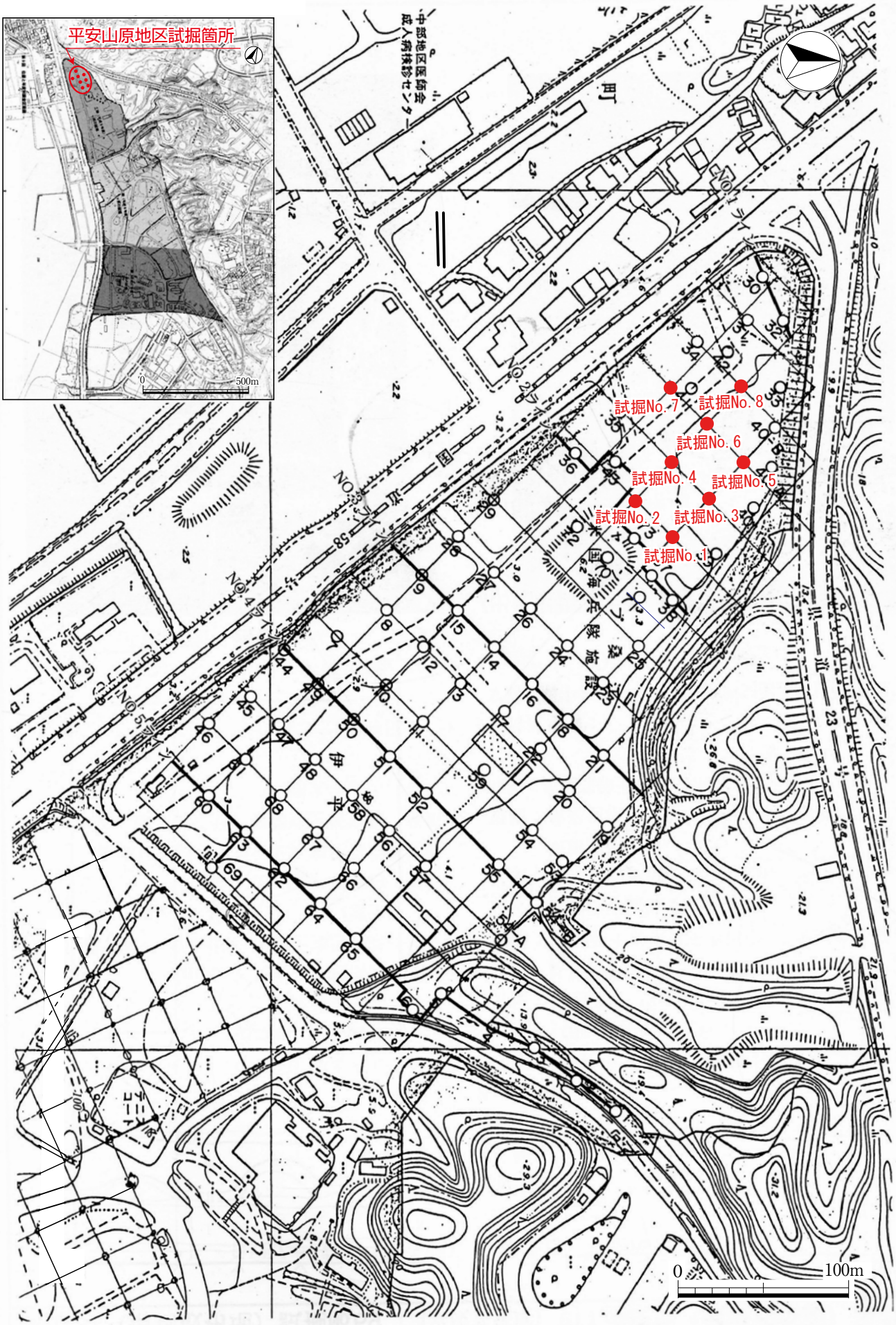
①試掘No.２の西側付近には、文化財が確認されていない場所に沈砂地が設けられていた。
②試掘No.５と６の箇所は、盛土の厚薄が認められた。

上記の状況から、

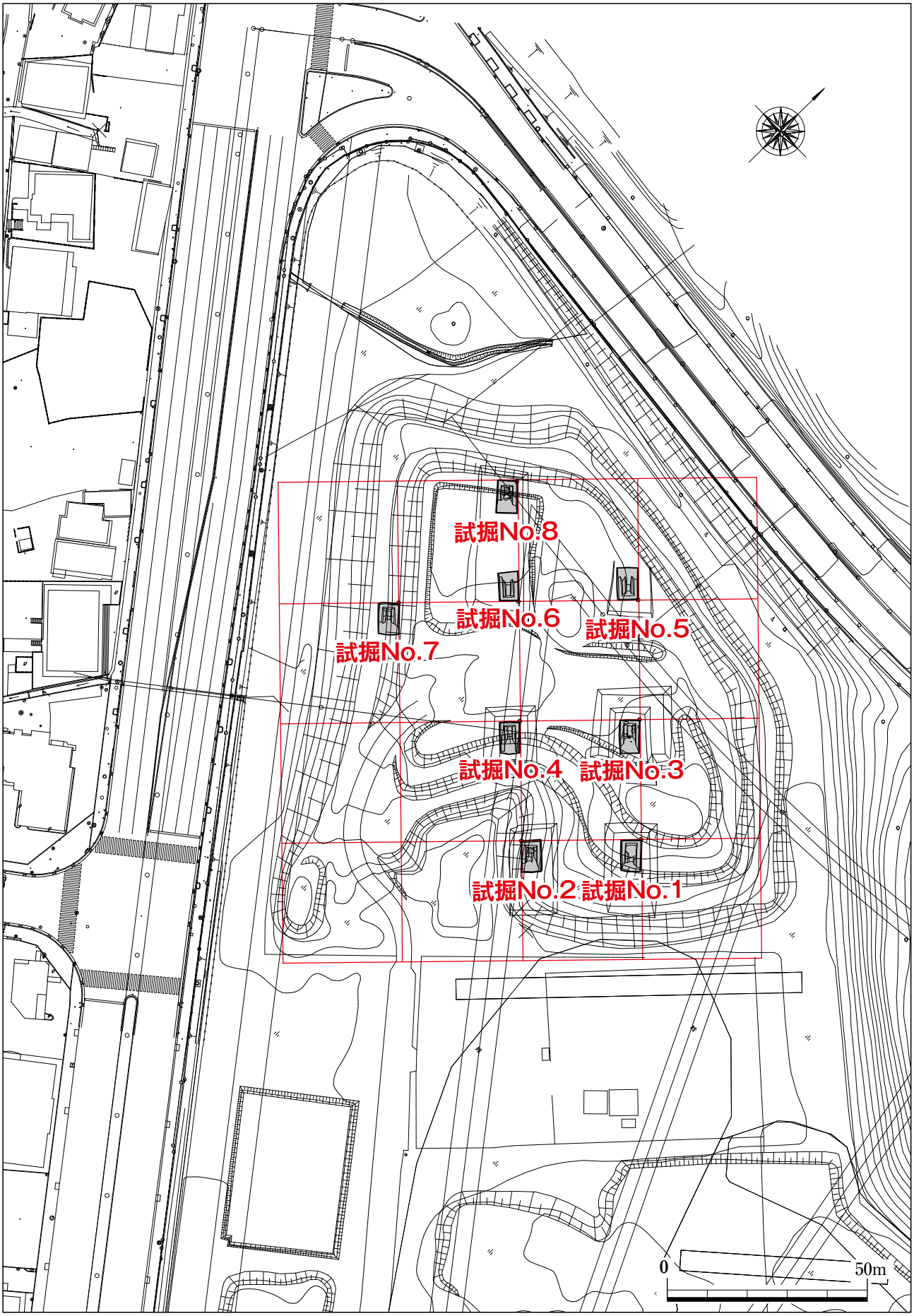
１．試掘No.２の基準点を北西隅にし、沈砂地と掘削箇所の距離を設けることにした。
２．試掘No.５と６の基準点を南東隅にし、盛土が薄い場所を調査区に選定した。

以上、今回の試掘坑は、前回の考えを踏まえながら、現況にあわせた形で設定した（第７図）。

過去の試掘調査の結果等から、当該地周辺は、約１ｍの米軍造成土を掘りあげると概ね戦前から近世の旧表土が現れ、その下層にグスク時代の遺物包含層や淡水性巻貝を含む粘質土の存在が確認されている。粘質土は主に東側の丘陵地付近によく見られ、西側へ行くにつれて薄くなり遂には見られなくなる。粘質土の有無に関わらず言及できる事に、砂層の検出と湧水の確認が挙げられる。これらの条件から、機械力による掘削後の壁面崩落は免れないものと判断し、１ｍ掘削しては１ｍ幅の足場を確保する方法を取った。この様に階段状に掘り進めると、掘削深度が深くなるにつれ調査区が狭小になるため、堆積状況を判断する材料に乏しくなってしまう事と、壁面図作成において、どうしても段差部分に係る箇所の精度が落ちる事は否めない。しかし、調査区を大きく広げる事は、より広範囲の崩落を呼び込みかねない地下環境である事と、作業員の安全第一を考慮し上記の調査方法にて現場作業を実施した。



第６図　新旧試掘箇所併合図



第７図　平安山原地区試掘箇所図

第２節　調査経緯

現地調査は、平成21年３月２日から平成21年３月25日まで行った。以下に調査経過を概述する。

３月２日　現地にて測量・仮縄張りを行い、試掘坑の位置を設定。
３月３日　バックホウにて試掘No.7付近の伐開及び試掘No. 6・8現地盤上の盛土の除去を行う。
３月４日　試掘No. 3･5現地盤上の盛土の除去。
３月５日　試掘No. 3の残土・法面の成形や危険箇所の仮囲いを行う。降雨の為、9:30に作業中止。
３月６日　試掘No. 2･4の盛土除去。激しい雨の為、16:00に作業中止。
３月９日　試掘No. 4の盛土除去及び磁気探査実施箇所の測量。激しい雨の為、昼前に作業中止。
３月10日　試掘No. 1･4の盛土除去を行う。ほぼ全ての試掘坑において目標地盤に到達。
３月11日　重機による法面成形や小段削出と全試掘坑において、１回目の水平磁気探査を実施。
３月12日　磁気探査異常点の確認掘削を行う。鉄筋等を確認。実弾等の危険物は発見されなかった。
３月13日　１回目の磁気探査終了。深度1mまで再び重機掘削を行う。全ての試掘坑の掘削を完了。
３月16日　２回目の磁気探査を実施。異常点が少なかったため、重機掘削を併行して行う。
３月17日　各試掘坑の清掃及び検出遺構平面図・壁面断面図作成を行う。
３月18日　各試掘坑壁面図化･写真撮影･トレンチ形状測量を行う。試掘No. 5にて深掘りを実施。
３月19日　全ての試掘坑にて重機による深掘りを実施した。湧水とともに崩落が始まるため、下位の土層を重機で回収し、即座に埋め戻した。
３月23日　各試掘坑から回収した砂より遺物採集を行う。現地盤上の残土の埋め戻し作業を実施。
３月24日　早朝より降雨。現場作業は中止。
３月25日　現地盤上残土の整地作業を行い、全ての野外作業を終了した。

第Ⅳ章　調査成果

第１節　各試掘坑の概要

本節では、試掘調査の結果確認された遺構や堆積状況について試掘坑毎に紹介する。各試掘坑を紹介するにあたり、その様相を一目で把握できるよう、１試掘坑に対し１頁に纏めるよう努めた。具体的には、土層断面図・柱状図（略図）・遺構検出状況平面図（遺構が検出された試掘坑のみ）・土層写真・試掘坑位置図を、それぞれ１頁に掲載している。土層断面図・柱状図・平面図の縮尺は統一を図り、柱状図は各試掘坑間で同一の層序と考えられるものを同色にて示した。土層注記に関しては、紙幅の都合上１頁に収まりきらない試掘坑もあったため、全試掘坑分をまとめて以下に記述することとした。その為、若干余白の目立つ頁も生じてしまったが、どうか御了承戴きたい。

なお、出土遺物の詳細については、次節にて種類毎に紹介する。

試掘No. 1

米軍整地土の直下に黒色土壌を検出した。掘削を進めたところ、白砂層を掘り込むように北側に向かって急激に落ち込んでいたため、何らかの目的を持った人為的な地形と判断した。作図した北壁はこの落ち込みの真只中であり、３分層した土層もこの落ち込みに伴う一連のものと判断し、Ⅱａ

～ｃ層に細分した。Ⅱａ層からは、煉瓦・番線・ガラス等といった戦前の集落に起因するような新しい遺物が出土している。獣骨が比較的多く認められたⅡｂ層を除去すると、巨大な礫が検出された。落ち込みの深いところで平坦気味に込められており、この落ち込みの用途に大きく関連するものと思われる。これら巨礫を除去し始めたところで水が湧き始めたため、下層の様相は不明である。

第２表　試掘 No. １層序

地点	層名	土色略号	土色・土質	内容
試掘 No.1	Ⅰ	2.5Y7/4	浅黄色土	人頭大以下の礫含む整地土。西壁では上位に路盤を伴うため、米軍による整地であることが分かる。
	Ⅱ			用途不明の大型掘り込み。以下の３細分した。
	Ⅱａ	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色粘質シルト	上位 20cm には褐色粘質土（10YR4/6）が帯状にみられる。礫（径約 20cm）・半腐食植物・印刷磁器・煉瓦・番線・ガラスを含む。木根も目立つ。
	Ⅱｂ	－	－	Ⅱａ層と灰黄色砂（2.5Y6/2）の混合土。獣骨多い。
	Ⅱｃ	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色粘質シルト	人頭大～ 1m 超の礫が込められる。陶磁器含む。
	Ⅲ	2.5Y7/3	浅黄色中砂	いわゆる白砂であるが、Ⅱ層の影響を強く受けて乱れる。小木根が張る。

試掘 No. 2

米軍整地土の直下に黒色土壌を検出した。掘削を進めたところ、海性堆積の粗砂面上に遺構状の黒色プランが散見された。壁面観察によると黒色土壌は３分層（Ⅲ～Ⅴ層）が可能で、遺構状となるⅤ層は更に細分できる。このⅤ層からは、ビニールに包まれた衣類が出土し、釦の模様から米製と思われる。下層砂の遺物採集では、貝塚時代の土器片が回収されたが、いずれも細片で量も僅少であった。また、標高約 0.7m のところで平坦なビーチロックが検出された。

第３表　試掘 No. ２層序

地点	層名	土色略号	土色・土質	内容
試掘 No.2	Ⅰ	－	－	平成の残土。
	Ⅱ	2.5Y7/4	浅黄色土	米軍による整地土。礫（人頭大以下）含む。
	Ⅲ	－	－	Ⅳ層土を主体とする版築状の混合土。礫（拳大）を多く含む。
	Ⅳ	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色粘質シルト	下位が赤味がかる（鉄分沈着？）。風化石灰岩礫（径 20cm 以下）・ガラス含む。
	Ⅴ	2.5Y6/2	灰黄色砂質土	戦後の撹乱を一括した。多少の切り合い関係が認められ、浅黄色粗砂（2.5Y7/4）が互層状となる箇所もある。ビニール･アメリカ製衣類が出土。
	Ⅵ	2.5Y7/4	浅黄色粗砂	ところにより黄味がかる。
	Ⅶ	7.5YR6/8	橙色粗砂	下位の赤味が強い。
	Ⅷ	7.5YR8/4	浅黄橙色粗砂	サンゴ・貝・礫を多く含む。

試掘 No. 3

米軍整地土の直下に黒色土壌（Ⅱ・Ⅲ層）を検出した。8箇所の試掘坑中最も黒色土壌の層厚がなく、砂面の検出レベルが高標高となっている。また、全体として東→西への傾斜も看取された。これらの事象は砂丘地の原地形に起因するものと考えられる。Ⅲ層からは煉瓦が出土する等、試掘 No. 1 のⅡａ層と類似した状況が認められた。

Ⅳ層上面ではⅢ層起源と考えられる埋土を持つ遺構プランが検出されている。Ⅳ～Ⅵ層の砂からは定量の土器片が出土した。特にⅣ・Ⅴ層の層離面付近のレベルから多く出土した。土器は薄手の平底であり、貝塚後期のものと考えられる。重機による深掘りは標高約－ 1m まで達したが、ビーチロックは検出されず、橙色の粘土（Ⅷ層）が確認された。東側丘陵に起源を持つ土壌と考えられる。海性堆積砂であるⅦ層の上位からは、摩滅した薄手の土器片が採取されている。
Ⅶ～Ⅸ層からは合弁貝が多数認められた。

第４表　試掘 No. ３層序

地点	層名	土色略号	土色・土質	内容
試掘 No.3	Ⅰ	10YR5/6	黄褐色土	米軍による整地土。
	Ⅱ	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色粘質土	Ⅲ層を主体とするが、黄褐色土のランダムな混入が多い。
	Ⅲ	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色粘質シルト	下位ほど砂質化する。礫（径 30cm 以下）・陶磁器・半腐食植物・煉瓦を含む。西側への傾斜が認められる。
	Ⅳ	2.5Y6/3	にぶい黄色粗砂	しまり弱い。黄味がかるところがある。Ⅴ層との層離面に打ち上がり貝（二枚貝・マガキガイ）がみられ、このレベルでの遺物出土が多い。
	Ⅴ	2.5Y7/3	浅黄色中砂	
	Ⅵ	5Y6/2	灰オリーブ色粗砂	サンゴ・貝・礫を多く含む。下位では礫（拳大～ 40cm）が多くみられる。
	Ⅶ	2.5Y6/8	明黄褐色粘土	山土？摩滅した薄手の土器片
	Ⅷ	－	－	砂？
	Ⅸ			

試掘 No. 4

米軍整地土の直下に黒色土壌を検出した。このⅢ層直下では葦のような植物が敷き詰められているようにも見える状態で検出され、更にその下には黄褐色の粘土（Ⅳ層）が平坦面を成していた。床土・粗朶といった耕作関連遺構も想定される。この粘土層を掘り下げると、再び黒色土壌（Ⅴ・Ⅵ層）が検出された。西側に礫を伴って落ち込むⅤ層は人為的に構築されたものであろう。Ⅵ層は均質でカワニナを多く含む。Ⅵ層直下で激しい湧水が始まり、標高約 0m で平坦なビーチロック面を検出したため、掘削を終了した。

第５表　試掘 No. ４層序

地点	層名	土色略号	土色・土質	内容
試掘 No.4	Ⅰ	10YR8/4 10YR5/6	浅黄橙色土（上方） 黄褐色土（下方）	米軍による整地土。
	Ⅱ	7.5Y5/3	灰オリーブ色土	米軍による整地土。石灰岩礫多量。
	Ⅲ	10YR3/3	暗褐色粘質シルト	黄褐色土が混入。
	Ⅳ	2.5Y5/3	黄褐色粘土	直上に葦のような植物が南北方向に敷かれている（倒れている？）。床土？
	Ⅴ	2.5Y3/2	黒褐色粘質土	上位は粗砂を含む。西側の落ち込みには礫（拳～人頭大）が込められる。
	Ⅵ	2.5Y3/2	黒褐色粘質シルト	カワニナを含み、非常に均質。
	Ⅶ	10YR3/4	暗褐色中砂	

試掘 No. 5

米軍整地土の直下に黒色土壌（Ⅴ～Ⅶ層）を検出した。上層のⅤ層からは缶が出土したため戦前のものと思われる。下層のⅦ層からは帰属時期を示すような遺物の出土は確認できなかったが、獣骨が目立ったことは留意したい。重機による深掘りは標高約 0m まで達したが、ビーチロックは検出されなかった。海性堆積砂（Ⅸ層）からは、曽畑式土器の口縁部片（内外面施文）が採取された。

第６表　試掘 No. ５層序

地点	層名	土色略号	土色・土質	内容
試掘 No.5	Ⅰ	－	－	平成の残土。
	Ⅱ	5Y4/4	暗オリーブ色土	基地返還後の整地土。
	Ⅲ	2.5Y8/2	灰白色土	改良土。米軍施設の路盤材。
	Ⅳ	10YR5/6	黄褐色土	米軍による整地土。混合土であり、下面は乱れる。
	Ⅴ	2.5Y3/2	黒褐色粘質シルト	礫の混入が目立つ。陶磁器・缶含む。
	Ⅵ	5Y6/4	オリーブ黄色粗砂	サンゴ・貝・礫を多く含む。東西壁面の観察から、北側には広がらない。
	Ⅶ	2.5Y3/2	黒褐色粘質シルト	下位ほど砂質化する。礫・陶磁器・獣骨・貝含む。
	Ⅷ	2.5Y7/3	浅黄色中砂	
	Ⅸ	－	－	サンゴ･礫を多く含む。曽畑式土器（内外面施文口縁部片）出土。

試掘 No. 6

米軍整地土の直下に黒色土壌（Ⅴ層以下）を検出した。黒色土壌最上層のⅤ層に含まれる遺物は新しく、土も乱れる。Ⅶ層からは、近世陶磁器に混じってガラス片が確認されており、黒色土壌全体は戦前に帰属する可能性がある。試掘坑の中央から北側には、南壁とは異なった堆積状況を示し、大型礫の出土も目立った為、遺構の可能性を考え補足的に東壁面も作図した。砂層から採集できた遺物は僅少であった。

第７表　試掘 No. ６層序

地点	層名	土色略号	土色・土質	内容
試掘 No.6	Ⅰ	－	－	平成の残土。
	Ⅱ	2.5Y4/3	オリーブ褐色粘質土	基地返還後の整地土。
	Ⅲ	2.5Y8/2	灰白色土	改良土。米軍施設の路盤材。
	Ⅳ	5Y5/4	黄褐色土	米軍による整地土。石灰岩礫多量。北側では層下に浅黄色粗砂が堆積。
	Ⅴ	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色砂質シルト	撹乱土。陶磁器・細ロープ含む。
	Ⅵ	2.5Y4/4	オリーブ褐色砂質土	小礫含む。均質。
	Ⅶ	5Y3/1	オリーブ黒色粘質シルト	礫・炭化物粒・陶磁器・ガラス含む。
	Ⅷ	2.5Y5/4	黄褐色粗砂	貝・礫含む。
	Ⅸ	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質土	
	Ⅹ	2.5Y7/4	浅黄色粗砂	サンゴ・貝・礫を多く含む。下位ほど砂が粗い。
	ⅩⅠ	2.5Y8/2	灰白色中砂	
	ⅩⅡ	5Y7/1	灰白色粗砂	サンゴ・礫（拳大）を多く含む。
	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色粘質土	小礫含む。落ち込みに礫（人頭大）が込められる。
	2	5Y3/1	オリーブ黒色粘質シルト	灰白色砂を帯状に含む。
	3	2.5Y4/6	オリーブ褐色砂質土	下位に小礫含む。
	4	2.5Y4/3	オリーブ褐色砂質土	貝含む。
	5	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質土	灰白色砂を帯状に含む。落ち込みに礫（人頭大以上）が込められる。

試掘 No. 7

層序表から紹介する。

第８表　試掘 No. ７層序

地点	層名	土色略号	土色・土質	内容
試掘 No.7	Ⅰ	2.5Y4/3	オリーブ褐色粘質土	基地返還後の整地土。
	Ⅱ	－	－	米軍による整地土。トロッコレール出土。
	Ⅲ	2.5Y4/2	暗灰黄色粘質シルト	上位に木材が廃棄されている。
	Ⅳ	10YR4/4	褐色砂質土	粘性有。下位から古銭が出土。
	Ⅴ	10YR5/6	黄褐色粗砂	
	Ⅵ	－	－	微小貝・サンゴの打ち上がり。
	Ⅶ	10YR5/6	黄褐色粗砂	
	Ⅷ	10YR7/6	明黄褐色粗砂	サンゴ・礫を多く含む。
	Ⅸ	5Y7/1	灰白色粗砂	サンゴ・貝・礫を多く含む。
	1	10YR3/2	黒褐色粗砂	貝を含む。溝とするならば、底面は西へ傾斜する。
	2	10YR7/4	にぶい黄橙色粗砂	

米軍整地土が最も厚い箇所であった。黒色土壌からは古銭が出土し、除去後の砂面では東西に延びる溝状の遺構プランを検出した。溝底面は西側に傾斜している。この試掘 No.7 を始めとして、海側に位置する試掘 No.2・4 における砂は赤味がかっており、互層堆積を呈しているという共通点が認められる。砂層からは白色粒を含むやや軟質な土器片を採取した。

試掘 No. 8

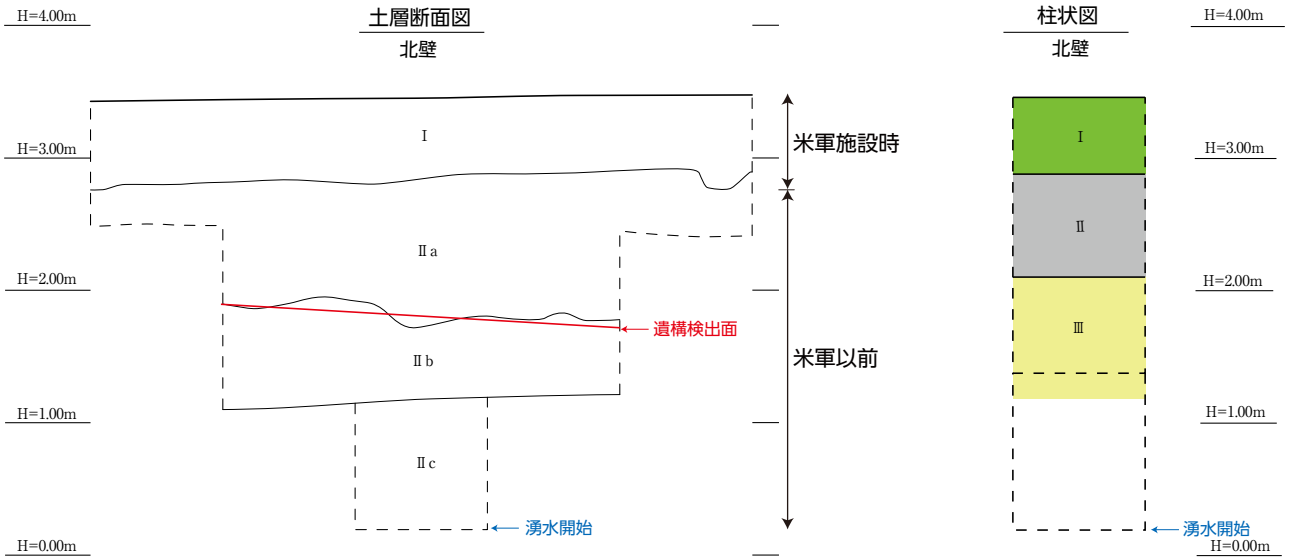
米軍整地土の直下では、砂を挟んで２枚の粘土層が確認された。粘土層直下にはやや均質な黒色土壌が堆積し、下部には遺構が伴う。遺構からは陶磁器･舟釘が出土しており、近世のものと思われる。下層砂からは薄手の土器片が採集された。摩滅したものも混じる。また、標高約 0m で岩盤に当たったが、湧水のため、試掘 No.2・4 と同じ平坦ビーチロックであるかどうかは確認できなかった。

第９表　試掘 No. ８層序

地点	層名	土色略号	土色・土質	内容
試掘 No.8	Ⅰ	2.5Y4/4	オリーブ褐色土	基地返還後の整地土。
	Ⅱ	5Y8/2	灰白色土	改良土。米軍施設の路盤材。
	Ⅲ	2.5Y6/6	明黄褐色土	米軍による整地土。
	Ⅳ	2.5Y4/3	オリーブ褐色粘土	
	Ⅴ	2.5Y7/4	浅黄色中砂	マーブル状の筋がみられる。
	Ⅵ	2.5Y4/6	オリーブ褐色粘土	
	Ⅶ	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色砂質シルト	炭化物・サンゴ・カワニナを微量含む。遺物は少ない。下方には遺構状の掘り込みが認められ、最下部は砂多量。
	Ⅷ	10YR6/4	にぶい黄橙中砂	
	Ⅸ	10YR7/3	にぶい黄橙中砂	
	Ⅹ	2.5Y8/2	灰白色粗砂	
	ⅩⅠ	5Y7/1	灰白色粗砂	サンゴ・礫（拳大）を多く含む。摩滅した薄手の土器出土。

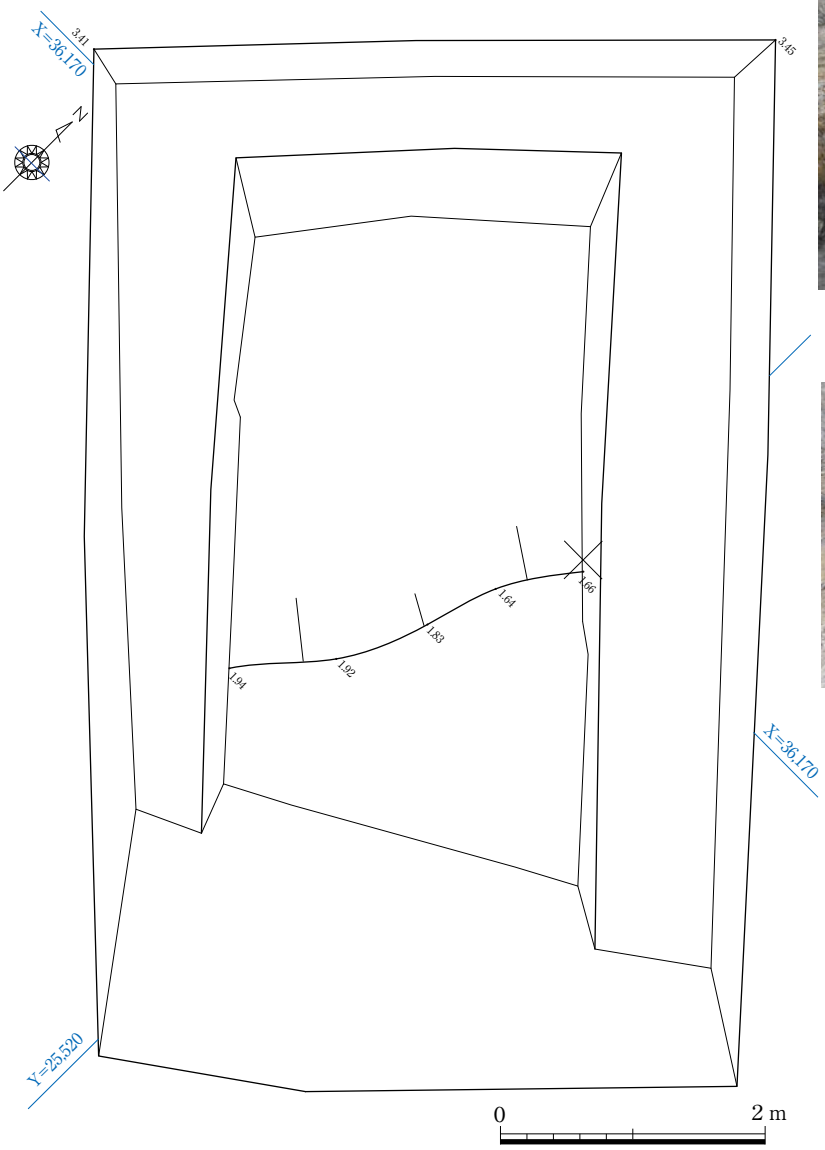
小結

今回の試掘調査実施地区においては、各試掘坑とも、砂層→黒色土壌→米軍施設時の整地という堆積状況を示していることが看取できた。これまでに行われている周辺の発掘調査結果（現在資料整理中の為、未報告）から、伊平地区における黒色土壌はグスク時代～戦前の土壌である事が確認されている。黒色土壌を除去すると、例外なく砂面が検出された。上位は海岸～砂丘の構成砂であり、下位は海中堆積に由来するものと思われる。陸側に位置する試掘坑からは白砂層が検出された。砂層からの人工遺物は全体として僅少であったが、試掘 No.3 では定量の資料が得られている。試掘 No.3 は砂面の検出レベルが高く、海から離れた比較的高標高のエリアに遺物が高密度で包含されている可能性が考えられる。厚く堆積した海砂下部よりビーチロックが確認された試掘坑もあった。

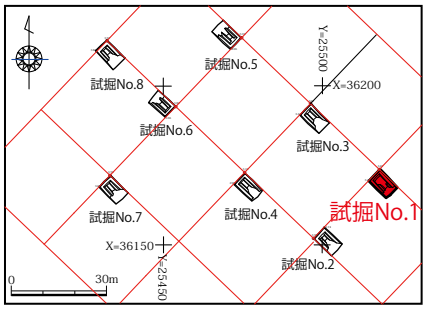


北壁及び礫検出

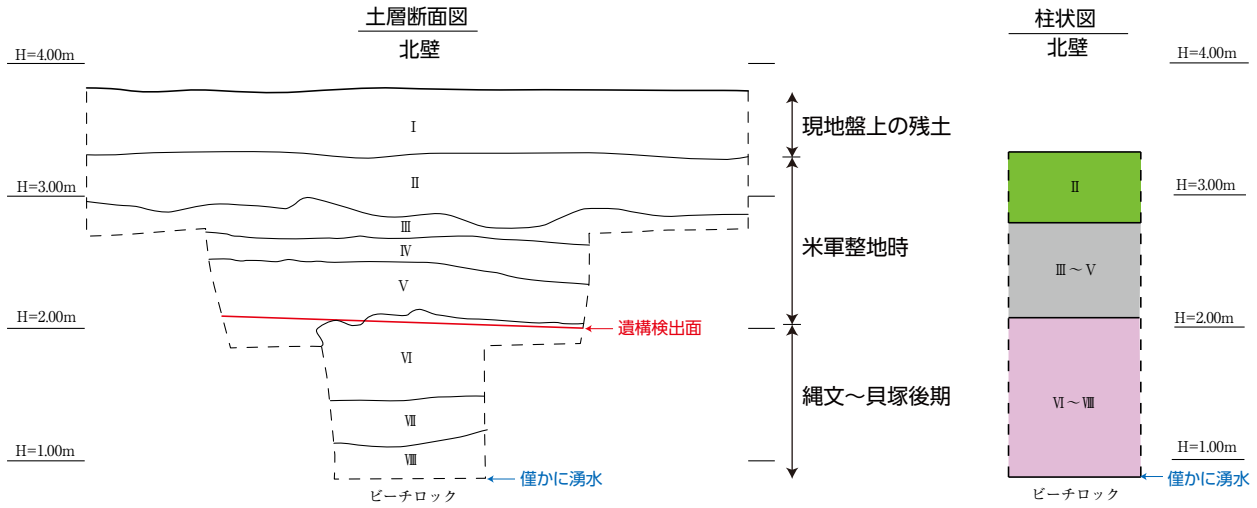
深掘り状況

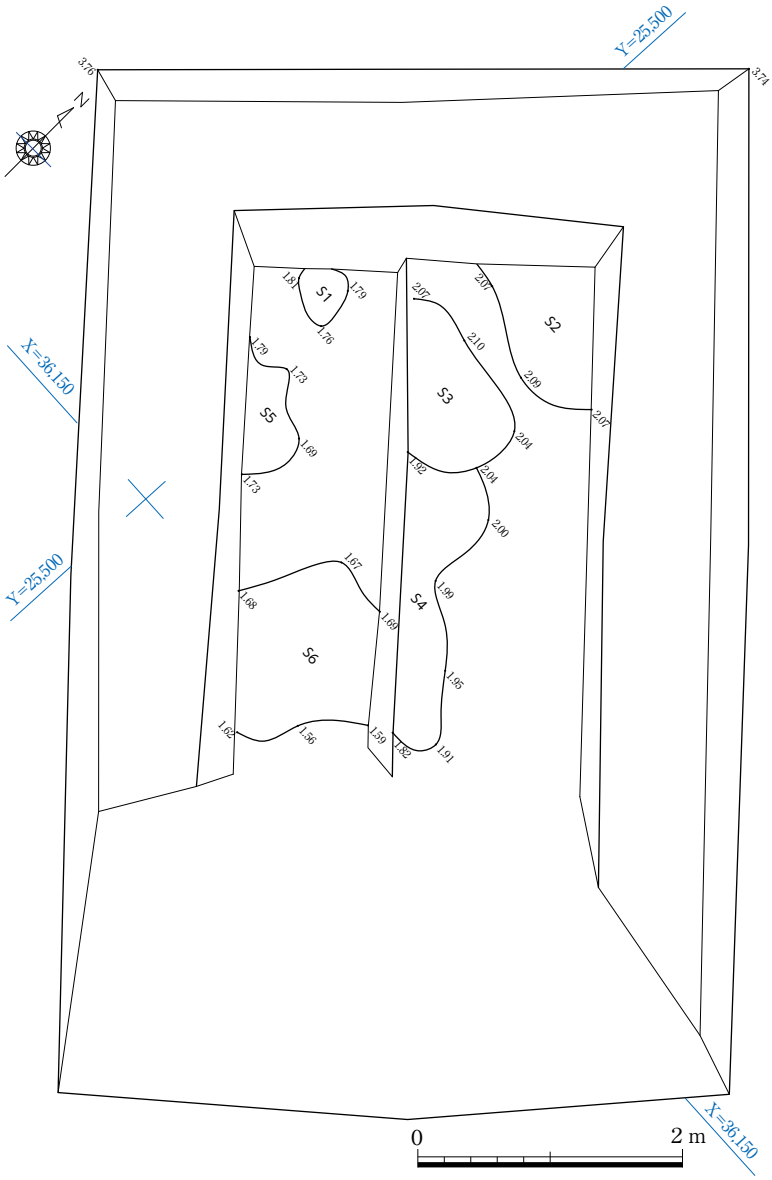


位置図



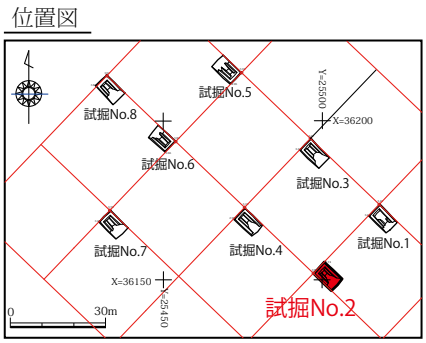
第８図・図版１　試掘 No. 1



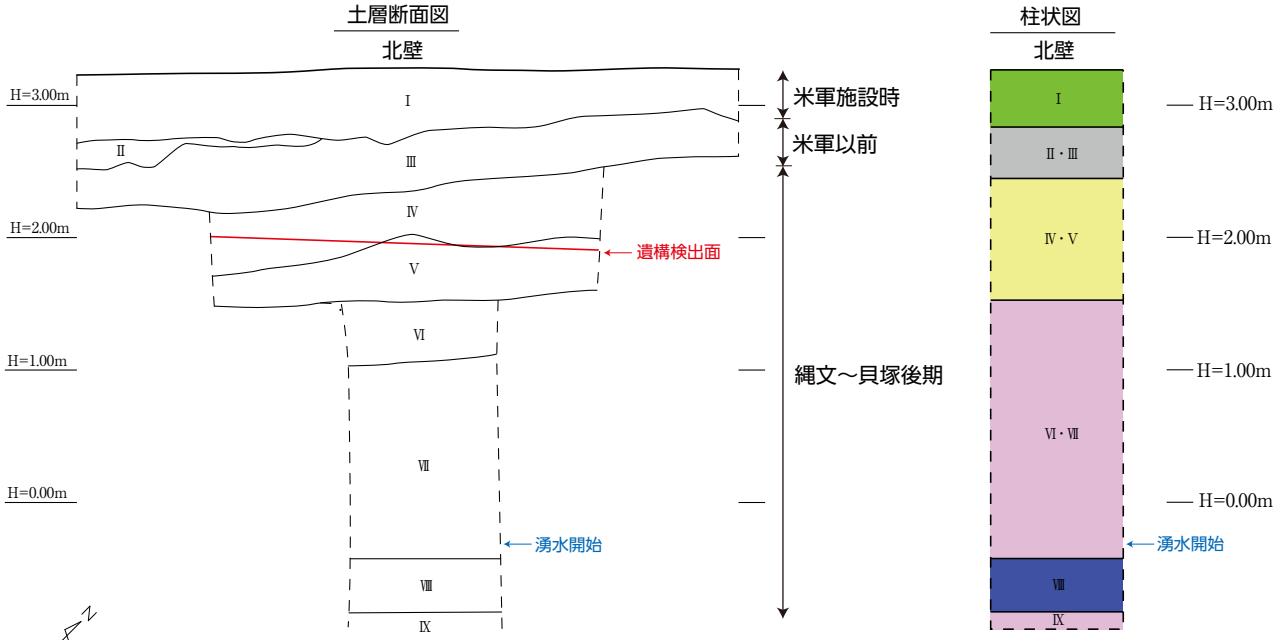


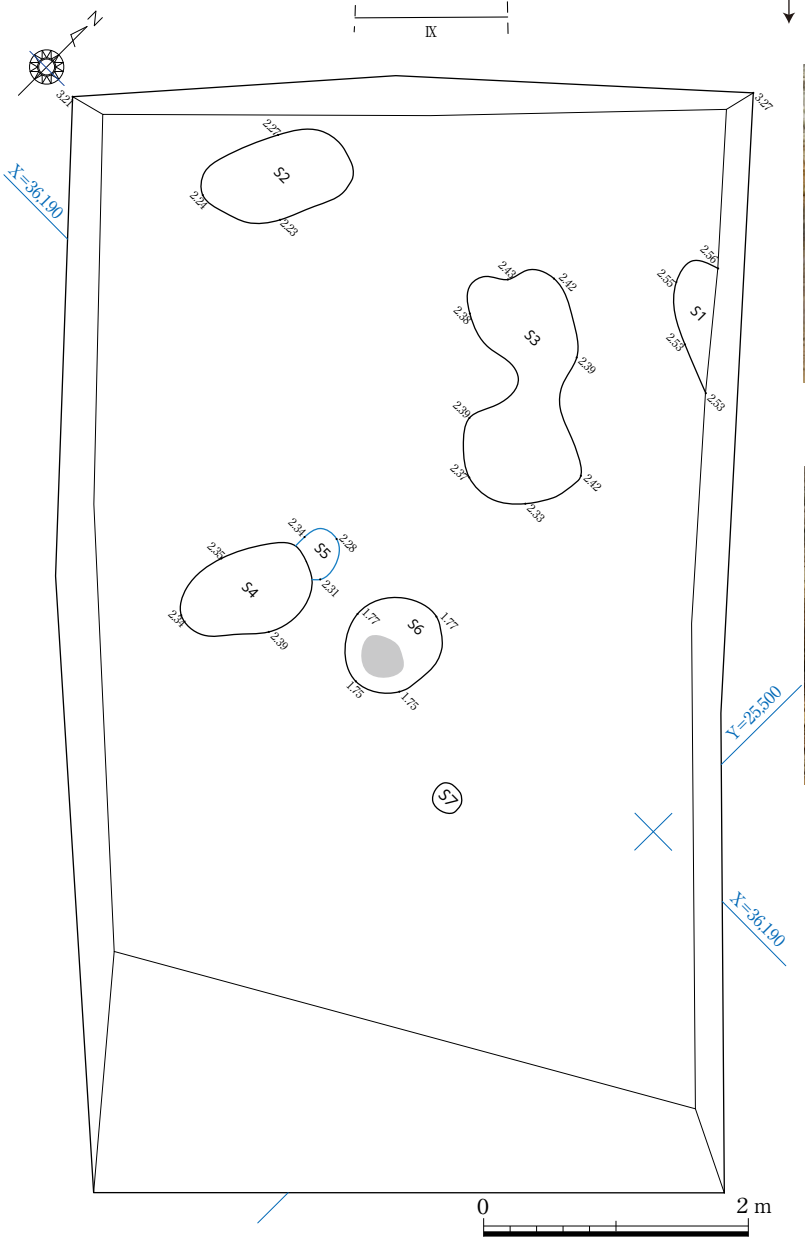
北壁

深掘り状況



第９図・図版２　試掘 No.2

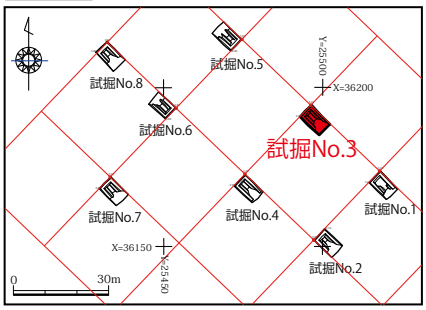




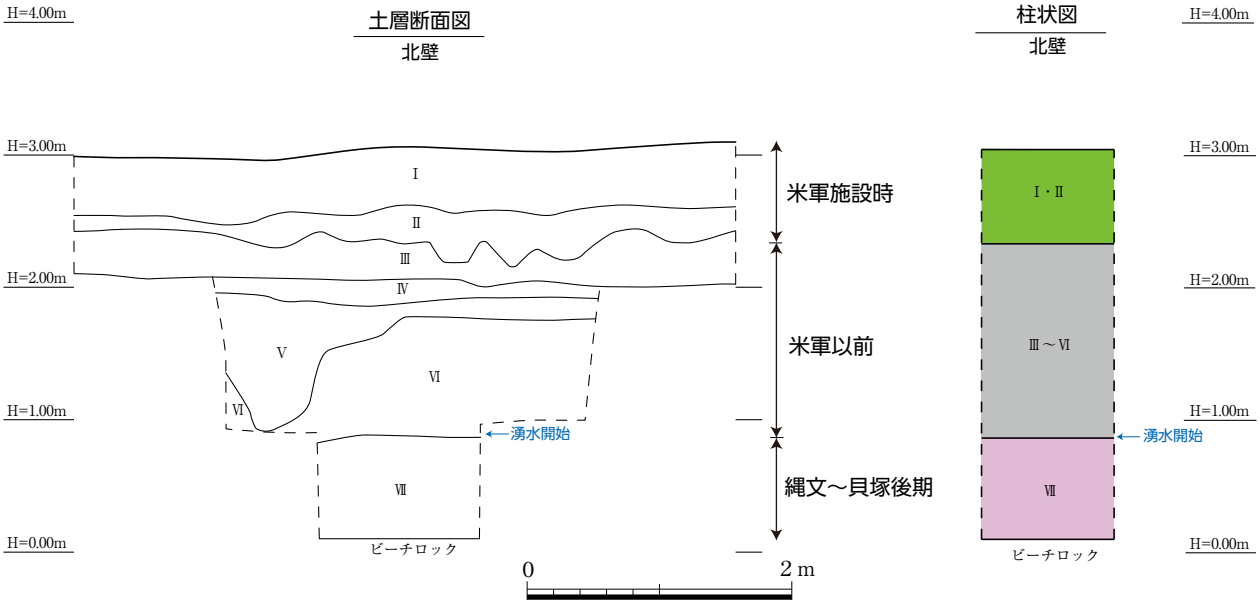
北壁

深掘り状況

位置図



第 10 図・図版３　試掘 No.３

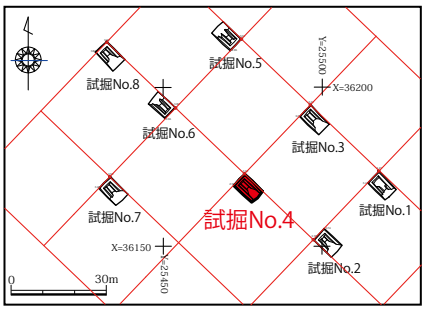


北壁

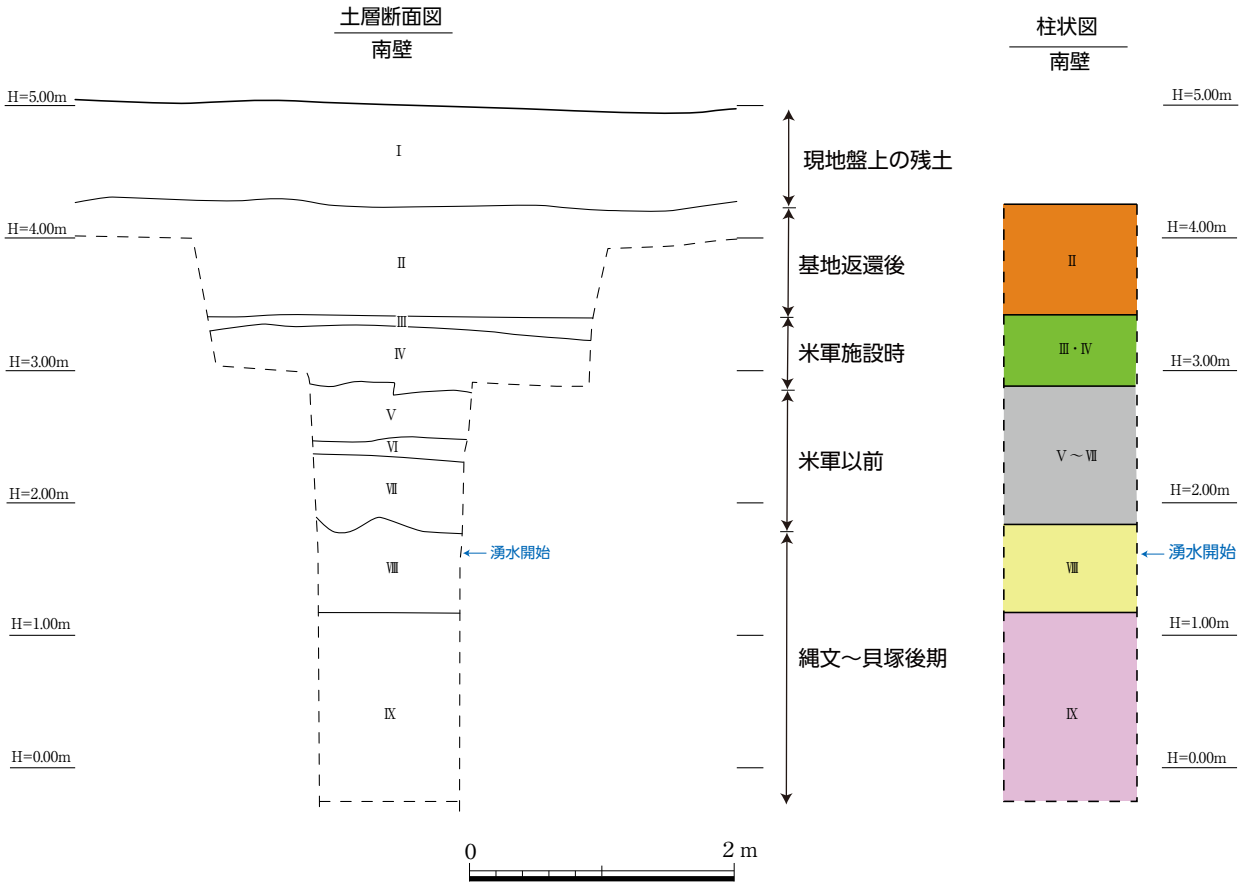
北壁

深掘り状況

位置図



第 11 図・図版４　試掘 No. 4

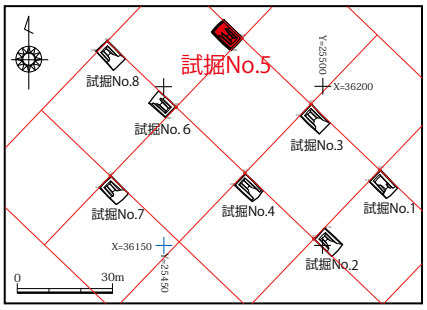


南壁

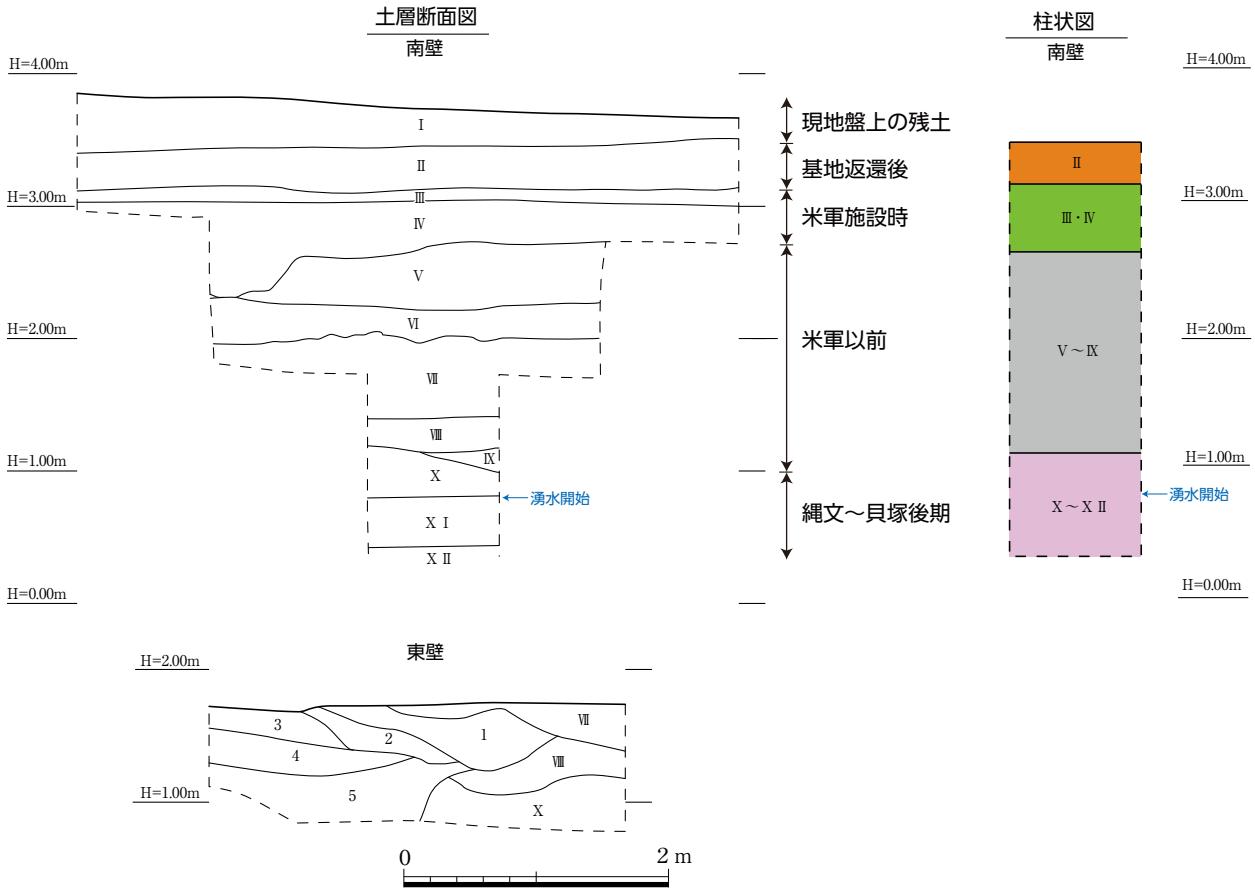
南壁

深掘り状況

位置図



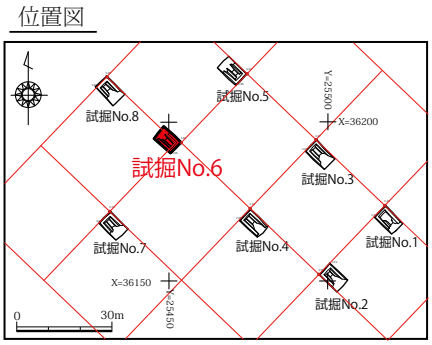
第 12 図・図版５　試掘 No.５



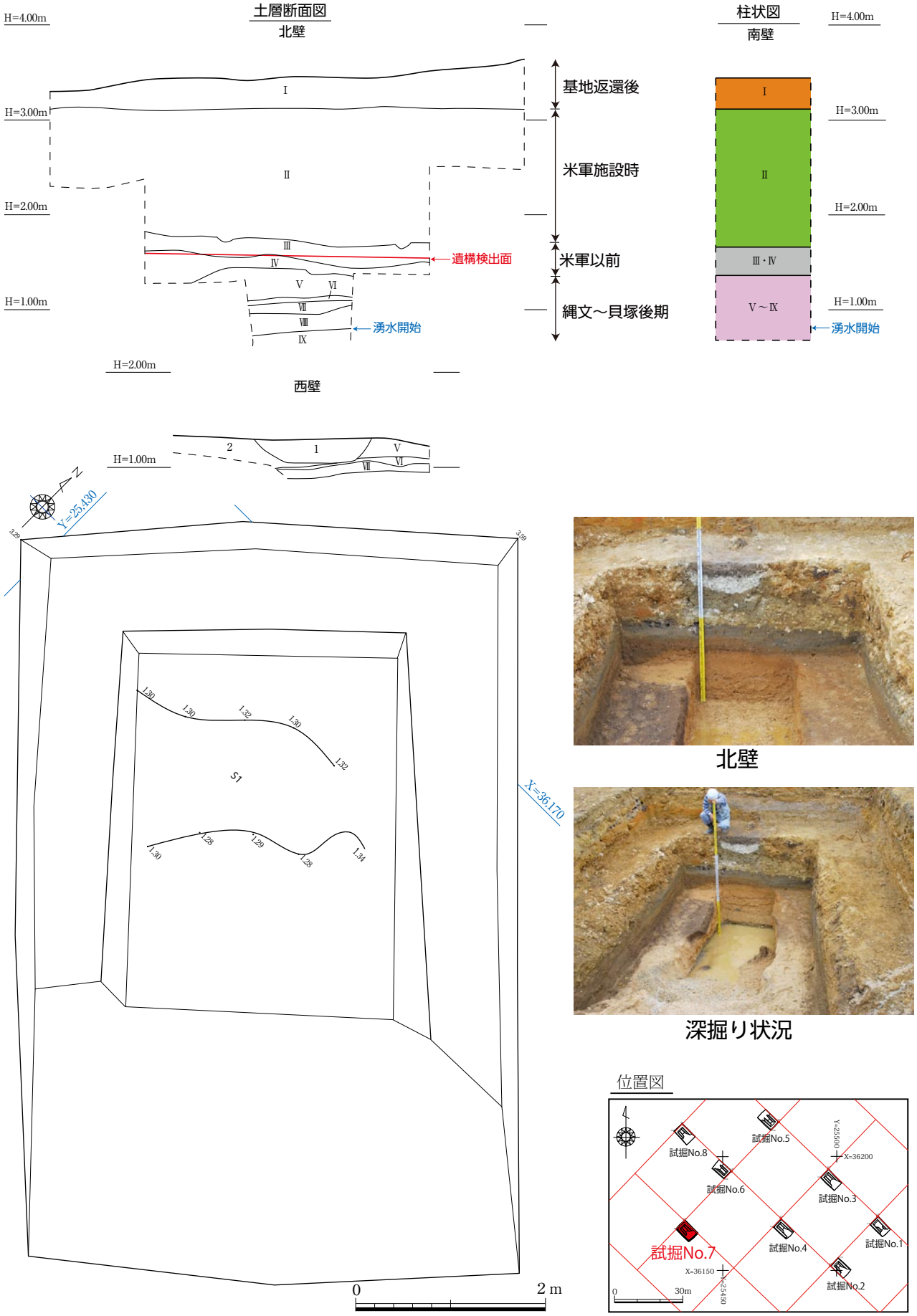
南壁

南壁

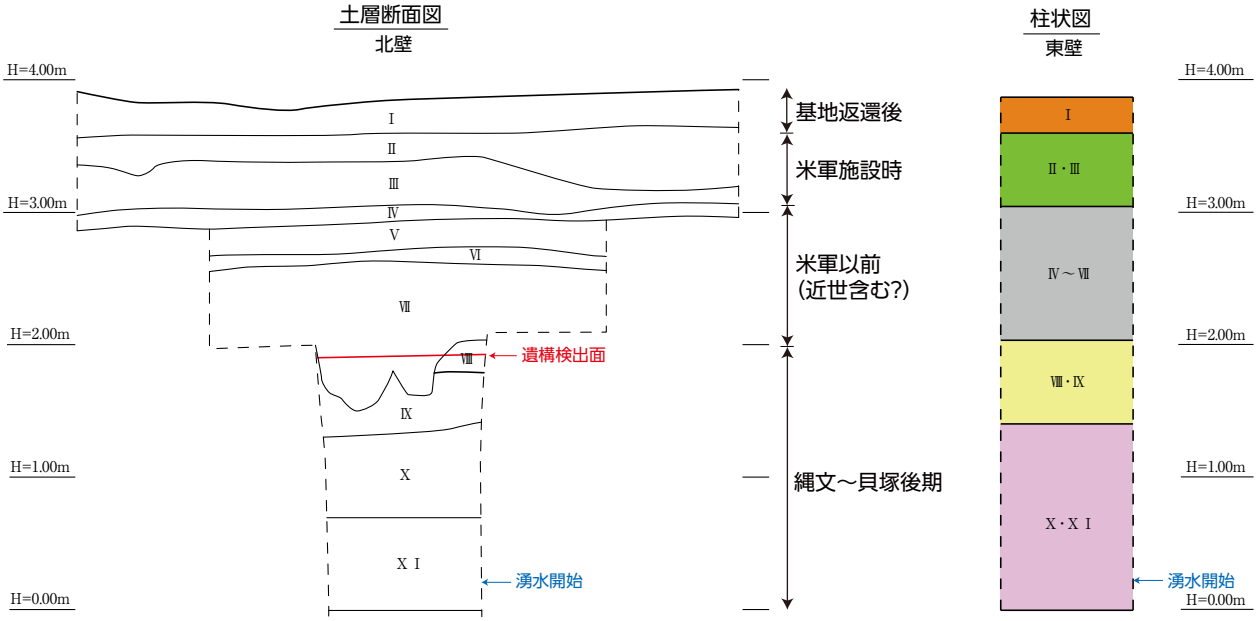
深掘り状況



第 13 図・図版６　試掘 No.6



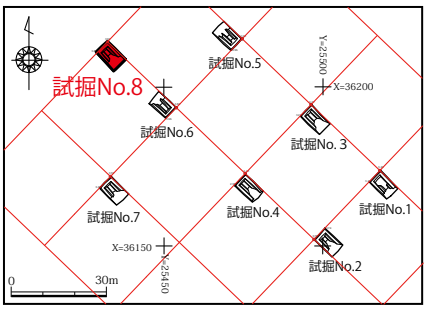
第 14 図・図版７　試掘 No.７



北壁

深掘り状況

位置図



第 15 図・図版８　試掘 No. 8

第２節　出土遺物

本節では、試掘調査で得られた出土遺物について紹介する。出土遺物は総数317点あった。内訳は、土器86点、青磁８点、褐釉陶器３点、染付14点、本土産陶磁器34点、沖縄産施釉陶器41点、沖縄産無釉陶器83点、陶質土器10点、円盤状製品３点、石器３点、貝製品１点、銭貨１点、鉄製品１点、鉄滓２点、軽石製品１点、瓦・煉瓦12点、動物遺体35点、貝類遺体85点である。得られた遺物の時期を概観すると、貝塚時代早期、貝塚時代後期、グスク時代、近世～戦前の四時期に大別することができる。出土遺物の集計表は第10表に示した。以下、各遺物について項目毎に紹介する。

１．土器

土器は総数86点出土し、時期毎に分類した。各類の出土点数は、貝塚時代早期２点（Ⅰ類）、貝塚時代後期75点（Ⅱ類）、不明９点（Ⅲ類）であった。Ⅲ類の中にはグスク土器と思われる資料も含まれる。部位別に見ると、口縁部６点、胴部70点、底部９点、不明１点である。全体的に小片で全形を窺い知れる資料はないが、概ね甕形を呈するものと考えられる。一括土器や復元可能な土器は得られなかったが、異なる試堀坑から出土した土器の接合が可能な資料が認められた。特徴的な遺物については実測を行った。以下、実測資料について記述する。なお、実測図を第16図に、写真資料を図版９に、観察一覧を第11表に、出土状況を第12表に示した。

Ⅰ類（第16図１、２）は、貝塚時代早期の土器である。図１は曽畑式土器の口縁部資料である。口唇部に刻目文を施し、表面は縦位の裏面は縦位後に斜位の条痕を施す。図２は曽畑式土器と思われる胴部片である。小片の為判然としないが、表面上部に３条の条痕が見られる。

Ⅱ類（第16図３～６、８、10、12～15）は、貝塚時代後期の土器である。図３～６は口縁部資料で、図３は口唇部平坦で口縁部は外反する。胴部へ拡がりながら移行する。内外面とも指頭圧痕が残る。図４は口唇部は舌状で口縁部は外反する。頚部はややくびれ、内外面とも指頭圧痕が明瞭に残るほか、縦横のナデ調整が見られる。図５は口唇部は舌状で口縁部は弱い波状を呈し外反する。頚部のくびれは弱く胴部へストレートに移行する。胴上部にヘラ調整（？）が見られる。図６は口唇部は丸く口縁部から胴部へは直線上で外傾する。内外器面ともナデ調整による細かな擦痕が見られる。図３、５、６は全体的に摩滅している。

図８、10は、胴部片資料である。図８は試掘No. ３ とNo. ８の資料が接合した資料で、器壁は薄く焼成が良い。裏面には細かな擦痕が見られる。図10は表面には黒斑が見られ、裏面にはハケメ調整痕が見られる。裏面の調整痕は、切り合い状況から１単位２～３cm程度と思われる。

図12～15は、底部資料である。図12は胴部から底部にかけての資料で、比較的大粒の混入物を含む。器表面は摩滅している。図13～15はくびれ平底の底部である。図13は外底縁部に粘土を貼り付け、くびれ部分を成形している。図14は外底面を弧状にナデ調整を施している。図15は外底面を直線にナデ調整が施される。外器面は幅１cm程度の単位でナデ（ヘラ？）調整を行っている。

Ⅲ類（第16図７、９、11）は、時期不明の土器である。図７は表裏面とも黒斑が見られる。外面は丁寧な調整と指頭圧痕が施されるが、内面は粗雑な仕上がりの為、混入物の白色粒が顕著に見られる。図９は海砂と思われる粗い白色粒を多く含む。器面は摩滅が顕著に見られる。図11は表裏面とも茶褐色を呈し、内部は黒色を呈する。底部は丸底を呈するものと考えられる。

第 10 表　平安山原地区試掘調査遺物出土量

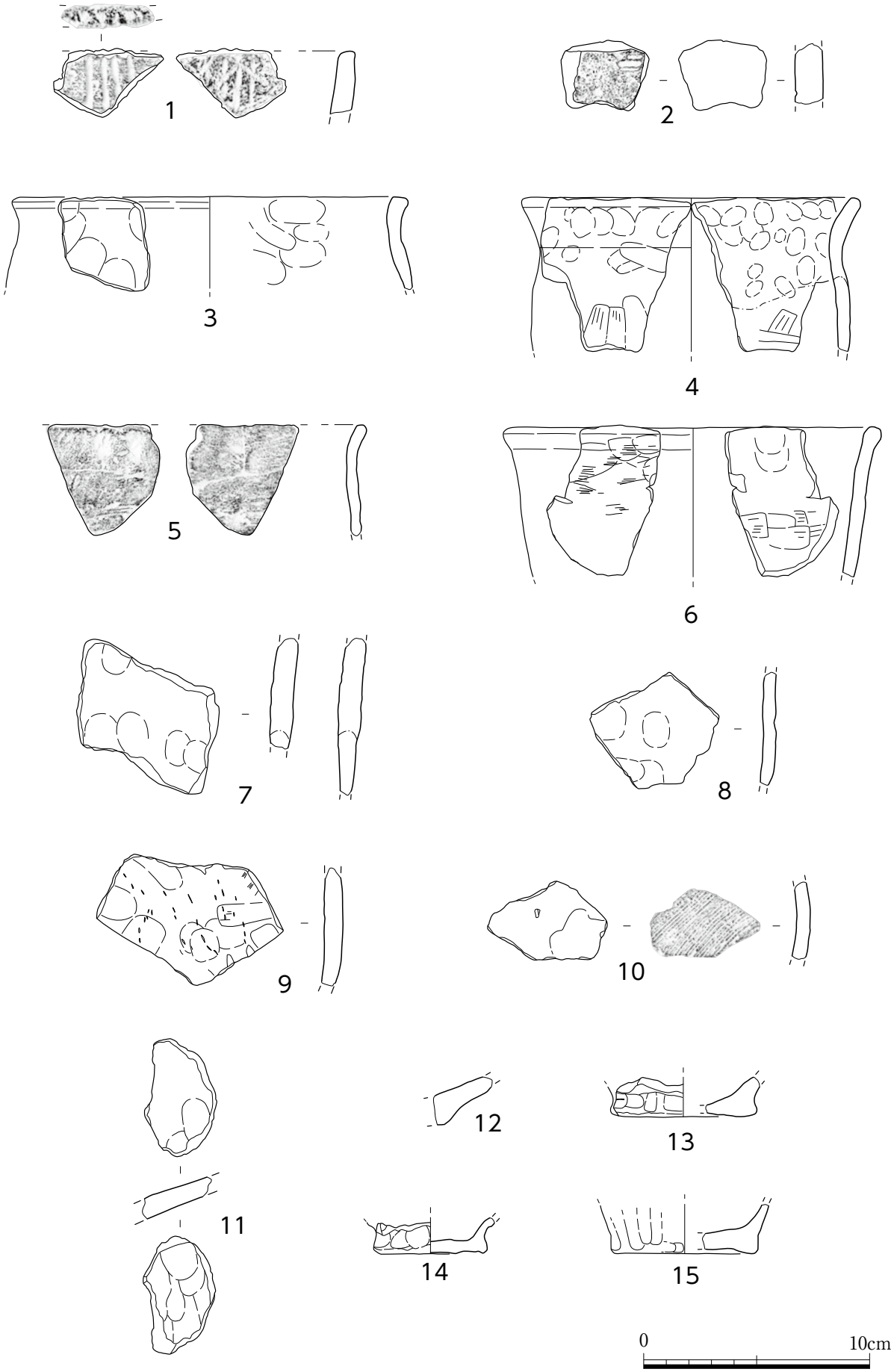
出土地 ＼ 種類		土器						青磁		褐釉陶器	染付			本土産陶磁器						沖縄産施釉陶器											沖縄産無釉陶器						陶質土器					円盤状製品	石器	貝製品	銭貨	鉄製品	鉄滓	軽石製品	瓦・煉瓦	焼土	缶詰	軍服	ガラス		合計	試掘坑別計
		曽畑	後期	くびれ平底	浜屋原？	くびれ？	グスク？	碗	皿	壺	碗	皿	香炉	碗	小碗	皿	急須	蓋	不明	碗	小碗	鉢	壺	油壺	瓶	瓶？	火炉	急須	酒器	蓋	不明	壺	火炉	鉢	甕	瓶	不明	鉢	鍋	急須	火炉	不明		磨り石										瓶	破片		
試掘No.1	Ⅱ		1				2							3			1		3	3		1		2						1	7		2		1	10		1								1			2					6	47	82
	Ⅱa							1	1		1			4		1															1																								9	
	ⅡaⅡb																														1		1																						2	
	Ⅱb							1						1			1				1								1														1	1				1							8	
	Ⅲ			6	2														1					1	1								2			1								1						1					16	
試掘No.2	Ⅳ			1																																																			1	67
	Ⅳ・Ⅴ									1	3	1		2	3	1			1	4	3			1		1		1		1	1	2	1			1	8		3	1	1		1							5					47	
	Ⅴ		2							1																							1			1																1			6	
	Ⅶ・Ⅷ		1																																														1						2	
	Ⅶ	1	2																																																			3	
	Ⅷ		6			1																																												1					8	
試掘No.3	Ⅲ		2	3							1			1	2			1		5							1				3		1																	1					21	55
	Ⅳ・Ⅴ		14	1																																																			15	
	Ⅴ		7																																																				7	
	Ⅶ		2																																																				2	
	Ⅶ下		1																																																				1	
	Ⅶ上位		5																																																				5	
	S1							1																												1																			2	
	S2																																			1																			1	
	S3																																			1																			1	
試掘No.4	Ⅲ		1					1		1									1	1													1										1						3				1		11	16
	Ⅲ～Ⅴ													1		1															2								1																5	
試掘No.5	Ⅴ～Ⅶ										1				2					2		1					3				1		3	3		3	1				2	1									1				24	31
	Ⅸ	1	4		1		1																																																7	
試掘No.6	Ⅴ・Ⅵ							2			1			1									1								3	1	2		1																				12	36
	Ⅶ										2		1							1											1		7		1	3											1						3		20	
	Ⅹ以下		3																																									1										4	
試掘No.7	Ⅴ						4																																																4	4
試掘No.8	Ⅳ下								1		1																																			1										3	24
	Ⅴ　TP･7																																2																						2	
	Ⅶ																			1													1																						2	
	Ⅸ以下		8																																																				8	
	Ⅸ		1																																																				1	
	S2																			1					1											1																			3	
	S4										1																																												1	
	S9		1								1																																												2	
	ⅩⅠ		1																																																				1	
	表採																																																				1		1	
不明															1				1																																				2	2
合計		2	69	6	1	1	7	6	2	3	12	1	1	13	8	3	2	1	7	18	4	2	1	4	2	1	3	2	1	1	2	21	2	23	3	4	30	1	5	1	1	2	3	3	1	1	1	2	1	12	1	1	1	5	6	317	
遺物別計		86						8		3	14			34						41												83						10					3	3	1	1	1	2	1	12	1	1	1	11			

第 11 表　土器観察一覧

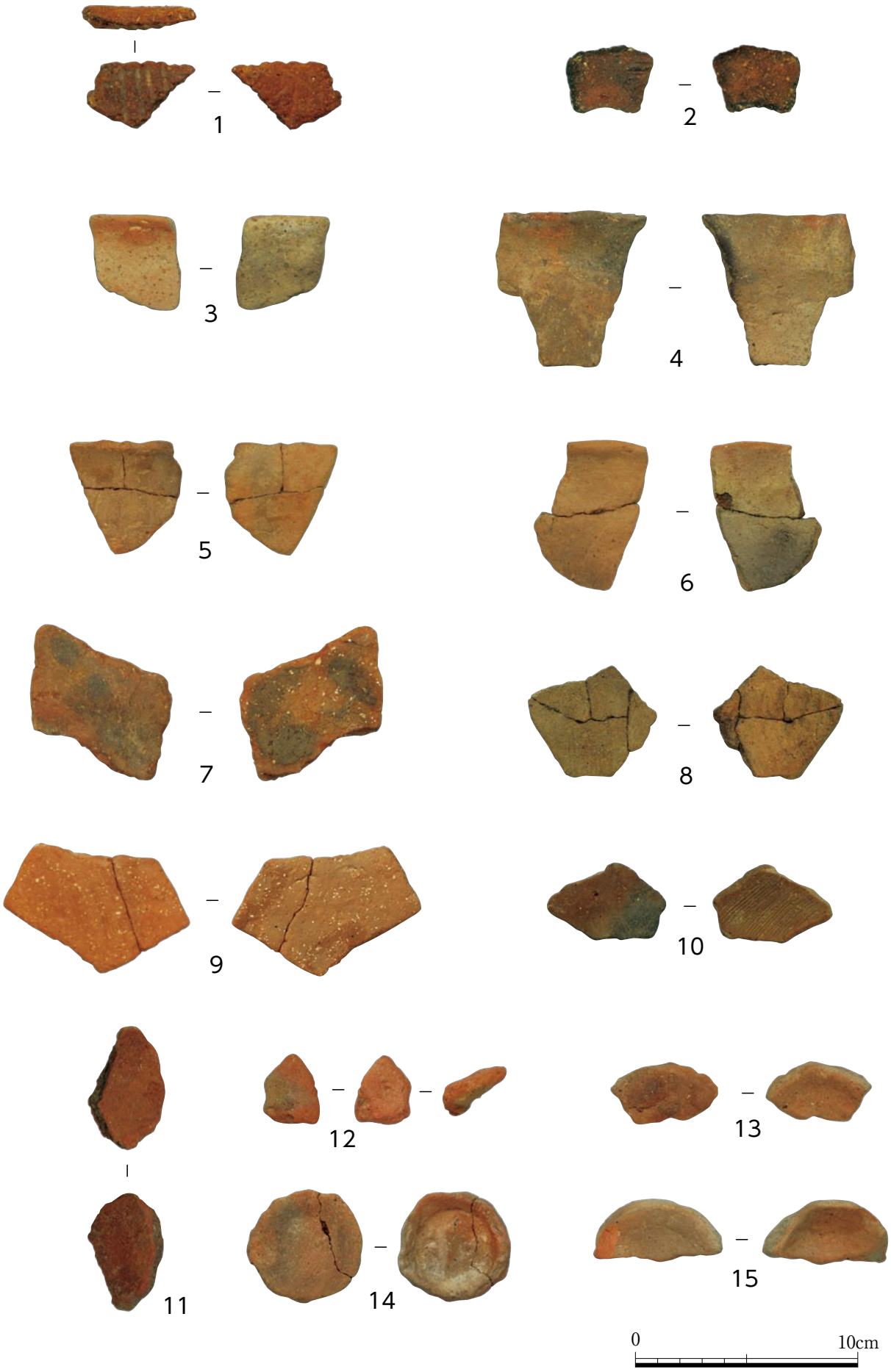
第図図版	番号	分類	部位	口径（cm） 底径（cm） 器壁 (mm)	形状	文様	混入物 種類・量・サイズ (mm)	調整	焼成質	器色	出土地
第16図 図版9	1	Ⅰ	口縁部	－ － 8	口唇部：平 口縁部：直口 底部：－	条痕	種類：ﾁｬｰﾄ・石英・砂粒 量：多 サイズ：1～2	外面：－ 内面：－	焼成：良 質：砂	外面：暗茶褐 内面：茶褐	試掘 No. 5　Ⅸ層
	2	Ⅰ	胴部	－ － 10	口唇部：－ 口縁部：－ 底部：－	条痕	種類：ﾁｬｰﾄ・石英 量：多 サイズ：1～3	外面：－ 内面：－	焼成：悪 質：砂	外面：暗茶褐 内面：暗茶褐	試掘 No. 2　Ⅶ層
	3	Ⅱ	口縁部	16.2 － 3～5	口唇部：平 口縁部：外反 底部：－	無	種類：赤・黒色粒 量：少 サイズ：1	外面：ﾅﾃﾞ 内面：ﾅﾃﾞ	焼成：良 質：やや泥	外面：橙灰 内面：灰	試掘 No. 2　Ⅶ層
	4	Ⅱ	口縁部	15.0 － 4	口唇部：舌 口縁部：外反 底部：－	無	種類：赤・黒透明粒) 量：多 サイズ：0.5～2	外面：ﾅﾃﾞ 内面：ﾅﾃﾞ	焼成：良 質：泥	外面：淡灰 内面：淡灰	試掘 No. 2　Ⅳ層
	5	Ⅱ	口縁部	－ － 4	口唇部：舌・波状 口縁部：外反 底部：－	無	種類：ﾁｬｰﾄ・赤・黒色粒 量：少 サイズ：0.5～1	外面：ﾅﾃﾞ 内面：ﾅﾃﾞ	焼成：良 質：泥	外面：橙灰 内面：橙灰	試掘 No.3　Ⅲ・Ⅴ層
	6	Ⅱ	口縁部	16.6 － 6	口唇部：丸 口縁部：外反 底部：－	無	種類：赤・白色粒 量：少 サイズ：0.5	外面：ﾅﾃﾞ 内面：ﾅﾃﾞ	焼成：良 質：泥	外面：橙灰 内面：灰	試掘 No.3　Ⅲ～Ⅴ層
	7	Ⅲ	胴部	－ － 8	口唇部：－ 口縁部：－ 底部：－	無	種類：石英・白色粒 量：多 サイズ：1～3	外面：ﾅﾃﾞ 内面：－	焼成：良 質：砂	外面：赤茶褐 内面：赤茶褐	試掘 No. 5　Ⅸ層
	8	Ⅱ	胴部	－ － 5	口唇部：－ 口縁部：－ 底部：－	無	種類：赤・白色粒 量：少 サイズ：0.5	外面：ﾅﾃﾞ 内面：ﾅﾃﾞ	焼成：普 質：泥砂	外面：暗灰緑 内面：暗灰橙	試掘 No. 3　Ⅶ層 試掘 No. 8　Ⅸ層
	9	Ⅲ	胴部	－ － 7	口唇部：－ 口縁部：－ 底部：－	無	種類：白色粒 量：多 サイズ：1～3	外面：－ 内面：－	焼成：良 質：泥	外面：淡橙 内面：淡灰緑	試掘 No. 7　Ⅴ層
	10	Ⅱ	胴部	－ － 6	口唇部：－ 口縁部：－ 底部：－	無	種類：白色粒 量：少 サイズ：1	外面：ﾅﾃﾞ 内面：ﾊｹ	焼成：良 質：泥	外面：淡茶灰 内面：淡茶灰	試掘 No.3　Ⅳ・Ⅴ層
	11	Ⅲ	底付近	－ － 7～9	口唇部：－ 口縁部：－ 底部：－	無	種類：ﾁｬｰﾄ・石英・赤色粒量：中 サイズ：0.5～1	外面：－ 内面：－	焼成：良 質：砂	外面：茶褐 内面：茶褐	試掘 No. 5　Ⅸ層
	12	Ⅱ	底部	－ － ?	口唇部：－ 口縁部：－ 底部：平	無	種類：ﾁｬｰﾄ・赤色粒 量：少 サイズ：0.5	外面：ﾅﾃﾞ 内面：ﾅﾃﾞ	焼成：良 質：泥	外面：灰赤 内面：赤橙	試掘 No. 2　Ⅷ層
	13	Ⅱ	底部	－ 6.4 4	口唇部：－ 口縁部：－ 底部：平底	無	種類：微砂粒・赤色粒 量：中 サイズ：1	外面：ﾅﾃﾞ 内面：ﾅﾃﾞ	焼成：良 質：泥	外面：淡灰 内面：橙灰	試掘 No. 3　Ⅲ層
	14	Ⅱ	底部	－ 5.0 6	口唇部：－ 口縁部：－ 底部：平底	無	種類：赤色粒 量：少 サイズ：1	外面：ﾅﾃﾞ 内面：ﾅﾃﾞ	焼成：良 質：泥	外面：淡灰橙 内面：淡灰橙	試掘 No. 3　Ⅲ層
	15	Ⅱ	底部	－ 6.4 6	口唇部：－ 口縁部：－ 底部：平底	無	種類：微砂粒・赤色粒 量：少 サイズ：0.5	外面：ﾅﾃﾞ 内面：ﾅﾃﾞ	焼成：良 質：泥	外面：淡灰 内面：淡橙	試掘 No. 3　Ⅲ層

第 12 表　土器出土量

出土地＼分類			Ⅰ類		Ⅱ類					Ⅲ類			合計	試掘合計
			曽畑		後期				くびれ平底	浜屋原？	くびれ？	ｸﾞｽｸ？		
			口縁部	胴	口縁部	胴	底付近	不明	底	底付近	底	胴		
試掘 No.1		Ⅱ				1						2	3	11
		Ⅲ				5	1		2				8	
試掘 No.2		Ⅳ			1								1	14
		Ⅴ				2							2	
		Ⅶ		1	1			1					3	
		Ⅶ・Ⅷ				1							1	
		Ⅷ				6					1		7	
試掘 No.3		Ⅲ			2				3				5	35
		Ⅳ・Ⅴ			1	13			1				15	
		Ⅴ				7							7	
		Ⅶ				8							8	
試掘 No.4		Ⅲ				1							1	1
試掘 No.5		Ⅸ	1			4				1		1	7	7
試掘 No.6		Ⅹ以下				3							3	3
試掘 No.7		Ⅴ										4	4	4
試掘 No.8		Ⅸ				1							1	11
		Ⅸ以下				8							8	
	S9					1							1	
		ⅩⅠ				1							1	
合計			1	1	5	62	1	1	6	1	1	7	86	
種別合計			2		69				6	1	1	7		



第 16 図　土器



図版９　土器

２．青 磁

今回の調査で出土した青磁は８点で完形はなく全て破片である。器種は、碗が６点（口縁部１点、胴部３点、底部２点）皿が２点（口縁部１点、底部１点）である。

試掘坑別に出土遺物をみると試掘No. １のⅡａ層から２点、Ⅱｂ層から１点、試掘No. ３の遺構Ｓ１から１点、試掘No. ４のⅢ層から１点、試掘No. ６のⅤ・Ⅵ層から２点、試掘No. ８のⅣ層下から１点の出土である。

図４は、高台の部分のみの資料で底径も小さく底部の中心部の厚みも薄い為、器種は皿と考えられる。畳付け及び高台内まで釉が掛けられているが、釉の状態は悪く高台のつくりも雑である。

図３は、碗の底部で底径は小さいが高台は高さがある。素地は焼きが悪く欠損した断面から焼きムラが確認できる。釉は薄く高台まで垂れるが畳付けまで至らず又、畳付けの幅は一定していない。外面の腰部に蓮弁文の痕跡が二本みられる。見込み部分の文様は印花文と思われる。

図１は、碗の口縁部で、やや内湾ぎみである。口縁部の文様は施文のくずれた雷文帯で、その下にやや斜め方向に一本の蓮弁文の一部がみられる。素地の程度は良く、釉も丁寧に仕上げられている。

図２は胴下、腰部にあたる部位と思われる。素地は焼きムラが断面からみられ釉は厚いが素地の状態の悪さが影響しているようだ。外面に文様はみられず内面に型押の花弁の一部と思われるものが確認できる。

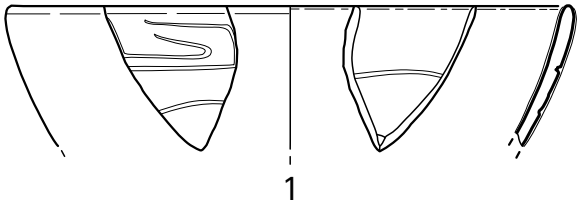
以上、器形の判明できる資料、文様の見られるもの４点を第17図１～４、図版10 １～４に図示し、図版外の遺物を含めた個別の観察記述を第13表に示した。

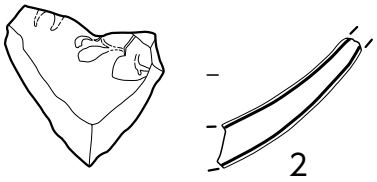
第13表　青磁観察一覧

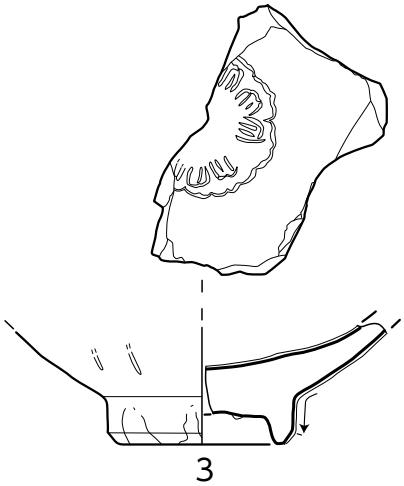
第図図版	図番号	器種	部位	口径 器高 高台径 （cm）	重量（g）	口縁形態 底部特徴	文様・外／内 施文	素　地	釉色 貫入	施　釉	備　考	出　土　地
第17図・図版10	1	碗	口縁部	15.0 － －	9	内　湾	雷文帯・蓮弁文／凸文 ヘラ	灰青色	緑青色	口縁部 内外面	15C ～	試掘No. 4　Ⅲ層
	2	碗	胴部	－ 計測不可 －	20.2	不　明	なし／花弁 型押	灰色～赤褐色	暗緑色 貫入あり	胴部 内外面	１６C 焼ムラあり	試掘No.6　Ⅴ・Ⅵ層
	3	碗	底部	－ － 4.9	66.1	－	蓮弁文／印花文 型押	黄白色～灰色	黄緑色 貫入あり	釉は畳付け になし	１６C 焼ムラあり	試掘No.1　Ⅱｂ層
	4	皿	底部	－ － 5.8	37.8	蛇の目釉剥ぎ	不　明	灰色	暗緑色	見込み及び 高台内	釉　雑	試掘No.1　Ⅱａ層
図・図版なし		碗	胴部	－ 計測不可 －	26	不　明	無文／無文	黄白色～灰色	灰緑色	胴部 内外面	焼ムラあり	試掘No.6　Ⅴ・Ⅵ層
図・図版なし		皿	口縁部	計測不可 － －	2	外　反	不　明	灰白色	淡灰色	口縁部 内外面	泉州窯系	試掘No.8　Ⅳ層下
図・図版なし		碗	胴部	－ 計測不可 －	1	細片－不明	無文／無文	赤褐色	灰白色	胴部 内外面	釉薄い	試掘No.3　Ｓ１
図・図版なし		碗	底部	－	28.2	高台	－／－	灰白色	灰白色	不明		試掘No.1　Ⅱａ層

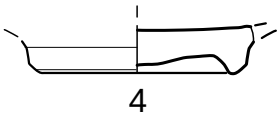
＜参考文献＞

註１　沖縄県文化財調査報告書　　第132集
首里城跡　－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－　平成10年（1998年）３月　沖縄県教育委員会
註２　重要文化財指定記念　特別企画展
首里城京の内展　－貿易陶磁からみた大交易時代－　2001年　沖縄県立埋蔵文化財センター
註３　貿易陶磁研究　NO. １－NO. ５　（合本）復刻版　日本貿易陶磁研究会　1998年　六一書房

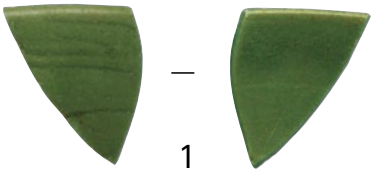


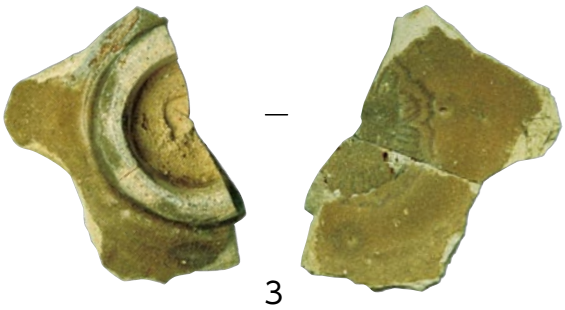


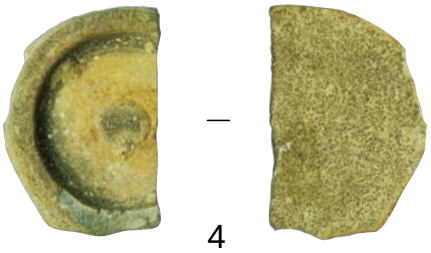




第 17 図　青磁







図版 10　青磁

３．褐釉陶器

褐釉陶器が３点得られた。いずれも胴部の小破片で、形状のわかる１点を図示した。

第 18 図、図版 11 に示した胴部片は壺と思われる。外面と内面の上部に褐釉が施され、内面下部は無釉である。両面ともにロクロ痕が顕著である。器厚４mm、重量 7.97 ｇ、試掘 No. ２　Ⅴ層出土。

掲載されていない２点についても壺の胴部片と思われ、外面、内面に褐釉が施され、試掘 No. ４ Ⅲ層出土。１点については沖縄産無釉陶器の可能性も考えられる。試掘 No. ２　Ⅳ・Ⅴ層出土。

第 18 図　図版 11　　褐釉陶器

４．染付

染付は碗 12 点、皿１点、香炉１点の計 14 点出土した。出土地は、試掘 No.1 ～３・５・６・８。試掘 No. １では２点、試掘 No. ２で４点、試掘 No. ３で１点、試掘 No. ５で１点、試掘 No. ６で３点、試掘 No. ８で３点である。

出土状況を第 14 表、遺物は第 19 図、図版 12 に示した。以下、器種ごとに述べる。

（１）碗

口縁部７点、胴部３点、底部２点の計 12 点の出土である。

口縁部は外反口縁と直口口縁である、胴部はほぼ直線的に開くと見られる。底部は内底に蛇の目釉剥ぎや削りが見られる。文様は草花文、タコ唐草文、山水文、コンニャク版花文などが見られる。

① 口縁部

第 19 図１・２は外反口縁で、図１は外面に草花文と圏線１本を施す。呉須の発色は濃い。図２は外面にタコ唐草文、内面に圏線を１本施す。図３～６は直口口縁で、図３は外面に草花文と圏線を１本施し、内面に圏線を１本施す。呉須の発色はやや淡い。口径は約 11cmを測る。図４・５は呉須の発色はやや淡い。福建広東系と思われる。図４は外面の文様は名称不明、内面に圏線を１本施す。呉須の発色はやや淡い。図５は外面の文様は名称不明、内面に圏線を１本施す。呉須の発色はやや淡い。図６は外面の文様は名称不明、圏線を１本施す。呉須の発色は濃い。

② 胴部

図７は外面に草花文、内面は内底に圏線１本を施す。呉須の発色はやや淡い。図８は外面に山水文、内面は轆轤痕が見られる。呉須の発色は濃い。図９は外面に草花文、内面は圏線を１本施し、内底に削りが施され釉境付近に細い溝が１本見られる。

③ 底部

図 10 は外面にコンニャク版花文、内面は釉止まりの上位に釉溜がある。内底は蛇の目釉剥ぎが施される。底径 8.6cm。図 11 の外面は高台下部に釉境があり畳付に達していない。畳付は無釉である。底径 4.2cm。

（２）皿

底部１点の出土である。

図 12 は底部で、内底に唐草文を施す。呉須の発色は濃い。畳付は無釉。底径 7cmを測る。

（３）香炉

香炉１点の出土である。

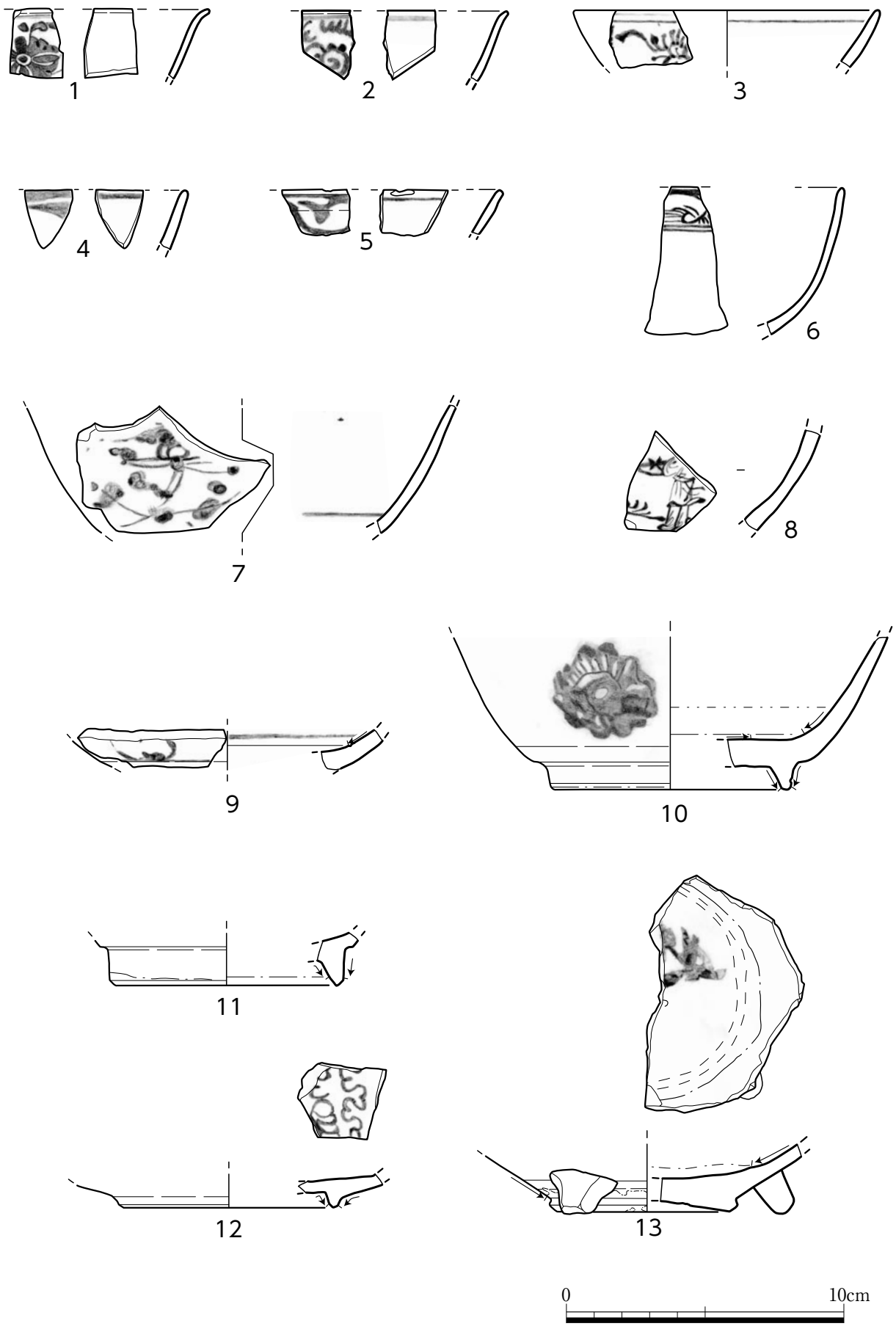
図 13 は香炉の底部で、脚は施釉される。脚付近に釉境があり高台は露胎するが、畳付に達する釉垂れも見られる。高台内には薄く白土が施される。内底は無釉で、重ね焼きの痕と墨書？が見られる。底径 6.4 ｃｍ。

第 14 表　染付出土量

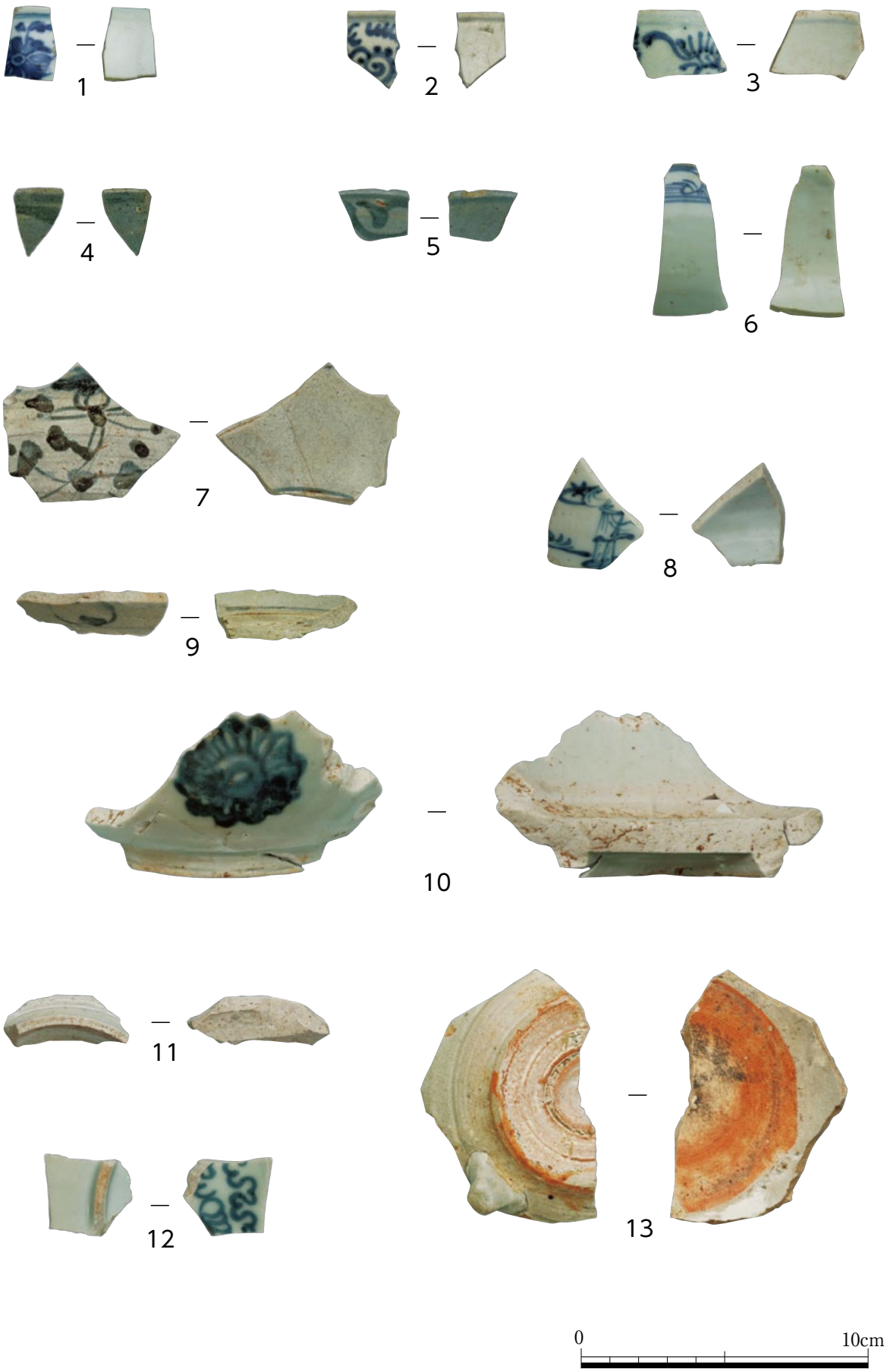
器種 / 出土地			碗 外反口	碗 直口口	碗 胴	碗 底	皿 底	香炉 底	合計	遺構別計
試掘 No.1		Ⅱa	1			1			2	2
試掘 No.2		Ⅳ・Ⅴ	1	2			1		4	4
試掘 No.3		Ⅲ			1				1	1
試掘 No.5		Ⅴ・Ⅶ		1					1	1
試掘 No.6		Ⅴ・Ⅵ		1					1	3
		Ⅶ			1			1	2	
試掘 No.8		Ⅳ下				1			1	3
	S4				1				1	
	S9			1					1	
合　計			2	5	3	2	1	1	14	14
器種別計			12				1	1	14	

第 15 表　染付観察一覧

第図図版	図番号	器種	部位	口径 (cm) 底径 (cm) 重量（ｇ）	観察一覧	出土地
第19図・図版12	1	碗	口縁部	口径：－ 重量：2.22	外反口縁。文様：外面 - 草花文、口縁上部に圏線１本。素地 - 乳白色。器厚 - ２mm。	試掘 No. 2　Ⅳ・Ⅴ層
	2	碗	口縁部	口径：－ 重量：2.25	外反口縁。様：外面 - タコ唐草文。内面 - 口縁上部に圏線１本。素地 - 乳白色。器厚 - ２～３mm。	試掘 No. 1　Ⅱa 層
	3	碗	口縁部	口径：11.0 重量：4.62	直口口縁。文様：外面 - 草花文、口縁上部に圏線を１本施す。内面 - 口縁上部に圏線１本。素地 - 乳白色。器厚 - ３mm ～４mm。	試掘 No. 2　Ⅳ・Ⅴ層
	4	碗	口縁部	口径：－ 重量：2.06	直口口縁。文様：外面 - 草花文？。内面 - 口縁上部に圏線１本。福建広東。素地 - 淡灰色。器厚 - ３mm ～４mm。	試掘 No. 2　Ⅳ・Ⅴ層
	5	碗	口縁部	口径：－ 重量：2.41	直口口縁。文様：外面 - ？。内面：口縁上部に圏線１本。福建広東。素地 - 淡灰色。器厚 -2.5mm。	試掘 No. 8　S9
	6	碗	口縁部	口径：－ 重量：8.35	直口口縁。文様：外面 - 龍？内面 - 無文。素地 - 乳白色。器厚 - ３～４mm。	試掘 No. 6　Ⅴ・Ⅵ層
	7	碗	胴部	胴径：－ 重量：15.24	文様：外面 - 草花文。内面 - 内底に圏線１本。素地 - 淡灰色。器厚 - ２～４mm。	試掘 No. 6　Ⅶ層
	8	碗	胴部	胴径：－ 重量：8.6	文様：外面 - 山水文。内面 - 無文。素地 - 乳白色。器厚 - ４～６mm。	試掘 No. 3　Ⅲ層
	9	碗	胴部	底径：7.6 重量：11.26	文様：外面 - 草花文。内面 - 内底無釉、内底に圏線１本。福建広東。	試掘 No. 8　S4
	10	碗	底部	底径：8.6 重量：85.38	文様：外面 - コンニャク版花文。外底畳付け無釉。内面 - 内底蛇の目釉剥ぎ。福建広東。素地 - 乳白色。器厚 - ４～９mm、底部で 10mm。	試掘 No. 6　Ⅶ層
	11	碗	底部	底径：4.2 重量：10.36	文様：外底畳付け無釉。内底：蛇の目釉剥ぎ。素地 - 淡灰色。器厚 - ４mm。	試掘 No. 8　Ⅳ層下
	12	皿	底部	底径：7.0 重量：7.53	文様：外底畳付け無釉。内底：唐草文。素地 - 乳白色。器厚 - ４～６mm。	試掘 No. 2　Ⅳ・Ⅴ層
	13	香炉	底部	底径：6.4 重量：63.71	文様：外底畳付け無釉。内底：文様？無釉。素地 - 黄白色。器厚 - ４～８mm。	試掘 No. 6　Ⅶ層



第19図　染付



図版 12　染付

５．本土産陶磁器

本土産陶磁器が総数34点出土した。器種をみると、碗が13点と最も多く、中には全形を窺える資料も得られた。戦前、沖縄でかなり流布した通称「スンカイマカイ」と呼ばれていた碗がほとんどである。次いで小碗が８点と続く。他には皿・急須・蓋・器種不明が僅かに得られ、第16表に出土状況を示した。文様をみると、碗は型紙摺り、小碗には銅板転写や飛鉋を施したクロム青磁が見られる。図７の皿は、同一個体に型紙摺りと銅板転写の二種の技法を用いている。皿内面の口縁上部には、型紙摺りによって菱形文が描かれ、型紙の境目が明確である。内底は銅板転写による草花文が描かれている。未報告の皿も同様な技法を用いる。皿の外面は出土した３点とも無文である。急須は２点得られた。図８の急須は、本土産磁器の口縁部で、外面に圏線と草花文らしき文様が見られる。図９は本土産陶器の急須で、常滑焼の口縁部である。主なものを第20図に図示し、報告遺物の詳細は、それぞれ器種別に観察一覧表に記述した。

＜参考文献＞

下中　弘『やきもの辞典』平凡社 1984

第16表　本土産陶磁器出土量

出土地＼器種		碗						小碗					皿		急須	蓋	不明		合計	試掘坑別計
		型紙				クロム		型紙	銅版	クロム			銅版							
		口～底	口	胴	底近	胴　底近	口	口	口～底	底	口～底	口	口～底	底	口		口	胴		
試掘 No. 1	Ⅱ			2			1								1			3	7	15
	Ⅱa	1	1	1	1									1					5	
	Ⅱb		1												1				2	
	Ⅲ																1		1	
試掘 No. 2	Ⅳ・Ⅴ	1		1						1	1	1	1					1	7	7
試掘 No. 3	Ⅲ	1						1				1				1			4	4
試掘 No. 4	Ⅲ																	1	1	3
	Ⅲ～Ⅴ	1											1						2	
試掘 No. 5	Ⅴ～Ⅶ								2										2	2
試掘 No. 6	Ⅴ・Ⅵ					1													1	1
不明												1						1	2	2
合　計		4	2	4	1	1	1	1	2	1	1	3	2	1	2	1	1	6	34	34
器種別計		13						8					3		2	1	7		34	

第17表　本土産陶磁器観察一覧

第図図版	図番号	器種	部位	種類	口径 底径 器高 (cm)	重量 (g)	観察事項	観察事項
第20図	1	碗	口～底	型紙	12.9 4.8 6.3	290	形状：高台脇から膨らみを持ちながら立ち上がり、口縁部は外反する。文様：外面-口縁部と腰部に点文を鋸歯状に描き、その間の菱形部を丸文で埋める。高台に圏線。内面-口縁部に点文を鋸歯状に描き、内底に草花文。圏線有り。内底：目痕五カ所。畳付無釉。	試掘 No. 2　Ⅳ・Ⅴ層
	2	碗	口～底	型紙	13.5 4.8 5.63	73.31	形状：高台脇から膨らみを持ちながら立ち上がり、口縁部は外反する。文様：外面-全面に点文を描き、その中に梅・竹・丸文（鶴）を描く。高台に圏線。内面-口縁部に点文を描き、梅・竹を配置。内底に草花文。圏線有り。畳付無釉。	試掘 No. 4　Ⅲ～Ⅴ層
	3	碗	口～胴	型紙	13.8 － －	11.97	形状:腰部が膨らみを持ち、口縁部は外反する。文様:外面-全面に点文＋水仙花文。内面-口縁部に点文＋水仙花文。	試掘 No. 1　Ⅱa 層
	4	碗	口～胴	型紙	10.2 － －	9.36	形状：腰部に段を有しながら立ち上がり、口縁部は直口する。文様：外面-圏線＋菊花文を長線で六角形に囲む、内面-圏線。釉色：呉須。	試掘 No. 3　Ⅲ層
	5	碗	胴	型紙	－	7.5	形状：腰部が膨らみを持つ。文様：外面-全面に草花文。内面-圏線。	試掘 No. 2　Ⅳ・Ⅴ層
	6	小碗	口～底	銅板	7.4 3.2 4.2	33.08	形状：腰部が丸みを帯びながら直線的に立ち上がる。文様：草花文（口唇部の内外に呉須釉掛け）。畳付け：無釉。	試掘 No. 5　Ⅴ～Ⅶ層
	7	皿	口～底	銅板	12.8 7.4 2.5	82.93	形状:口縁は直口し、腰部が丸みを帯びる。文様:外面-呉須による菱形文と草花文、内面-無文。畳付け：無釉。	試掘 No. 4　Ⅲ～Ⅴ層
	8	急須	口	－	7.6 － －	6.3	形状：口縁部の小破片で、口唇は舌状を呈する。文様：外面-圏線＋不明、内面-文様無し。蓋受け口と内面は無釉。	試掘 No. 1　Ⅱb 層
	9	急須	口	朱泥	6.2 － －	18.89	形状：口唇部は平らである。弧状で最大径は胴部にあり、口縁部が内彎する。文様：両面に朱泥が施され、無文。外面-ナデにより滑らかな手触り。内面-ロクロ痕が残る。	試掘 No. 1　Ⅱ層

第 20 図　本土産陶磁器

6．沖縄産施釉陶器

沖縄産施釉陶器は総数41点が出土し、第19表に出土状況を示す。器種を見ると、碗が18点と最も多く、その他には小碗、壺、瓶等が出土しているが、碗に比べてかなり少ない。試掘No. 2のⅣ・Ⅴ層からの出土が12点と多く、次いで試掘No.1のⅡ層で7点、試掘No. 3のⅢ層と試掘No. 5のⅤ～Ⅶ層が6点と続く。いずれもグスク～近世の土壌である黒色土壌からの出土である。全形を窺える資料はなく、全て破片である。その中で特徴的なものを第21図、図版13に図示し、報告遺物の詳細は観察一覧表にそれぞれ記述する。以下、器種ごとに略述する。

(1) 碗

碗は18点が出土し、形状がわかるものや特徴的な6点を図示した。釉薬の違いにより灰釉碗と白化粧土碗に分類できるが、前者は僅か3点の出土である。

第21図1～3は直口する灰釉碗で、いずれもフィガキーによる灰釉掛けが両面に施されている。図1は口縁部破片で、口径が14.4ｃｍを測る。下記の2点に比べて外側に直線的に開くタイプである。図3は高台脇が僅かに丸みを持って立ち上がる底部で、畳付は破損している。両面とも鉄釉を施した部分が見られる。図4～6は白化粧土を施し、透明釉を掛けた碗である。3点とも高台脇から若干膨らみながら立ち上がる。図5・6は外面にコバルト釉で文様を描いている。

(2) 小碗

小碗は口縁部2点、底部2点の計4点が出土し、形状の窺える3点を図示した。底部は、2点とも同じ形状であることから、1点のみを図示する。

図7・8は口縁部で、上端が僅かに外反するものである。図7は灰釉小碗で、外面に鉄釉で文様を描いている。図8は白化粧土を施した後に透明釉を掛けている。図9は底部で、外面は面取りされている。両面とも白化粧土を施した後に透明釉を掛けている。外底には鉄釉が施されるが、畳付は無釉である。内底は蛇の目釉剥ぎが行われ、透明釉のみを剥ぐ。

(3) 鉢

鉢は、外反する口縁部と胴部がそれぞれ1点ずつ得られた。2点とも黒釉と透明釉の掛け分けである。どちらも小破片のために図示は省略した。口縁部は試掘No.1　Ⅱ層、胴部は試掘No.5　Ⅴ～Ⅶ層出土。

(4) 壺

壺は5点出土した。全て小破片のため、図示は省略した。部位は胴部片が主で、耳が1点得られた。胴部片のほとんどが油壺と思われる。

(5) 瓶

瓶は口頸部が1点、胴部2点の計3点が得られた。口頸部は遺構Ｓ2からの出土であるが、口唇部が破損しており、小破片でもあることから図示は省略した。

(6) 急須

急須は2点の出土で、図10の底部1点を図示する。円錐状の脚を持つが、本来は3個と思われる。

(7) 酒器

酒器は図11に図示した1点の出土である。碁笥底の底部で、膨らみを持ちながら立ち上がる。外面は白化粧土を雑に塗った後に透明釉を施し、内面は素地にそのまま透明釉を施す。さらに、外面には、赤絵が加飾されている。

(8) 火炉

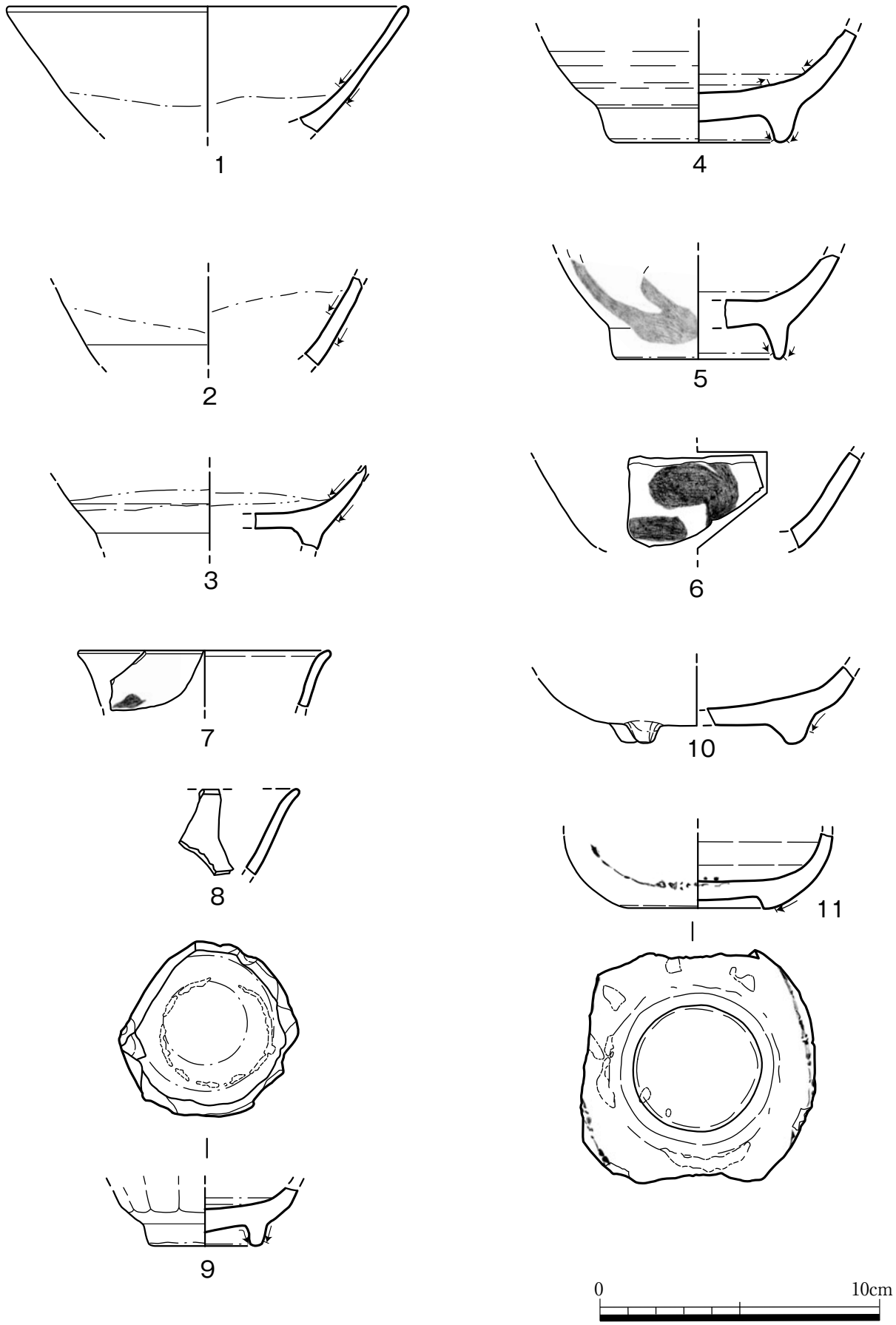
火炉は底部2点と胴部1点の計3点が出土した。小破片のため、図示は省略した。

第 18 表　沖縄産施釉陶器観察一覧

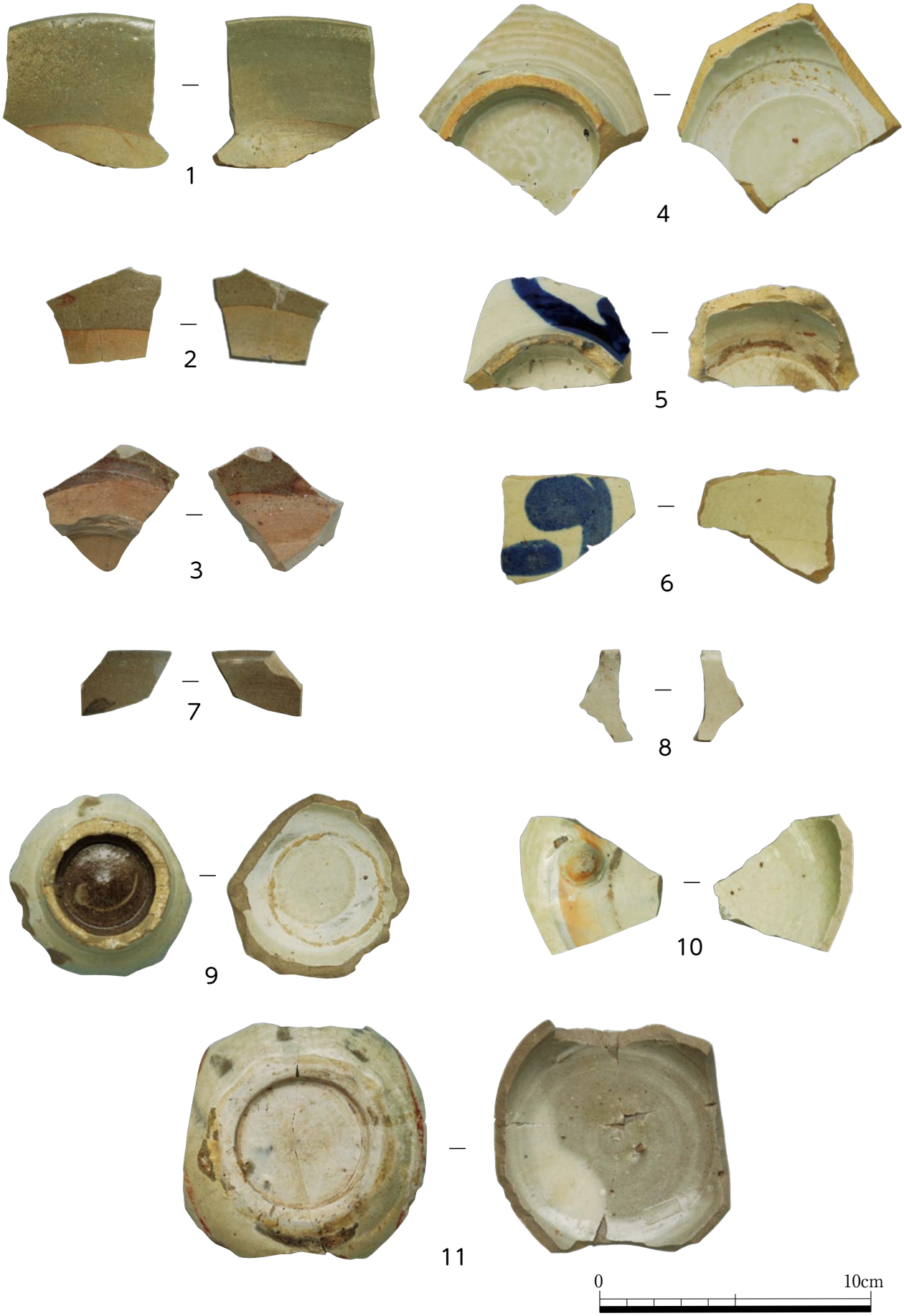
第図図版	図番号	器種	部位	口径 底径 器高 (cm)	観察事項	出土地
第21図・図版13	1	碗	口縁部 ～ 胴部	14.4 － －	形状：高台脇から口縁部へ直線的に立ち上がる直口の灰釉碗。素地：淡黄色。釉色：両面とも灰釉。フィガキーによる釉掛け。器厚：３㎜。重量：22.60 g。	試掘 No. 8　Ⅶ層
	2	碗	胴部	－ － －	形状：直線的に立ち上がる直口の灰釉碗。素地：灰色。釉色：両面とも灰釉。フィガキーによる釉掛け。器厚：４㎜。重量：9.95 g。	試掘 No. 4　Ⅲ層
	3	碗	底部	－ － －	形状:高台脇から若干丸みを持ちながら立ち上がる灰釉碗。素地:灰色。釉色:両面とも灰釉。両面とも鉄釉による加飾。フィガキーによる釉掛け。器厚：６㎜。畳付破損。高台脇で推算 8.0cm を測る。重量：17.86 g。	試掘 No. 2　Ⅳ・Ⅴ層
	4	碗	底部	－ 6.2 －	形状：高台脇から僅かに丸みを持ちながら立ち上がる。素地：淡黄色。釉色：両面とも白化粧土後に透明釉（畳付けは無釉）。内底：蛇の目釉剥ぎ、アルミナ付着。外面はロクロ痕顕著。器厚：５～７㎜。重量：67.58 g。	試掘 No. 6　Ⅶ層
	5	碗	底部	－ 6.0 －	形状：高台脇から僅かに丸みを持ちながら立ち上がる。素地：淡灰黄色。釉色:両面ー白化粧土後に透明釉（畳付けは無釉）。内底:蛇の目釉剥ぎ。文様:外面にコバルト釉（薄）で施文。器厚：７㎜。重量：68.20 g。	試掘 No. 3　Ⅲ層
	6	碗	胴部	－ －	形状：腰部が僅かに丸みを持ちながら立ち上がる。素地：淡黄色。釉色：白化粧土後に透明釉。文様:外面にコバルト釉(濃い)で施文。器厚:５㎜。重量:9.51 g。	試掘 No. 2　Ⅳ・Ⅴ層
	7	小碗	口縁部	8.8 － －	形状:口縁部上端が僅かに外反する。素地:淡灰色。釉色:両面とも灰釉。文様:外面に鉄釉で施文。器厚：３㎜。重量：3.36 g。	試掘 No. 1　Ⅱb層
	8	小碗	口縁部	－ － －	形状：口縁部上端が僅かに外反する。素地：灰色。釉色：両面とも白化粧土後に透明釉。器厚：３㎜。重量：2.32 g。	試掘 No. 2　Ⅳ・Ⅴ層
	9	小碗	底部	－ 4.2 －	形状：外面は面取りのために腰部で僅かに稜を作る。素地：灰色。釉色：両面とも白化粧後に透明釉。（畳付は無釉）内底:蛇の目釉剥ぎ。（アルミナ付着）器厚：５㎜。重量：54.55 g。	試掘 No. 2　Ⅳ・Ⅴ層
	10	急須	底部	－ 6.8 －	形状：底面に円錐状の脚を持ち、丸みを帯びながら立ち上がる。素地：灰色。釉色:両面とも白化粧土後に透明釉(外底面と脚底は無釉)。器厚:７㎜。底厚:７㎜。重量：28.43 g。	試掘 No. 2　Ⅳ・Ⅴ層
	11	酒器	底部	－ 4.6 －	形状：碁笥底の底部で、丸みを持ちながら立ち上がる。素地：灰色。釉色：外面ー白化粧土を雑に塗った後に透明釉、内面ー白化粧無しで透明釉。畳付と外底は無釉。文様:外面に赤絵。器厚：４㎜。底厚：７㎜。重量:95.88 g。	試掘 No. 1　Ⅱb層

第 19 表　沖縄産施釉陶器出土量

出土地＼器種			碗			小碗		鉢		壺	油壺		瓶		瓶？	急須		酒器	火炉		蓋	不明	合計	遺構別計
			直口			外反		外反 L																
			口	胴	底	口	底	口	胴	胴	胴耳	胴	口頸	胴	胴	胴	底	底	胴	底	胴	胴		
試掘 No.1	Ⅱ		1	1	1			1				2										1	7	11
	Ⅱb					1												1					2	
	Ⅲ											1		1									2	
試掘 No.2	Ⅳ・Ⅴ			3	1	1	2				1				1		1				1	1	12	12
試掘 No.3	Ⅲ			4	1											1							6	6
試掘 No.4	Ⅲ			1																			1	1
試掘 No.5	Ⅴ～Ⅶ			2					1										1	2			6	6
試掘 No.6	Ⅳ・Ⅴ									1													1	2
	Ⅶ				1																		1	
試掘 No.8	Ⅶ		1																				1	3
		S2	1										1										2	
合計			3	11	4	2	2	1	1	1	1	3	1	1	1	1	1	1	1	2	1	2	41	
器種別計			18			4		2		1	4		3			2		1	3		1	2		



第 21 図　　沖縄産施釉陶器



図版 13　沖縄産施釉陶器

７．沖縄産無釉陶器

沖縄産無釉陶器が総数83点出土した。器種別にみると鉢が23点、壺が21点と多数出土し、その他には瓶や甕等が僅かに得られた。層序をみると、試掘No.１のⅡ層で20点と最も多く、次いで試掘No.２のⅣ・Ⅴ層、試掘No.６のⅦ層、試掘No.５のⅤ～Ⅶ層からの出土が多い。出土状況は第21表に示した。第22・23図、図版14・15に特徴的なものを取り上げ、器種ごとに報告する。詳細はそれぞれ観察一覧表に記す。

（１）壺

壺は21点が得られ、６点を図示した。

第22図１・２は口縁部で、両者とも口唇部は丸みを帯び、カマボコ状肥厚となる。同図３～６は底部で、前者３点は立ち上がりが直線的であるが、同図６は少し丸みを持って立ち上がる。同図４は底径が7.2cmと小さく、小壺又は瓶の可能性もあり得る。

（２）火炉

同図７・８に図示した２点である。両方とも口縁部で、同図８は逆くの字状に屈曲する部分の破片である。

（３）鉢

鉢は23点の出土で、そのうち、６点を図示した。

同図９は直口する鉢の口縁部である。

同図10は断面形が逆Ｌ字状で､直口する鉢の口縁部である。口唇部の上面に１条の圏線が施される。

同図11～14は擂鉢である。擂鉢に関しては安里氏らによる共同研究(註1)があり、Ⅰ～Ⅳ式に形式分類している。それによると、今回掲載した擂鉢はⅠ～Ⅲ式に分類される。報告遺物以外の擂鉢を観察すると、Ⅰ～Ⅱ式が多い。

（４）甕

甕は底部１点、胴部２点の計３点が出土した。小破片で形状が不明なことから図示は省略する。３点とも厚手で、底部の立ち上がり部には顕著な削り痕がみられる。

（５）瓶

瓶は胴部が４点得られ、頸部２点も胴部に含めた。瓶も小破片で形状が不明なことから図は省いた。頸部２点には圏線が施されている。胴部１点には外面に叩き痕がみられる。

（６）不明

同図15は不明遺物で、取り敢えず本項で報告する。器厚は５～８㎜で、外面には火を受けて黒色を呈する箇所が見られる。石英や黒色粒、白砂粒などを多量に混和する特徴がある。外面には調整痕が明瞭に残っている。試掘No.３ Ⅳ・Ⅴ層出土。

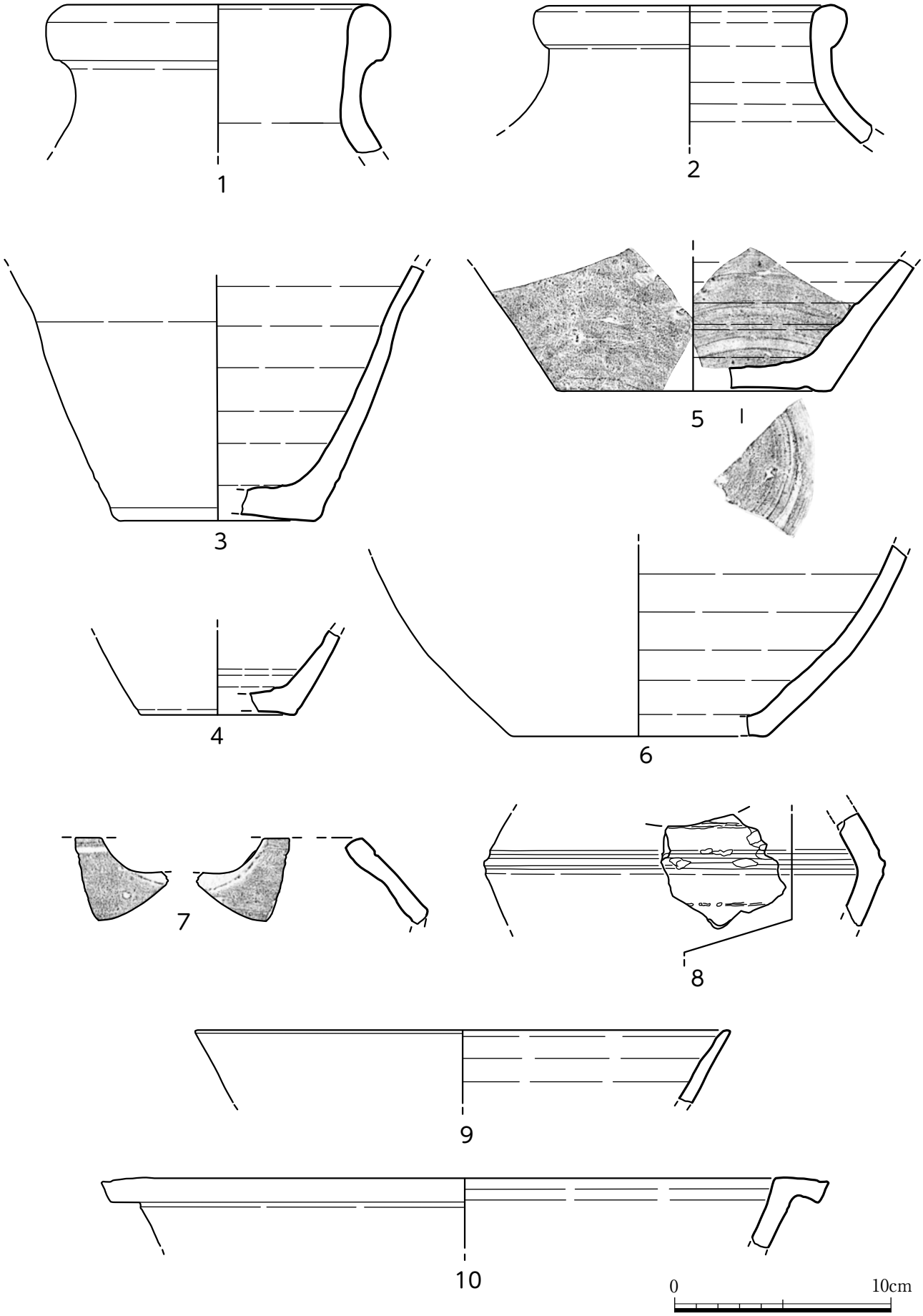
註１：名護博物館紀要・３『あじまぁ』「擂鉢編年からみた近世琉球窯業の展開」ｐ79　　安里進・上原政昌・家田淳一

第 20 表　沖縄産無釉陶器観察一覧

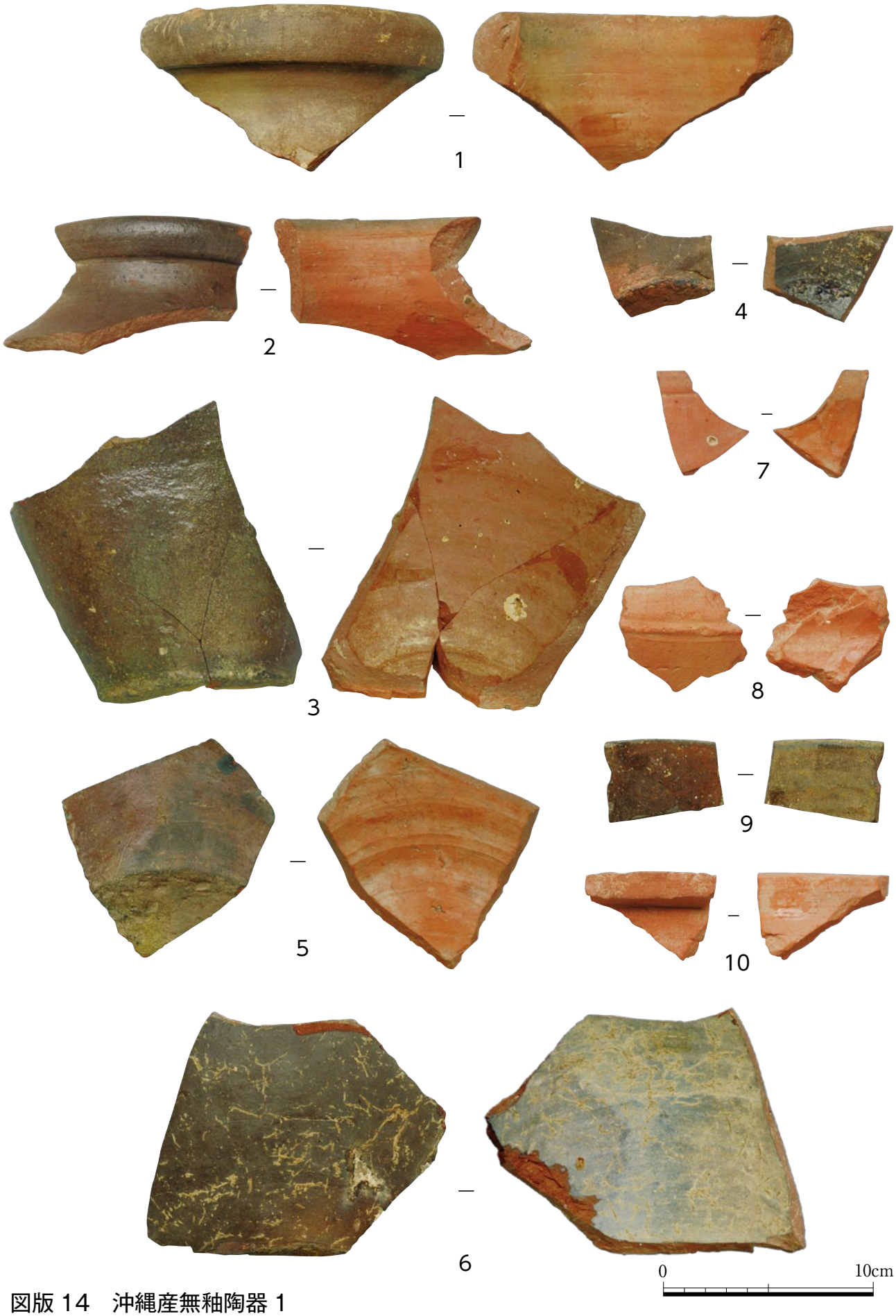
図版	図番号	器種	部位	口径 底径 器高 (cm)	観察事項	出土地
第22・23図・図版14・15	1	壺	口縁部	16.0 － －	形状:玉縁状の肥厚口縁、撫肩。素地:褐色。器色:外面-暗褐色、内面-茶褐色。焼成:良好。混和材:赤色粒、白色粒。重量：233 ｇ。	試掘 No. 1　Ⅱ層
	2	壺	口縁部	14.2 － －	形状:玉縁状の肥厚口縁、撫肩。素地:褐色。器色:外面-暗褐色、内面-茶褐色。焼成:良好。混和材:赤色粒。重量：112.82 ｇ。	試掘 No. 3　Ⅲ層
	3	壺	底部	－ 9.0 －	形状：底面から直線的に立ち上がる。外面には泥釉（光沢）、気泡有り。焼成：良好。器色：外面－暗褐色、内面-暗茶褐色。混和材：黒色粒、白色粒。内面：轆轤痕顕著。重量：299 ｇ。	試掘 No. 4　Ⅲ～Ⅴ層
	4	壺	底部	－ 12.8 －	形状：底面から直線的に立ち上がる。焼成：良好。器色：外面－暗茶褐色、内面：茶褐色。内面に轆轤痕顕著。外面の底面近くに削り痕。混和材：赤色粒。重量：194 ｇ。	試掘 No. 1　Ⅱａ層
	5	壺	底部	－ 7.2 －	形状：小振りで、底面から直線的に立ち上がる。焼成：良好。器色：内外面とも暗褐色。素地：暗茶褐色。混和材：石英、赤色粒。外面の底部近くにヘラ削り痕。重量：39.8 ｇ。	試掘 No. 6　Ⅶ層
	6	壺	底部	－ 12 －	形状：底面から胴部にかけて膨らみを持ちながら立ち上がる。焼成：良好。器色：外面－暗褐色、内面－青灰褐色。素地：褐色。混和材：石英、赤色粒。重量：265 ｇ。	試掘 No. 1　Ⅱｂ層
	7	火炉	口縁部	－ － －	形状：口唇は平ら、窓を持つ。文様：幅２㎜の圏線１条。素地：茶色。焼成：良好。器色：内外面－茶色。混和材：茶・白粒。重量：16.17 ｇ。	試掘 No. 2　Ⅳ・Ⅴ層
	8	火炉	口縁部	－ － －	形状:逆くの字状に屈曲、窓有り。屈曲の上下に４㎜程の圏線が１条ずつ。焼成:良好。素地:橙色。器色：内外面－橙色。混和材：黒・白粒。重量：37.44 ｇ。	試掘 No. 6　Ⅴ・Ⅵ層
	9	鉢	口縁部	24.7 － －	形状：外傾する直口口縁。素地：暗茶褐色。器色：内外面-暗褐色。焼成：良好。混和材：白・黒色粒。器面調整：両面ともに指圧痕、ヘラ痕。重量：20.49 ｇ。	試掘 No. 6　Ⅶ層
	10	鉢	口縁部	28.8 － －	形状：外傾する直口口縁。口唇幅 2.5cm、逆Ｌ字状、断面形は四角形。文様：口唇に幅 1.5㎜の圏線が１条。素地：橙色。器色：内外面－橙色。重量：38.83 ｇ。	試掘 No. 5　Ⅴ～Ⅶ層
	11	擂鉢	口～ 底部	30.4 10.2 14.4	形状：口縁部を作る際に出来た屈曲部と、その下部に回転横ナデによって出来る屈曲部が凸帯となる。口唇幅は 1.8cm で、口縁端は四角い。注口有り。素地：茶色。器色：内外面－赤茶色。焼成：良好。混和材：石英、赤・黒色粒。カキ目：口縁上端から２cm 部分はナデによってカキ目消し。カキ目数：７本１組。カキ目溝：1.5 ～２㎜幅。カキ目放射状（1.5cm 前後開け）。器面調整：ナデ。擂鉢編年Ⅰ式。	試掘 No. 5　Ⅴ～Ⅶ層
	12	擂鉢	口縁部	24.7 － －	形状:口縁部にくびれ部分が有り、稜を作る。口唇幅は 1.4cm で、口縁端は丸い。素地:暗茶褐色。器色:外面－赤茶褐色（若干光沢）、内面－茶褐色。焼成:良好。混和材:石英、赤･黒色粒。カキ目:口縁上端から 1.5cm 部分はナデによってカキ目消し。カキ目数:11 本１組。カキ目溝:1 ～ 1.5㎜幅。カキ目放射状 (1.5cm 前後開け)。器面調整：ナデ。擂鉢編年Ⅱ式。	試掘 No. 6　Ⅶ層
	13	擂鉢	底部	－ 9.0 －	形状：底面から僅かに丸みを帯びて一端窄まり、それから外側に開く。素地：茶褐色。器色：内外面-茶褐色。焼成：良好。混和材：石英、白･赤色粒。カキ目：口縁上端はナデによりカキ目消し。カキ目溝：１～２㎜幅。カキ目数：10 本１組。カキ目放射状（間隔開け）。器面調整：ナデ、外面の底部下部は削り痕。擂鉢編年Ⅰｏｒ Ⅱ式。	試掘 No. 5　Ⅴ～Ⅶ層
	14	擂鉢	底部	－ 12.0 －	形状：底面から僅かに丸みを帯びながら外側に開く。素地：暗褐色。器色：内外面-暗灰褐色（外面はやや淡）。光沢は見られず。焼成：良好。混和材：白・黒色粒。カキ目溝：１～ 1.5㎜幅。カキ目数：６本１組。カキ目重複。器面調整：ナデ。外面に多数の気泡が見られるが、潰れずアバタ状にならない。擂鉢編年Ⅲ。	試掘 No. 1　ⅡaⅡb層
	15	不明	胴部	－ － －	器厚：５～８㎜。器色：外面-赤褐色、内面-灰茶褐色。混和材：石英、黒色鉱物、砂粒。器面調整：外面-ﾅﾃﾞ調整（条痕明瞭）、内面-条痕・指圧痕。	試掘 No. 3　Ⅳ・Ⅴ層

第 21 表　沖縄産無釉陶器出土量

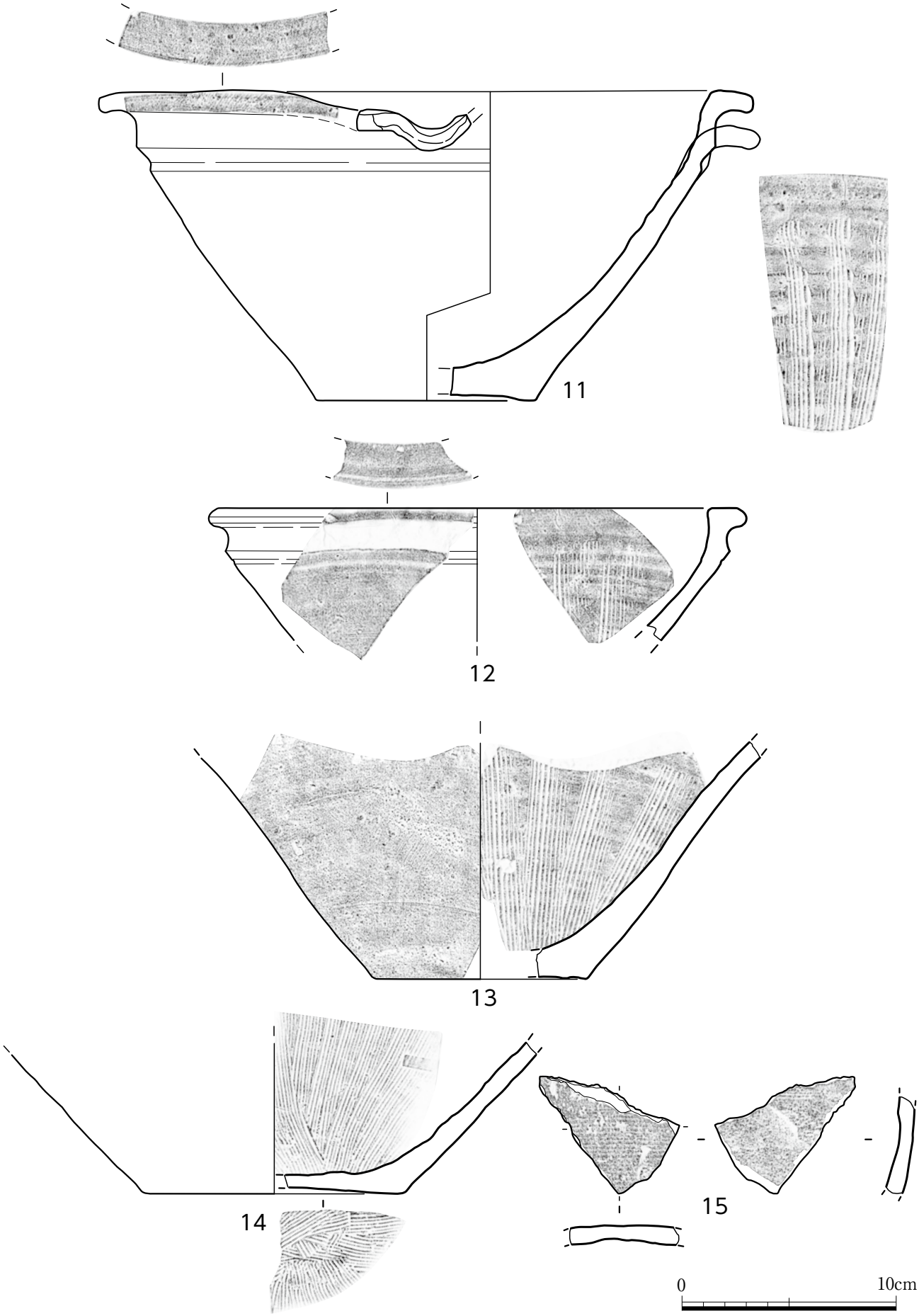
出土地	器種		壺			火炉	鉢						甕		瓶	不明	合計	試掘別計
							擂鉢											
			口	胴	底	口	口～底	口	胴	底	口	胴	胴	底	胴	胴		
試掘 No.1	Ⅱ		1	6					1	1					1	10	20	26
	Ⅱａ				1												1	
	ⅡａⅡｂ				1					1							2	
	Ⅲ								1			1				1	3	
試掘 No.2	Ⅳ・Ⅴ		1	1		1									1	8	12	14
	Ⅴ								1							1	2	
試掘 No.3	Ⅲ		1	2								1					4	7
		S1														1	1	
		S2														1	1	
		S3														1	1	
試掘 No.4	Ⅲ							1									1	3
	Ⅲ～Ⅴ			1	1												2	
試掘 No.5	Ⅴ～Ⅶ			1			1			1	1		2	1		3	10	10
試掘 No.6	Ⅴ・Ⅵ			3		1				1		1			1		7	19
	Ⅶ				1			1	5		1				1	3	12	
試掘 No.8	Ⅴ							1	1								2	4
	Ⅶ								1								1	
		S2														1	1	
合　計			3	14	4	2	1	3	10	4	2	3	2	1	4	30	83	
器種別計			21			2	23						3		4	30		



第 22 図　沖縄産無釉陶器 1



図版 14　沖縄産無釉陶器 1



第 23 図　沖縄産無釉陶器２

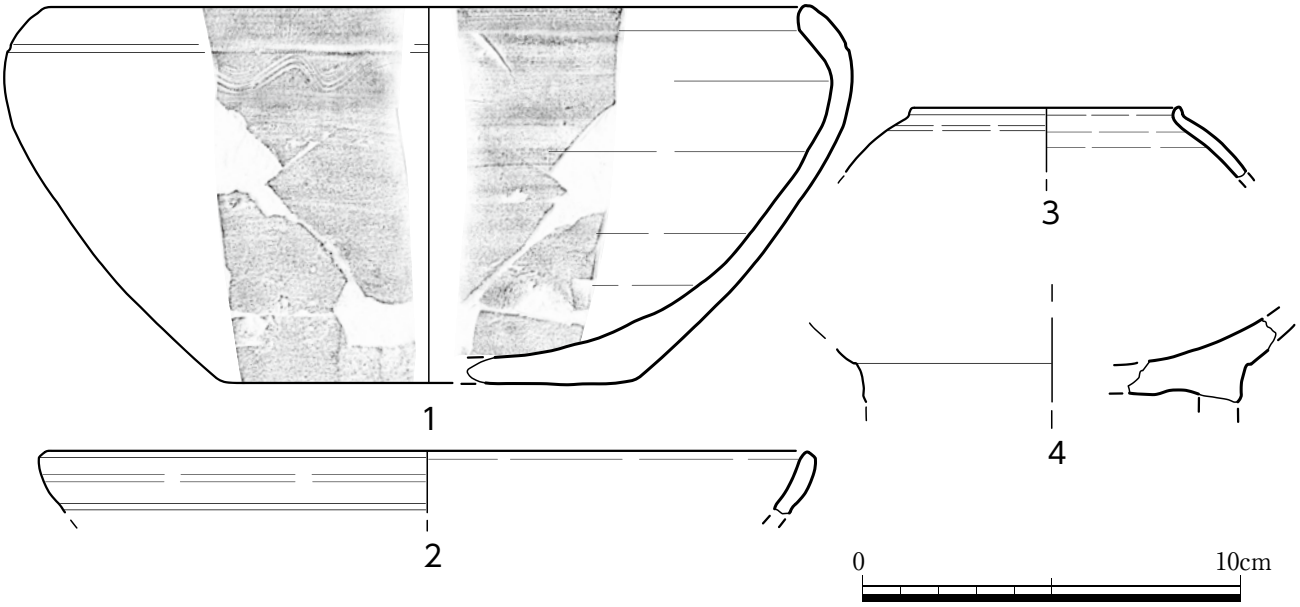
図版 15　沖縄産無釉陶器２

８．陶質土器

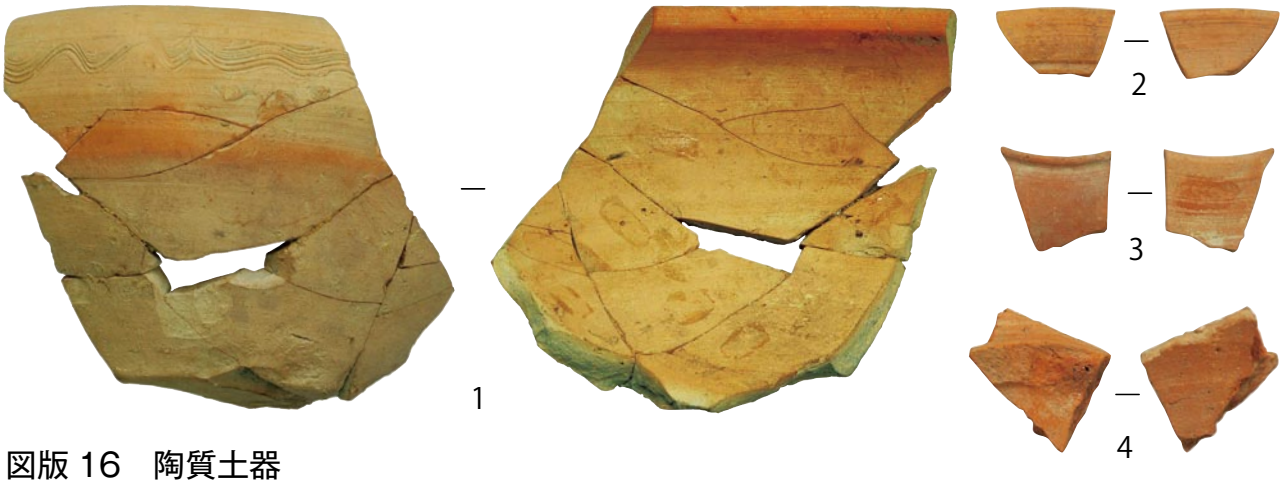
陶質土器が10点出土した。器種をみると鉢、鍋、急須、火炉が見られ、形状が分かる４点を第24図、図版16に図示した。図１は口縁～底部まで全形が窺える資料である。出土状況や個々の特徴については、第22表の観察一覧に詳細を記した。

第22表　陶質土器観察一覧

第図 図版	図番号	器種	部位	口径 底径 器高 (cm)	観察事項	出土地
第24図・図版16	1	鉢	口～底部	20.0 11.0 10.0	形状：底部から直線的に立ち上がり、口縁部が内彎する。口縁部は厚手。文様：屈曲部に圏線１条と波状文を巡らす。器色：淡橙色。素地：淡灰橙色.。混和材：光る鉱物（黄）、黒色粒。内面：ロクロ痕顕著。	試掘 No.５　Ⅴ～Ⅶ層
	2	鍋	口縁部	20.0 － －	形状：口唇部は丸みを持ち、わずかに膨らみを持つ。小破片のため、全形は不明。文様：口縁部から1.4cm直下に幅２㎜の圏線が１条有り。器色：橙色。	試掘 No.４　Ⅲ～Ⅴ層
	3	急須	口縁部	7.0 － －	形状：口径より胴径が大きく、胴部にかけて膨らむ。薄く轆轤引きされる。小破片のため、全形は窺えない。文様：無。器厚：３㎜。器色：淡橙色。光る鉱物（黄）。内面：轆轤痕顕著。	試掘 No.２　Ⅳ・Ⅴ層
	4	火炉	底部	－ － －	形状：高台があり、僅かに膨らみながら立ち上がる。畳付は破損。器色：橙色。底厚：８㎜：小破片のため、全体の形状は不明。	試掘 No.２　Ⅳ・Ⅴ層



第24図　　陶質土器



図版16　陶質土器

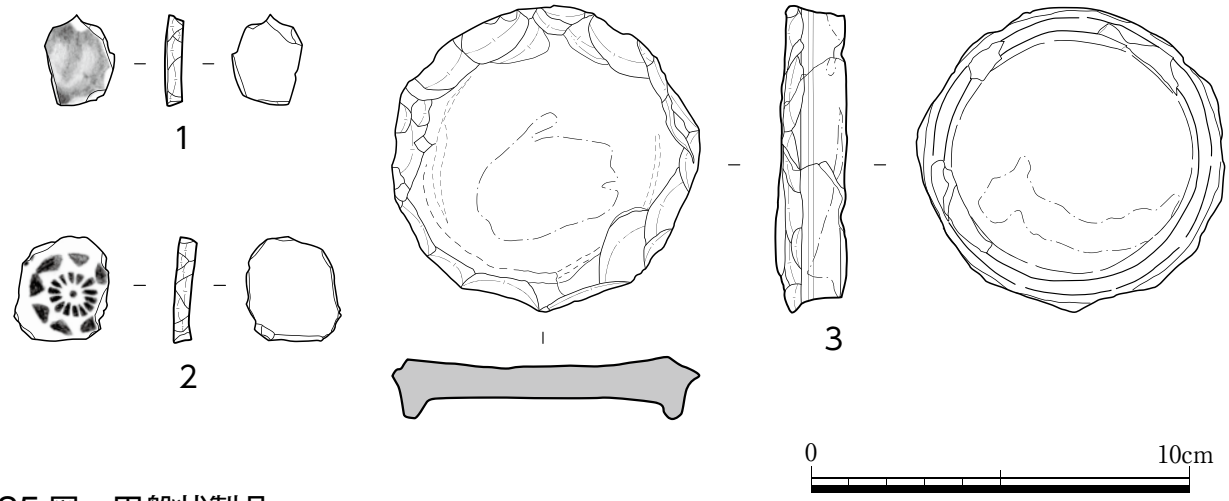
９．円盤状製品

本遺跡出土の円盤状製品は３点である。素材として使用されているのは本土産磁器１点、染付１点、福建染付１点である。第 25 図、図版 17 に図示し各資料について記述する。

図１の資料は染付の胴部を利用した小型の資料である。打割は粗く形状は正円ではない。図柄の範囲より製品が小さく絵付けの図柄や範囲が確認できない。法量は長径 2.4cm、短径 1.8cm、器厚 0.4 cm、重さ 2.7g、試掘 No. ２、Ⅳ層・Ⅴ層出土。

図２の資料は本土産磁器の碗の胴部を用いており僅かに縦長の形状を呈す。絵付けの図柄から砥部焼と思われる。中心に図柄が位置するように打割されている。長径 2.8cm、短径 2.4cm、器厚 0.6cm、重さ 5.2 g 試掘 No. １、Ⅱ b 層出土。

図３の資料は福建染付、碗の底部である。高台及び高台内にも釉が掛けられている。打割は底部の高台を残し一周しながら丁寧に施されている。長径 8.1cm、短径 8.1cm、器厚 1.9cm、底径は半径約 3.7 cm、重さ 108 g、試掘抗 No. ５、Ⅴ層～Ⅶ層出土。



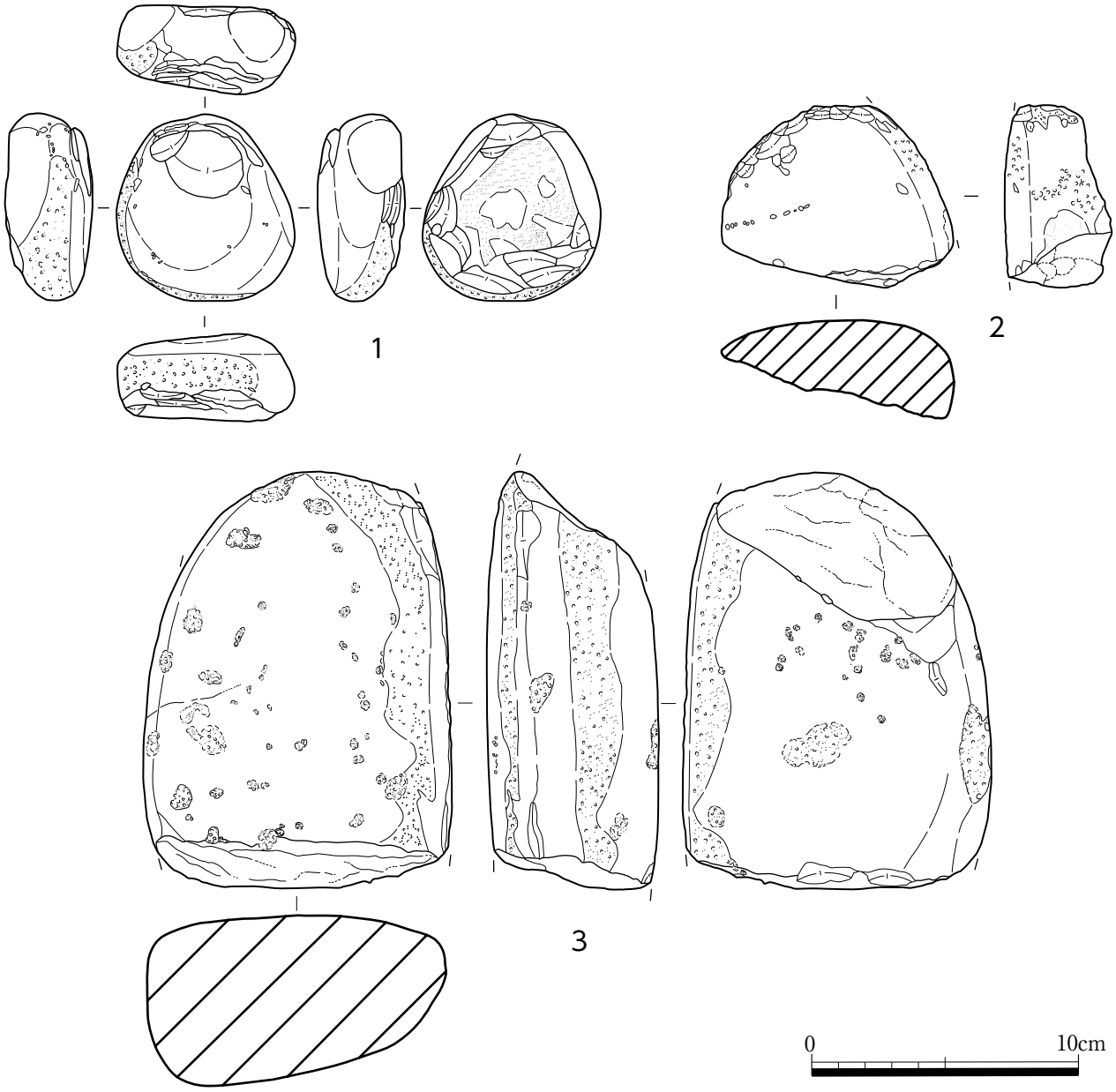
第 25 図　円盤状製品

図版 17　円盤状製品

10．石器

今回の試掘調査で出土した石器は磨石３点で、１点は完形、２点は欠損品である。第 26 図、図版 18 に図示し各資料について述べる。

図１は小型の磨石で完形資料である。形態は略三角形、厚みをもちながら全体に丸みのある印象を呈す。研磨面は表面の大部分を占め、側面にも幾つかの小さな研磨面が確認できる。敲打痕は側面から下面の周縁にかけてみられる。裏面全体に小さな打欠が幾つも確認できる。計測値は最大長 7.0cm、最大幅 6.7cm、最大厚 3.3cm、重量 256 ｇ、石質は斑岩、試掘 No. ４、Ⅲ層出土。



第 26 図　石器

図２の資料は磨石の破損品で全体の形態、大きさは不明、おそらく完形の半分程度の資料と考えられる。表面と右側面は顕著な研磨が確認でき上部の縁には小さな打欠が幾つもみられる。離面、その他の箇所は大きく打割され自然面が露呈する。計測値は最大長 6.8cm、最大幅 8.7cm、最大厚 3.7 cm、重量 258 ｇ、石質は砂岩、試掘 No. １、Ⅱｂ層出土。

図３の資料は磨石で上下端部が欠損し全体の形態が不明だが概ね半月形を呈す。クガニ石と呼称する場合もあるが用途による名称でないため今回は磨石とした。左右の厚みに違いがみられ表裏面、側面ともに研磨、一部に敲打面が縦長にみられる。計測値は最大長 15.6cm、最大幅 11.6cm、最大厚 6.4 cm、重量 1.800g、石質は砂岩、試掘 No. １、Ⅲ層出土。

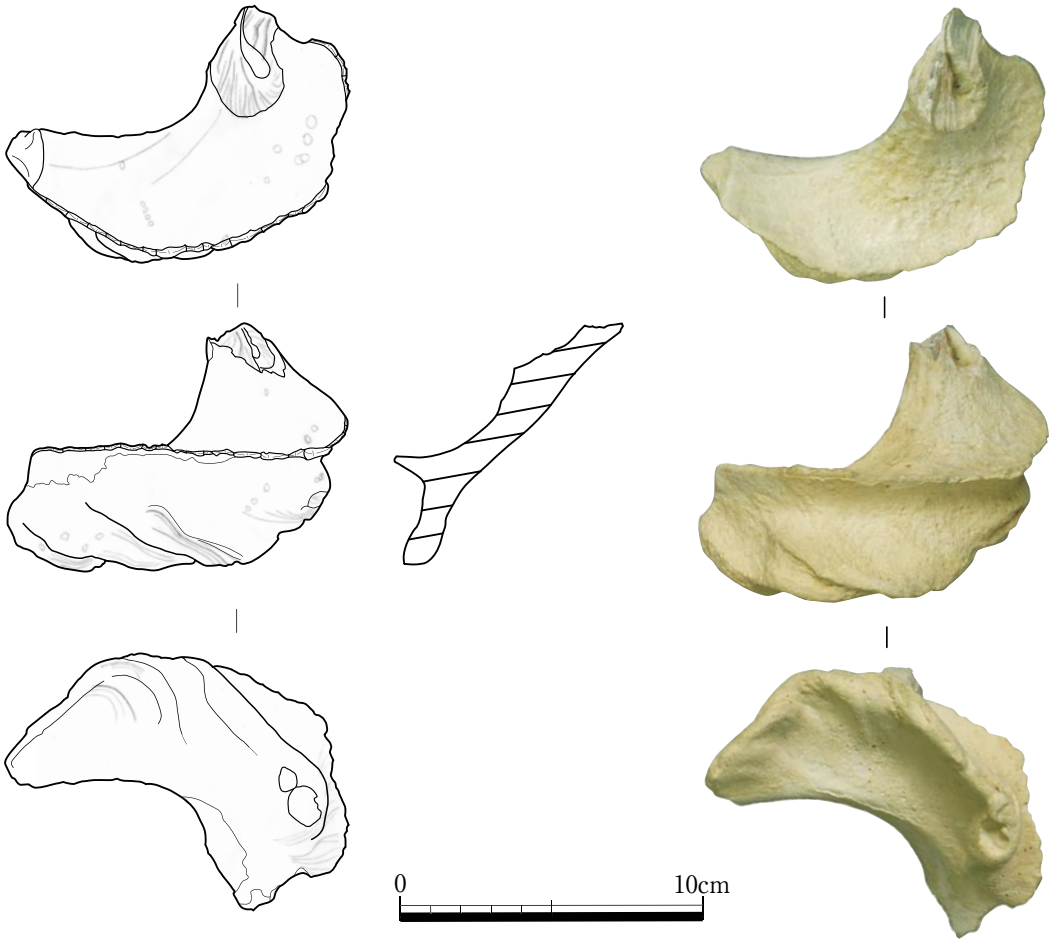
図版 18 石器

11. 貝製品

試掘 No. 6 の X 層以下で 1 点出土した。

図 1 はヤコウガイの臍部分で臍部に沿うよう細かい剥離が確認できる。殻の厚い臍部分を残すように剥離しているが、人工か自然かは明瞭でない。貝殻自体は破損後、水摩を受けたため、内殻の真珠層部分を含め、クレータ状のアバタが見られる。

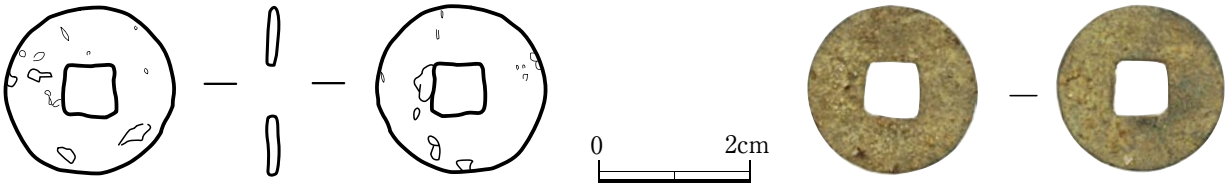
ヤコウガイの匙を取った残存部の可能性も考えられる。出土した試掘 No. 6 から貝塚後期の土器も出土しており、ほぼ同時期のもと考えられる。重さ 210g を測る。



第 27 図　図版 19　貝製品

12. 銭貨

1 点の出土。外径が 2.2 × 2.1cm でほぼ円形で、厚さ 1mm、内孔は 6 × 7mm の台形である。文字は確認できないが、従来の無文銭（鳩目銭）に比べて厚い。無文銭に比べて、しっかりした作りで、内孔の断面は角をなすが、外縁は打ち出しされ、やや円味を帯びることから、銅銭の類を無文銭に転用したものと思われる。試掘 No. 8 のⅣ層下部の出土。重量は 2.33 g。



第 28 図　図版 20　銭貨

13. 鉄製品

1点出土した。

図1はほぼ完形で、長さ6.1cm、頭部は径11mm × 8mmの楕円形を呈し、先端は尖る。先端の横断面は方形である。重量8.13gを測る。

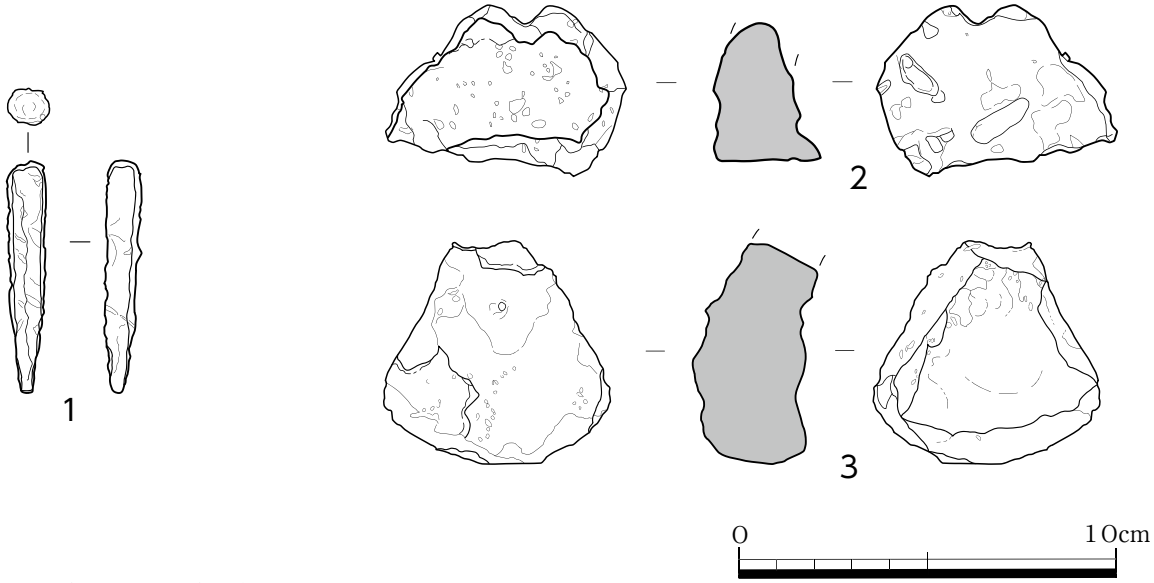
全体的に錆で膨らみ、円味を帯びるが、先端の横断面が方形を呈することから鉄釘と思われる。試掘No. 1、Ⅱ層から出土した。

共伴遺物に青磁、染付などがあり、所属年代も符合する。

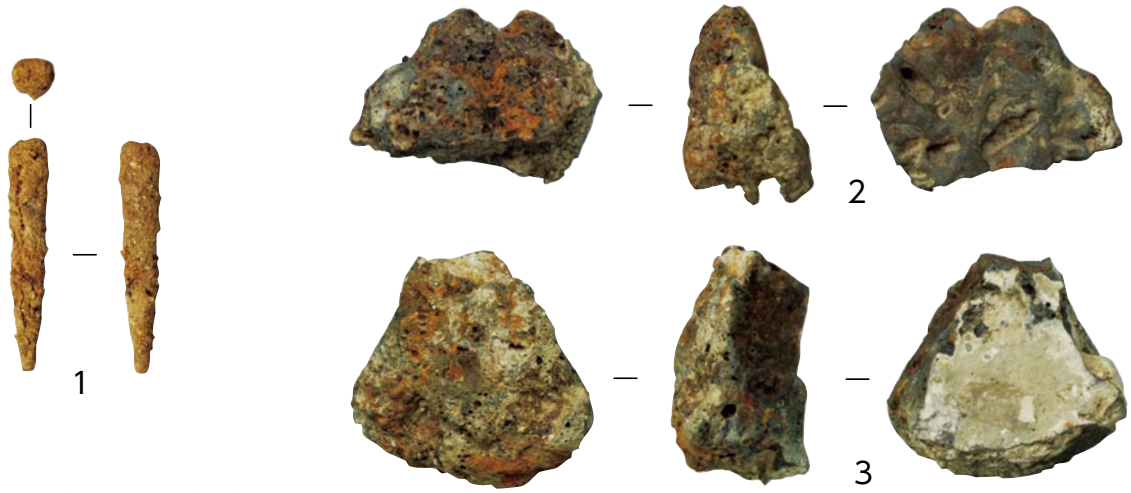
14. 鉄滓

2点出土した。

いずれも表面は気泡、アバタを呈し、裏面は熔面で円味を帯びる、同じような状況による鉄滓と考えられる。いずれも破損品で、図2は86gで試掘No. 1のⅡb層、図3は203gで試掘No. 6のⅦ層の出土である。共伴遺物をみると図1は青磁や沖縄産施釉陶器、本土産磁器、ウシやウマ骨などで、図3は染付や沖縄産施釉陶器などであることからほぼ同じ時期のものであろう。



第29図　鉄製品・鉄滓

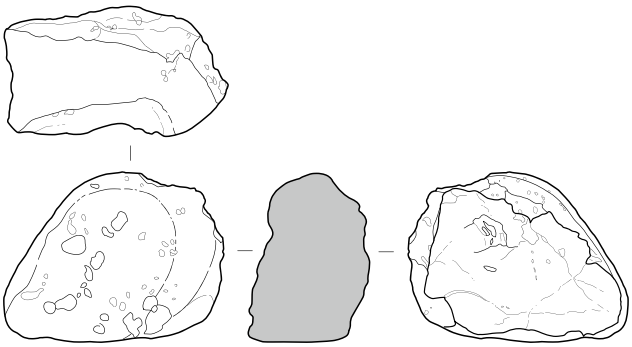


図版21　鉄製品・鉄滓

15. 軽石製品

今回の試掘調査で軽石は２点出土し、うち軽石製品と考えられるものが１点、２cm台の破片が１点出土している。製品としたものは小型で自然の状態でない痕跡がみられた。軽石は自然の場合、平坦な面はなく不定形な丸みを持つ形状だが当該製品は平坦面をもち、角をすり減らしたような丸みのある痕跡も確認できた。平面観は略三角形で緩い傾斜と面を成す。底面から左側面にかけて平坦な面をつくる。離面は割れた軽石の自然面が露呈するが時間の経過したと考えられる古い風化した割面と新しい割れが両者認められる。

製品を意図したものでなく自然の状態を利用し使われたと考えられるが手に収まる程度の大きさである。戦前に鍋の煤落しに使われたという口承もあり近・現代の遺物と考えてよい。計測値は最大長 5.6cm、最大幅 7.3cm、最大厚 4.3cm、重さ 63g、試掘 No. ２、Ⅶ・Ⅷ層出土。



第 30 図　軽石製品

図版 22　軽石製品

16. 瓦・煉瓦

平瓦、煉瓦に分類され、瓦 11 点、煉瓦 1 点計 12 点の出土である。出土地別にみると瓦が試掘 No. 1 で 3 点、試掘 No. 2 で 5 点、試掘 No. 4 で 3 点、煉瓦が試掘 No. 3 で 1 点の出土である。すべて近現代の時期のものであり、器種の分かる 4 点について図版のみ掲載した。　図版 1 ～ 3 は平瓦で表面にヘラナデ、裏面に布目痕が見られ、図版 4 の煉瓦は、残存部の大きさが縦 10.9cm、横 10.9cm、厚さ 6.0cm を測り平安山原 B 遺跡 (2008) と同サイズである。

第 23 表　瓦・煉瓦出土量

出土地＼種類		瓦 平瓦	瓦 不明	煉瓦	合計	試掘坑別合計
試掘 No. 1	Ⅱ	2			2	3
	Ⅲ		1		1	
試掘 No. 2	Ⅳ・Ⅴ	5			5	5
試掘 No. 3	Ⅲ			1	1	1
試掘 No. 4	Ⅲ	3			3	3
合 計		10	1	1	12	12

図版 23　瓦・煉瓦

17. 動物遺体

魚類ではハリセンボン1点、鳥類ではトリ？四肢骨2点、哺乳類ではジュゴン？1点、イノシシ6点、ブタ7点、イノシシ or ブタ不明4点、ウシ8点、ウマ2点、ウシ or ウマ3点、ヤギ1点の合計35点出土した。

出土地別にみると試掘No. 1ではⅡ層でジュゴン椎体1点、ウマL下顎前臼歯（p）、左下顎第3後臼歯（M3）、イノシシの右距骨、ウシの頭骨、左下顎骨、尺骨、中手（足）四肢骨の破片が出土した。Ⅲ層でイノシシの右脛骨、ブタの肋骨やヤギの橈骨が出土した。

試掘No. 2ではⅣ・Ⅴ層からブタの右上腕骨が1点得られたのみである。

試掘No. 3ではⅣ・Ⅴ層でブタ左脛骨、イノシシかブタの四肢骨片2点、S3からブタ右尺骨がほぼ完形で出土した。

試掘No. 4ではⅢ層でウシ歯破片が1点出土した。

試掘No. 5のⅨ・TP.5ではハリセンボン顎骨1点、イノシシ幼の左上腕骨（図版24）、イノシシ or ブタ右尺骨（図版24）、イノシシの四肢骨片が得られた。

試掘No. 6ではⅦ層でイノシシの四肢骨片が2点出土したのみである。

試掘No. 7ではⅤ層でトリ？の四肢骨2点、ブタ左踵骨、イノシシ or ブタ四肢骨が各々1点の計4点出土した。

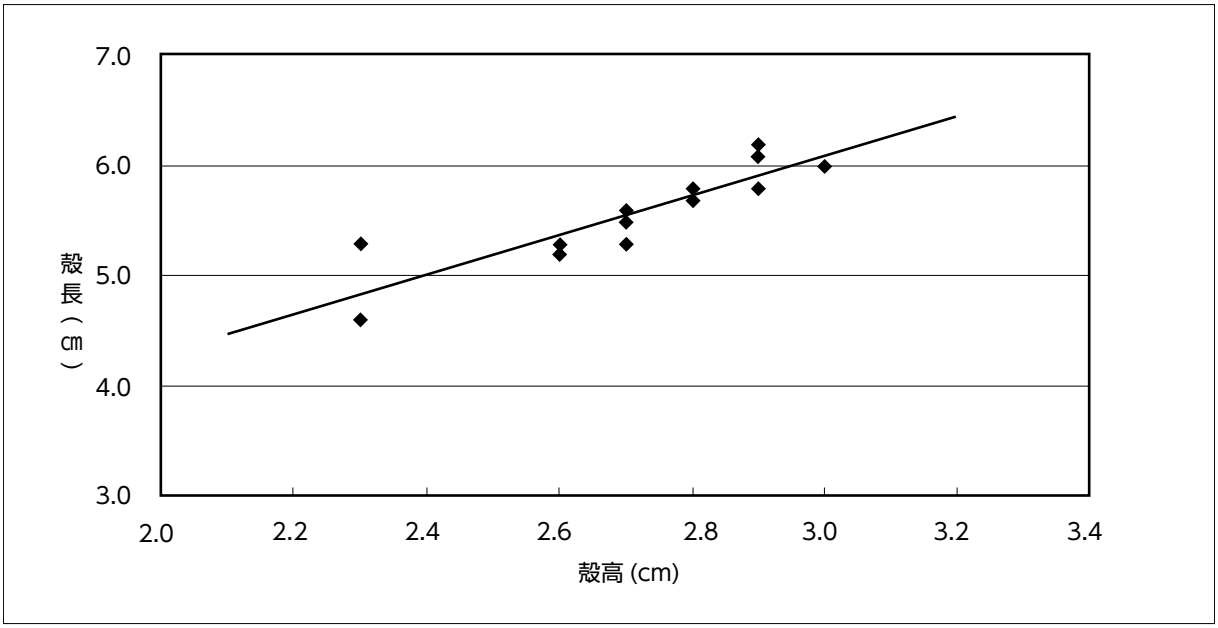
試掘No. 8ではⅦ層でブタ左大腿骨、右脛骨1点、ウシの四肢骨片、S2でウシ or ウマ四肢骨片が各々1点出土した。ブタの大腿骨は完形で、近位部の骨端が外れており、若獣で食用の可能性が高い。

第24表　脊椎動物遺体出土一覧

試掘坑番号	遺構名	層	種類	部位	左右	部位a	備考	個数	図版番号
試掘No. 1		Ⅱb	ジュゴン？	椎体				1	25
			イノシシ	距骨	R			1	6
			ウマ	下顎骨	L	p		1	23
						M3		1	22
			ウシ	頭骨	不		破片	1	15
				下顎骨	L		破片	1	16
				尺骨	不		破片	1	18
				中手（足）骨	不	s	破片	1	19
				四肢骨	不		破片	2	
		ⅡaⅡb	ウシ or ウマ	下顎骨	不		破片	2	21
		Ⅲ	イノシシ	脛骨	R	psd	幼	1	5
			ブタ	肋骨	不	-		1	9
			ヤギ	橈骨	不	d	中手(足)かも	1	24
試掘No. 2		Ⅳ・Ⅴ	ブタ	上腕骨	R			1	10
試掘No. 3		Ⅳ・Ⅴ	ブタ	脛骨	L	p・s		1	
			イノシシ or ブタ	四肢骨	不		破片	2	8
	S3		ブタ	尺骨	R	psd		1	11
試掘No. 4		Ⅲ	ウシ	歯			破片	1	17
試掘No. 5		Ⅸ・TP.5	ハリセンボン	上（下）顎骨				1	1
			イノシシ	上腕骨	L	sd・p・s・d	幼	1	4
			イノシシ or ブタ	尺骨	R	s	破片	1	7
			イノシシ	四肢骨	不	-	破片	1	
試掘No. 6		Ⅶ	イノシシ	四肢骨	不		破片	2	
試掘No. 7		Ⅴ	トリ？	四肢骨	不			2	2.3
			ブタ	踵骨	L			1	14
			イノシシ or ブタ	四肢骨	不		破片	1	
試掘No. 8		Ⅶ	ブタ	脛骨	R	s・d		1	13
				大腿骨	L	^ep・p・s・d	幼	1	12
			ウシ	四肢骨	不		破片	1	20
	S2		ウシ or ウマ	四肢骨	不		破片	1	
合　　計								35	

18．貝類遺体

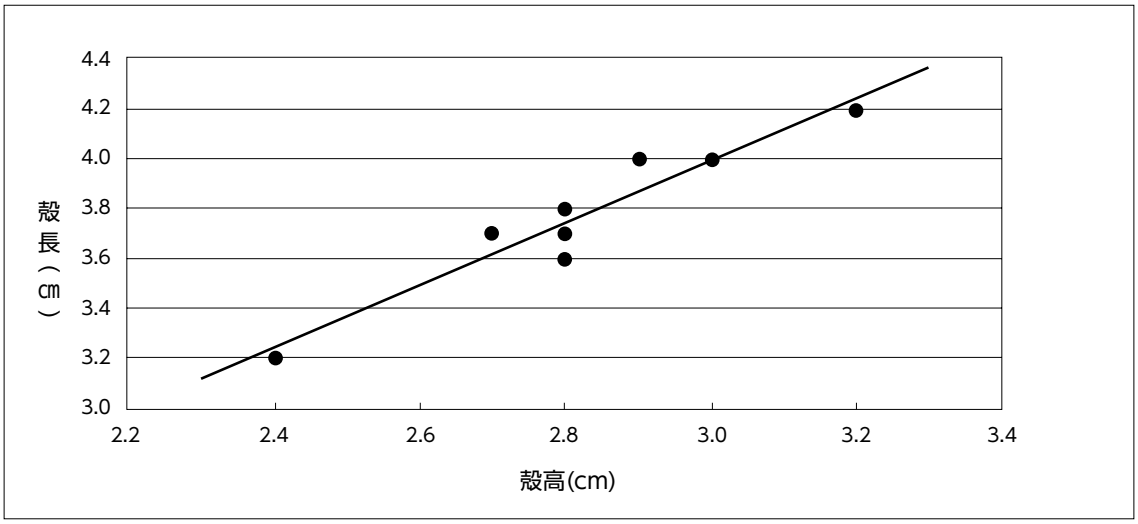
出土数は 85 点と少なく、陸産貝２種、巻き貝９種、二枚貝 12 種である。
出土地別には試掘 No. 3 が 80 点と最も多く、試掘 No. 5 が 4 点、試掘 No. 6 が 1 点の出土である。
内訳をみると最も多い試掘 No. 3 では
＜Ⅴ層＞
リュウテン科のチョウセンサザエのほぼ完形が 1 点出土。
＜Ⅶ層＞
マスオガイ、リュウキュウシラトリ合弁で出土（図版 25）することから、自然堆積と判断される。貝を計測するとマスオガイは 14 個体で、貝の大きさは最も小さいのは殻高 2.3cm ×殻長 4.6cm、最も大きいのは殻高 2.9cm ×殻長 6.2cm である。
リュウキュウシラトリは 6 個体で、貝の大きさは最も小さいのは殻高 2.4cm ×殻長 3.2cm、最も大きいのは殻高 3.2cm ×殻長 4.2cm と測る。
他にヤコウガイやマガキガイなどの巻き貝、リュウキュウザルガイ、アラスジケマンガイ、ユウカゲハマグリ、ホソスジイナミガイ、カワラガイ、シラナミなどの二枚貝が出土した。いずれも砂浜に生息するものである。
＜Ｓ３、６、７＞
溝状の遺構？から出土
S3 ではアラスジケマンガイ、S7 ネジマガイ、マガキガイ、ホシキヌタが各々完形 1 点出土。
S6 では陸産のオキナワヤマタニシ２個、パンタナマイマイが 4 個体、巻き貝ではニシウズガイ、マガキガイ、ネジマガキガイ、シマベッコウバイ、二枚貝ではカブラツキガイ、イソハマグリ、リュウキュウシラトリ、マスオガイ、ユウカゲハマグリなどが出土した。
試掘 No. 5 ではⅨ層でクマノコガイの完形２点、ヤコウガイのフタ完形（4.1㎝× 4.7㎝）1 点とクモガイ破片が得られ、試掘 No. 6 ではヤコウガイの破片が 1 点出土したのみである。



第 31 図　マスオガイの殻高ー殻長相関関係

第 25 表　貝類遺体出土量

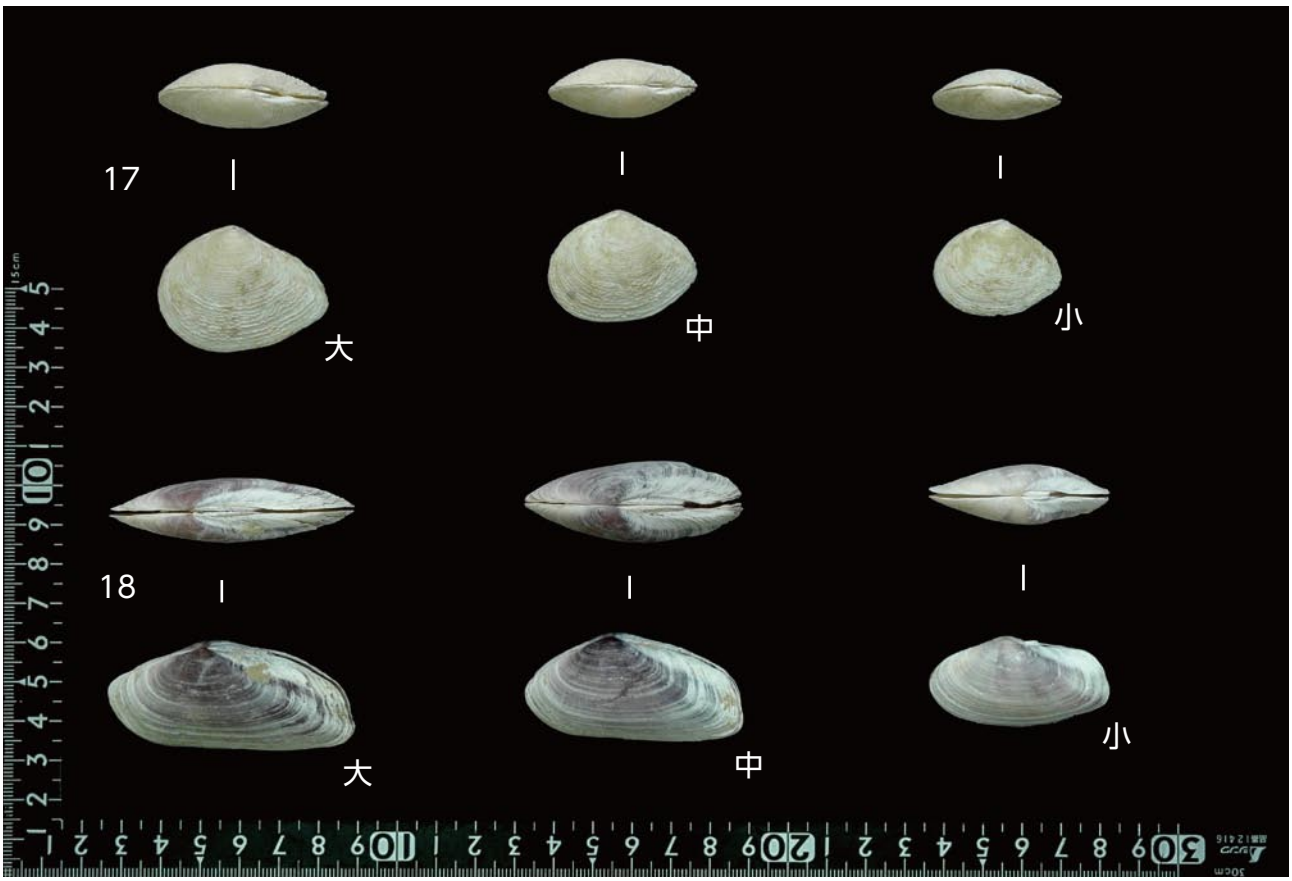
試掘坑番号	遺構名	層序	種類	貝種	完形		殻頂		殻頂破		殻底		肩部		破片		細片	備考	合計	図版番号
					L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R				
試掘 No. 3	S3		二枚	アラスジケマンガイ		1													1	24
	S6		巻陸	オキナワヤマタニシ	2														2	11
				パンダナマイマイ	4														4	12
			巻貝	ニシキウズ											2				2	5
				マガキガイ	1		1												2	7
				シマベッコウガイ			1											色残りc	1	10
				ネジマガキ			1												1	6
			二枚貝	アオリ？				1							2				3	13
				カブラツキガイ	1														1	15
				イソハマグリ	1	1													2	16
				リュウキュウシラトリ	1														1	17
				マスオガイ	1														1	18
				ユウカゲハマグリ				1											1	20
	S7		巻貝	ネジマガキ	1														1	6
				マガキガイ	1		1												2	7
				ホシキヌタダカラ	1														1	9
		Ⅴ	巻貝	チョウセンサザエ	1													完形孔	1	1
		Ⅶ上位	巻貝	クモガイ											1				1	8
		Ⅶ	巻貝	ヤコウガイ											3				3	2
				マガキガイ			1												1	7
			二枚貝	メンガイ											1			製品？	1	14
				マスオガイ	14	13		1										完対 14	28	18
				リュウキュウシラトリ	6	6												完対 6	12	17
				リュウキュウザルガイ				1							1				2	21
				アラスジケマンガイ				1											1	24
				ユウカゲハマグリ	1														1	20
				シラナミ A	1														1	23
				ホソスジイナミガイ	1														1	19
				カワラガイ	1														1	22
試掘 No. 5		Ⅸ	巻貝	クマノコガイ	2														2	4
				ヤコウガイ (フタ)	1														1	3
				クモガイ											1				1	8
試掘 No. 6		Ⅹ以下	巻貝	ヤコウガイ											1				1	2
合　計					42	21	5	5	0	0	0	0	0	0	12	0	0	0	85	



第 32 図　リュウキュウシラトリの殻高ー殻長相関関係

1.ﾊﾘｾﾝﾎﾞﾝ(上（下）顎骨）2.3.ﾄﾘ骨 4.ｲﾉｼｼ(上腕骨　L 幼）5.ｲﾉｼｼ(脛骨　R 幼）6.ｲﾉｼｼ(距骨　R）7.ｲﾉｼｼorﾌﾞﾀ(尺骨破　R）8.ｲﾉｼｼorﾌﾞﾀ(肢骨破）9.ﾌﾞﾀ(肋骨）10.ﾌﾞﾀ(上腕骨　R）11.ﾌﾞﾀ(尺骨　R）12.ﾌﾞﾀ(大腿骨　L 幼）13.ﾌﾞﾀ(脛骨　R）14.ﾌﾞﾀ(踵骨　L）15.ｳｼ(頭骨破）16.ｳｼ(下顎骨　L）17.ｳｼ(歯破）18.ｳｼ(尺骨破）19.ｳｼ(中手（足）骨）20.ｳｼ(肢骨破）21.ｳｼorｳﾏ(下顎骨破）22.23.ｳﾏ(下顎骨　L）24.ﾔｷﾞ(中手（足）骨）25.ｼﾞｭｺﾞﾝ(椎骨）

図版 24　上：脊椎動物遺体
　　下：貝類遺体 1（巻貝・陸産貝・二枚貝）



図版 25　貝類遺体２（上：巻貝・二枚貝）
（下：合弁貝、リュウキュウシラトリ・マスオガイ）

第Ⅴ章　まとめ

本試掘調査は、平成７～９年度にかけて行われた「キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査」の未実施箇所を行ったものである。現地調査は平成21年３月に行い、近世から戦前の溝やピットを確認した。出土遺物には、グスクから戦前にかけての遺物を中心に貝塚時代後期の土器や曽畑式土器が数点得られた。以下、今回の調査結果を概観しまとめとしたい。

調査地は、戦後米軍基地として機能していた地区である。一帯は基地建設の際に造成されており、旧表土を確認するまでには機械力でもって１ｍ近く掘り下げた。米軍造成土を掘りきると、グスク時代～戦前の土壌が表出する事が周辺の発掘調査結果から確認されており、今回の調査地においても概ね同様な傾向を追認できた。

戦前米軍が撮影した空中写真や『北谷町の地名』から、戦前における試掘箇所を実施した一帯は、北側に丘陵が南側に東シナ海が拡がっていたことが判る。それらに挟まれる場所に平安山集落が位置し、集落を南北に二分する形で旧道（ケンドー）が貫いている。今回の調査対象地は旧道よりも北側に位置しており、平安山原祝女殿内をはじめとする屋敷があったことが確認されている。

試掘実施箇所の土地利用状況をみると、南東側の試掘坑４箇所は平安山集落の居住空間に位置し、北西側の４箇所は田畑に位置すると想定できる。特に試掘No.１は「祝女殿内」の敷地付近であり、何らかの生活痕跡が残されているものと思われる[註1]。戦前の平安山集落は農業優良部落として県から表彰されるほどの純農村であった。生業の中心はサトウキビとイモ作りで、水田もあったが規模は小さく、ほとんど自家用にあてられたようである。それら屋敷跡や耕作地の分布は、面的な調査によって明らかになるものと思われる。

グスク時代の遺物は土器や青磁が少量出土するも、同時期の遺構を積極的に示す結果は得られなかった。本時期の遺跡の本体は、調査区に南接する平安山原Ａ遺跡であったと想定される。平安山原Ａ遺跡は、グスク土器や中国産陶磁器類が多数出土しており、また、15、16世紀に比定される海獣葡萄鏡が出土（二次堆積）している。同遺物は、民俗事例から集落の祭祀を司る「ノロ」の所有物としての伝製品とみられており、更に、前述した「祝女殿内」屋敷跡の存在が確認されていることから、当該地は平安山集落の成立を考える上で重要な位置を示すものと考えられる。また、調査区から南東400mに位置する伊礼原遺跡をはじめ、伊礼原Ｄ遺跡から多くの遺構が検出されていることや、本試掘箇所の北西側において千原遺跡（グスク時代）が確認されている事から、この時期には一帯に集落が拡がっていたものと想定される。

貝塚時代後期の遺物は土器を中心に定量出土しているが、明確な遺構を確認することはできなかった。過去の試掘調査の結果によって、より古い遺跡は丘陵と沖積地の接点に立地することが確認されていることから、試掘No.１・３・５といった丘陵麓か、平安山原Ｂ遺跡が本体として想定される。

貝塚時代早期の遺物は、曽畑式土器が２点出土したのみである。この結果から見ると、調査地一帯に同時期の遺跡は存在しないものと考えられる。キャンプ桑江北側地区では、比較的広範囲にわたって曽畑式土器が単発的に出土しており、本地区もその事象の１つと考えられる。遺跡の本体は伊礼原遺跡周辺に限定されるであろう。

試掘No. ２・４からはビーチロックが検出された。伊礼原Ｄ遺跡（資料整理中）の下層調査においてもビーチロックが確認されており、ビーチロック内やその下層からは曽畑式・室川下層式・仲泊式等に比定される土器が出土している。同事象から、伊礼から平安山原地区にかけて見られるビーチロックは、縄文時代後期までに形成され、その後砂丘化が進んだものと考えられる。

今回の調査は、過去に行われた試掘調査の結果を追認する形となった。補足的に平安山原集落の拡がりを確認することができたことが成果として挙げられよう。本報告が平安山集落の成因を考える一助となれば幸いである。

最後に、試掘調査の実施から報告書刊行に至るまで多くの方々の御指導、御協力を賜りました。様々な想いを纏めあげることができたのか、いささか心もとないですが、皆様方の御厚意に心から感謝申し上げます。

註１　本試掘調査後の平成21年度に実施した平安山原Ａ遺跡の発掘調査において（資料整理中）平安山ノロの屋敷跡が検出されており、その周囲からも多くの遺構が検出されている。遺構の範囲は、過去の試掘調査の結果から想定された平安山原Ａ遺跡よりも更に北西側に拡がる事が判明している。

＜参考文献＞

北谷町教育委員会　1992　『北谷町史　第三巻　資料編２　民俗　上』

北谷町教育委員会　1994　『北谷町史　第三巻　資料編２　民俗　下』

北谷町教育委員会　2005　『北谷町史　第一巻　通史編』

北谷町教育委員会　2005　『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査―伊礼原Ｂ遺跡ほか発掘調査事業―』

北谷町教育委員会　2006　『北谷町の地名―戦前の北谷の姿―』

北谷町教育委員会　2007　『伊礼原遺跡―伊礼原Ｂ遺跡ほか発掘調査事業―』

北谷町教育委員会　2008　『平安山原Ｂ遺跡―キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業（平成14・15年度）―』

北谷町役場　2008　『基地と北谷町』

附　編

第１節　調査に至る経緯

平成 21 年、北谷町教育委員会は、本町建設経済部施設管理課より、桑江伊平土地区画整理事業地内において排水路の工事を行う計画があるとの情報を得た。工事対象箇所は過去における文化財調査が未実施だった場所であった為、平成 22 年２月から３月にかけ、工事対象箇所の分布調査を実施した（第 33・34 図）。 調査対象地は、北谷町字伊平大作原に位置する。

第２節　調査の概要

１．分布調査

分布調査は平成 22 年２月 26 日と３月２日の２日間行った。分布調査の結果、工事予定箇所内にて人工的な平坦部を確認することができた。また、平坦縁部には土手や溝が認められ、土手表面は石灰岩礫が無造作に覆っていた。文化係内で上記の状況を検討したところ、何かしらの耕作に関わるものと判断された。そこで、平坦部の様相を確認する為、試掘調査を実施する事とした。

２．試掘調査

試掘調査は平成 22 年３月 15 日～３月 24 日の間に行った（実働６日）。試掘箇所は分布調査の結果確認された３箇所の平坦部に絞って任意に３箇所設定した。各試掘穴は北から順に①～③の番号をあて、人力で掘削した。試掘穴の面積は、①②は 2m × 2m、③は 3m × 1.5m と設定した。調査の結果、各試掘穴とも同様な堆積状況を示しており、概ね 20cm 程掘削すると地山に到達した。出土遺物は、近～現代の陶磁器類小片が数点出土するのみで、明確な遺物包含層や遺構面を確認することはできなかった。試掘穴①は、西側土手と溝の掘削も行ったが、目立った成果は得られなかった。

第３節　調査の成果

１．層序

今回の試掘調査では各試掘穴とも同様な堆積状況を示し、層序は３枚認められた。以下に各試掘穴の層序を一括して紹介する。

Ⅰ層：黒色腐植土（層厚１～ 2cm）粘りが強く、締まりは弱い。近年堆積した落葉類を取り除くと確認できる層。下部からビニールが露出した。

Ⅱ層：灰黄色粘質土（層厚 10 ～ 15cm）粘りが強く、締まりはやや強い。耕作土と考えられるが、畦やピット等は確認できなかった。出土遺物として、沖縄産無釉陶器、沖縄産施釉陶器、本土産磁器の小片（２～３cm 程度）が数点出土。その他、針金も出土している。

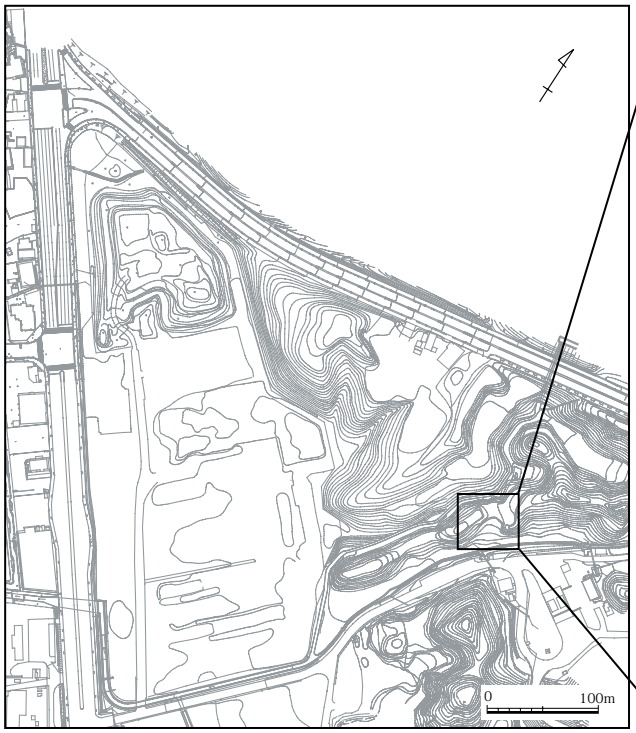
Ⅲ層：橙黄褐色粘質土（層厚 5cm ～）粘りが強く、締まりはやや強い。土手側では橙色が強く、平坦面側では黄色が強い。安定した堆積の層中には、板状の石灰岩礫が寝た状態で確認できる。付近一帯の地山にも同様な状況が確認できる事から、地山と考えられる。出土遺物無し。

２．まとめ

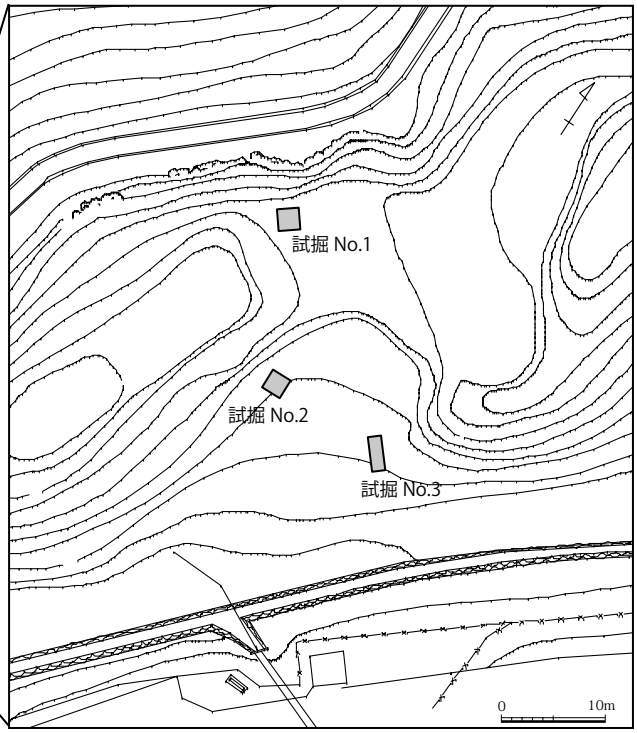
今回の調査結果では、当初考えられた耕作地を示す有力な遺構は確認できなかった。しかし、可視できる平坦部や土手等から、当該地における人の動きについて考察し、まとめとしたい。

ある時期、何らかの目的を持った人々が当丘陵地に入り、比較的平坦地を選地・切土したものと考えられる。切土して出た土は平坦縁部に盛り、土手を設け、溝を並走させたのだろう。その後、平坦面を利用して耕作を行い、掘削時に掘り起こされた石灰岩礫が土手を覆ったものと想定していたが、上記に述べたように耕作痕は認められなかった。

調査中、試掘穴周辺からヘラを１点表採した。①刃先が細く尖り、②刃部だけではなく柄の部分も鉄で出来ているものであった。同資料を 60 ～ 70 代の作業員数名に見て戴いたところ、①刃先が細く尖っているので新しい印象を受ける。②は、戦後の特徴である。との見解が得られた。また、Ⅰ層下部からはビニールが、Ⅱ層からは針金が出土している事から、当該地は戦前から戦後にかけて人の手が加えられたものと考えられる。



第 33 図　試掘調査位置図



第 34 図　調査位置拡大図

図版 26 出土遺物

図版 27　表採遺物

図版 28　試掘 No.1　左上･伐採状況　右上･完掘（南より）
左中･ビニール露出　右中･針金出土
左下･土手断面（南より）　右下･溝断面（南より）

図版 29　試掘 No.2、No.3　　左上･No.2Ⅱ層検出　右上･No.2Ⅲ層検出
左中･No.2 完掘（東より）　右中･No.3Ⅱ層検出
左下･No.3Ⅲ層検出　右下･No.3 完掘（南より）

報 告 書 抄 録

ふりがな	はんざんばるちくしくつちょうさ
書名	平安山原地区試掘調査
副書名	伊礼原Ｂ遺跡ほか発掘調査事業
巻次	
シリーズ名	北谷町教育委員会文化財調査報告書
シリーズ番号	第 33 集
編著者名	松原哲志・山城安生・島袋春美・上地千賀子・呉屋広江
編集機関	北谷町教育委員会
所在地	〒 904-0192　沖縄県中頭郡北谷町字桑江 226 番地　TEL　098-936-3159
発行年月日	2011 年（平成 23 年）3 月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積㎡	調査原因
はんざんばるちく 平安山原地区	おきなわけん 沖縄県 ちゃたんちょう 北谷町 あざいへい 字伊平 はんざんばる 平安山原	473260		26° 19′ 20″	127° 45′ 26″	2009.03.02 ～ 2009.03.27	200㎡	区画整理事業
うふさくばるちく 大作原地区	おきなわけん 沖縄県 ちゃたんちょう 北谷町 あざいへい 字伊平 うふさくばる 大作原	473260		26° 19′ 20″	127° 45′ 39″	2010.02.26 ～ 2010.03.24	12.5㎡	区画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
はんざんばるちく 平安山原地区	集落跡	貝塚時代後期 ～戦前	溝・ピット	曽畑式土器・貝塚時代後期土器・グスク土器・青磁・染付・本土産磁器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・陶質土器・円盤状製品・瓦・石器・貝製品・銭貨・鉄滓・獣魚骨・貝類遺存体	近世～戦前のピット・溝を確認
うふさくばるちく 大作原地区		戦前～戦後		沖縄産陶器等	

要約	今回の試掘調査地は、平成 15 年 3 月に返還されたキャンプ桑江北側地区において、試掘調査が未実施だった箇所である。平安山原地区の試掘調査の結果、貝塚時代早期・後期、グスク時代、近世～戦前の遺物が出土した。遺構は、近世～戦前のものと考えられる溝やピットが確認された。大作原地区では、戦前から戦後の遺物が数点出土したが、遺構は確認されなかった。

北谷町文化財調査報告書　第33集
平安山原地区試掘調査
－伊礼原Ｂ遺跡ほか発掘調査事業－

編　集：北 谷 町 教 育 委 員 会
発行年：2011（平成23）年3月
〒904－0192　沖縄県北谷町字桑江226番地
ＴＥＬ　098－936－3159
印　刷：株式会社平山印刷
〒901－0225　沖縄県豊見城市字豊崎3-59番地
ＴＥＬ　098－995－6233